
エンドレス・ゲート・オンライン ~生まれたたての魔王を殺せ~

ころみごや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレス・ゲート・オンライン　　～生まれたての魔王を殺せ～

【Nコード】

N7539X

【作者名】

ころみじや

【あらすじ】

エンドレス・ゲート・オンライン　通称？EGO？は、稼働を始めてから一年が経過していた。その間、世界中で百万人以上の人々がEGOにログインし、MMORPGならではの仮想世界を楽しんでいた。ルイピスタ「タスピールもまた、彼らと同じく、EGOへのログインを試みるのだが、EGOにはもう一つ、別の顔が存在した。目を覚ましてみれば、ルイは真つ暗な空間へと転移し、辺りには大勢のモンスターが潜んでいた。そして、ルイの許へ届けられた一通のメッセージ。そこに書かれてあったのは　　∴。　　（

戦闘シーンは2・5より始まります

囚人が一人、失命した。

食欲旺盛な悪魔に囲まれたのが運の尽きだ。

命の証^{あかし}を失い、肉塊と成り果てた囚人の許に群がり始めたかと思えば、四散を赦すことなく手足を引き千切り、頭の上から指の先まで、跡形も残さずに食い散らかしていく。

意識を失うことが出来れば、或いは多少の救いがあったのかも知れない。けれどもその囚人は、自身に群がる悪魔どもの牙や爪によって、拷問にも勝るとも劣らない恐怖と絶望を脳に植え付けられ、髑^{むく}り殺されたのだ。痛かっただろう、苦しかっただろう、辛かっただろう。

そしてまた、その囚人は、今から七日後に二度目の死を迎えなければならぬ。たった今、死のカウントダウンが幕を開けたのだ。

記憶の引き出しに鍵を掛けていないとすれば、わたしはその囚人の名前を知らないし、言葉を交わしたこともないはずだ。つまりは、大切な人を失ったわけではないのだ。

それなのに、何故、わたしは泣いているのだろうか。

「……………」

次なる標的を決めた悪魔どもは、ゆつくりと黒羽を羽ばたかせながら距離を測り、わたしに向けて下卑た笑いを浴びせる。鋭く尖った爪には彼の血がこびり付き、肉片が挟まっているに違いない。想像するだけでも吐き気を催しそうになるが、喉を通る前に強引に押し戻し、逆流を拒絶する。これも全ては意識的なものでしかないけれども、無理やりにも鼓舞しなければ戦えないし、立ち向かうことも出来ない。

でも、だからこそ、わたしは自分に言い聞かせる。

「わたしは死なない、…………絶対に、死ねない……………」

目の前に立ちはだかる現実から目を背けてはならない。そんなこ

とをすれば、此処ではあつという間に死することになる。全神経を研ぎ澄ませ、敵の動きに集中しなければ、次に殺されるのはわたしだ。こんなところで死んでたまるものか。

「絶対に……生き残ってみせる……」

黒衣を身に纏ったわたしは、左手を横に伸ばして肩の高さへと上げると、

直後、鈍い輝きを放つ黒い鎌が何もない空間に形成し、左腕に巻きついていく。

黒い鎌を視界に映し、悪魔どもは臨戦態勢を整えるが、その姿を視認することなく、わたしは誰にも聞こえないようにそつと呟いた。

「だから、わたしを恨まないで」

一秒後、悪魔ども目掛けて、わたしは死神の如く空を駆けていた

…

黒から白に、瞼の裏が変化する。

静寂と暗闇に整われた空間に、不躰にも調和を試みたものの、釣り合いを保つには些か眩すぎたらしい。我慢の限界を早々に見極め、瞑っていた瞼をおずおずと開いてみると、だだっ広い空間が視界に映し出され、生まれたてのアバターを出迎えてくれた。

見たことのない造形が視覚に訴えかけ、3Dオブジェクトが見事なまでに空間的形象を表現している。仮想世界とは思えないほどの精巧な作りが施された空間は、各プレイヤーに現実世界との境目を曖昧にし得るであろう迫真性の再現に成功していた。

息を吸い、緩やかに吐いてみる。

何気ない動作一つを取ってみても、此処が如何に優れた技術によって生み出されたのかを認識し、同時に驚嘆することができた。

生まれながらに人が持つ五つの感覚のうち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚に携わる神経細胞のエクスポート技術を可能とするデータベースプログラムが開発されたことによって、今現在、オレが存在する仮想世界 エンドレス・ゲート・オンライン 通称？EGO？は、知覚を除く全ての感覚を感じ取ることが可能なMMORPGとして、コンピュータネットワーク上に稼働し、電子回路の海を彷徨い続けている。他にはないシステムの構築、その導入によって、EGOが現実世界において多大なる支持を得たのは、もはや自然の摂理とも言えるだろう。

だが、不可解な点が一つ。

「……此処、何処なんだ……？」

黒を基調とした空間は、おどろおどろしい装飾が室内を染め上げるかのように飾り付けることによって、過剰な不気味さを演出していた。

オレは今、生まれて初めてEGOにログインしたわけだが、この

場所が勇者軍の城下町ではないことぐらいは理解できる。

E G Oに初めてログインしたアバターは、勇者軍が陣地とする城下町へと強制的に転移し、チュートリアルを担当するNPCノンプレイヤーキャラクターによって初歩の動作から行動に至るまで、一つ一つ丁寧にレクチャーされるはずなのだが、おかしなことにNPCの姿が見当たらない。そればかりか、室内には他のプレイヤーが一人もいなかった。何処と無く怪しげな雰囲気漂っているようにも思えるが、これではまるで魔王軍の城内に迷い込んでしまったみたいだ。

「誰も……いないのか？」

どうやらオレのアバターは椅子に腰掛けていたらしい。肘掛け付きの豪華な椅子は床に固定されていて、背には弾力性のある柔らかい素材が使われていた。

「初期装備にしては随分と質がいいみたいだが……」

徐おもむろに椅子から立ち上がると、両肩から腰の辺りまで、そして足の先まで、至らぬ隈なく全身を見回してみる。黒に染まった外套のようなものを身に纏い、加えて服装から履いている靴に至るまで、全てが黒に統一されていた。

「暗闇に同化しそうな装備だな……」

眉ひそを顰め、嘆息を漏らす。

想像していたものとは異なる状況に、思考が追いつかなくなっているようだ。

「ん……、扉か？ あれが初めの門ゲートなのか？」

視線を前に戻すと、鈍い輝きを放つ扉を見つけた。多少の距離はあったが、オレが腰掛けていた椅子と向かい合う場所に入出口が用意されていたらしい。一先ず、この部屋から抜け出して、チュートリアル担当のNPCを捜し出さなければならぬだろう。それでも見つからない場合は、一旦ログアウトして説明書を読み直すことになりそうだ。

少々強引にだが自分自身を納得させると、オレは扉の前へと移動してみる。

地を踏み、体を動かし、歩を進める。知覚は存在しないはずなのだが、現実と変わらぬ皮膚感覚を認識し、衣類と靴による確かな肌触りを手ごたえとして感じ取った。これは現実か？

黒に塗られた鉄扉の握り手を左右の手で一つずつ掴み、腕に力を込めて押してみる。オレの手に反応し、鼓動するかのよう鉄扉が黒から赤に、そしてまた黒に染まり返っていく。

「おわ……、つと」

錆びの付いた効果音を室内に響かせながら、少しずつ鉄扉が動き始めたかと思えば、やがてオレの力を借りることなく独りでに開いていく。これもE G Oのシステムによるシナリオの一部と考えてもいいのだろうか。それにしても初期の段階から凝った演出をするものだ。

だが、オレの思考はすぐに遮られることになる。

あろうことが、鉄扉の向こう側には大量のモンスターが待ち構えていた。

「お……おいおい、なんだよこれ……一体全体どうなってんだ……」
目を疑いたくなる光景に、オレは思わず半歩後ずさる。まさかいきなりモンスターとの戦闘をこなさなければならぬわけでもあるまい。下手すればチュートリアルに出会う前に死亡することになるぞ。たとえE G O初心者だとしても、そんなみつともない死に方は御免だ。

「扉が……開いただと？」

すると、モンスターの群れの中心から細く尖った声が聞こえてきた。声の主は驚きに満ちているのか、ありえないものを見てしまったかのような表情を作り、オレの姿を視認する。

人型の姿を成したモンスターは、恐らくは人狼の種族に属しているのだろう。狼のような顔で人語を扱い、人間と同じように衣類を身に着けていた。しかもそれだけでなく、拳銃には武器まで装備していやがる。E G Oではモンスターにも武器を装備することができるのか。

「ッ」

予想外の展開に焦りを感じ始めたが、突然、上部に黒い影が差し込んだ。

「よおー、お前さん見ない顔だな？ どうやってそこに入ったんだよ？」

陽気な喋り方で頭上から話しかけてきたのは、赤銅に輝く両翼を左右に広げ、宙を旋回するモンスターだった。その姿形から察するに、このモンスターは悪魔族に属しているに違いない。

両翼の先端には鋭く尖った棘のようなものがあり、触れただけでダメージを受けてしまいそうだ。両翼を含めれば、全長三メートルは優に超えているだろう。空を移動可能な悪魔を前にして、もはや逃げる場所は何処にもない。絶望が支配しつつある状況に、オレは情けなくも尻餅をついてしまった。

「……あ、悪魔も……言葉を話すのか……っ!？」

「うはは、話しちゃ悪いってのか？ お前さんだつて話してるじゃねえかよ、なあ？」

頭上で風を切り、ぐるぐると弧を描き続ける悪魔は、人狼と同じように人語を話したかと思えば、人間と差ほど変わらぬ容姿を持ち合わせてもいた。人型に近い姿を持つモンスターは、人語を話せるシステムにでもなっているのか。

「ヨシルカ、邪魔」

人狼と悪魔が人語を話すことに驚きを隠せないでいると、更に別のモンスターの声が耳に届く。少し低めだが、けれども女性特有の美しさを含んだ声の持ち主は、既に鉄扉のそばに佇たたずんでいた。

「へいへい、すまねえこつた。アンノルには逆らえねえからなー」
「そこを退いて」

優しさと柔らかさを欠いた、淡々とした口調で話すのは、黒衣を身に纏った女性だ。

声だけでは断言し辛かったものの、フードの奥に見え隠れする人物は、明らかに女性と認識可能な容姿をしていた。しかし、彼女に

もまた人狼と悪魔のように驚くべき特徴があった。

「……う、浮いてる？」

両翼を介し空を舞う悪魔とは異なり、彼女は身動き一つせずに二十センチほどの高さには浮いていた。ふわりふわりと漂うわけでもなく、まるでそれが当たり前のことのような印象を受ける。身に纏う黒衣はやけに大きめで、体格には合っていないらしく、異様なほどに裾が長い。

ほんの少しだけ顔を覗かせる爪先つまさきの存在によって、上半身のみはモンスターではないことは理解できる。ただ、それではまだ不十分だ。此処にいるということはつまり、彼女もまた彼らと同じようにモンスターの仲間なのだろう。オレはまだ、彼女がどんな種族のモンスターなのかを見破ることができないでいる。

「浮いているのが、そんなにおかしい？」

風を切らずに音もなく距離を縮める彼女は、深めに被っていたフードを取ってみせると、表情を変えることなく小首を傾げてみせる。そこで改めて、オレは彼女の素顔を捉えた。

「わたしの名前は、ロア・アンノル。見ての通り、死神族のアバターを選択したわ」

「死神族のアバターだって？」

死神の姿を成した彼女　ロア・アンノルは、ほんのりと蒼が差した黒髪をしている。後ろ髪を短めに切り揃え、前下がりに髪の長さが整えられているのが印象的だ。

両耳は髪に隠されていて、それなりに伸びた前髪が赤に染まる瞳をほんの少しだけ隠してしまうのが残念だが、彼女の特徴的な髪型の性質上、うなじはしっかりと見えているはずだ。背後に回り込む機会があれば、是非一度この目で確かめてみたくなる。……いや、待て。モンスターを相手にオレは何を言っているんだ。

「死神族のアバターなんて初期設定時の選択項目には入ってなかったぞ」

もしかすると隠れアバターの可能性も無きにしも非ずだが、ログ

インして早々にお目に掛かれるほど甘くはない。それ以前に、不可解なことが多すぎて頭が混乱しそうだ。

「それに……なんでお前には名前があるんだ？ MOBモンスターが特定の名前を持つなんておかしいだろ」

通常、NPCの中でも敵を表すMOBモンスターには、各々の形体によって呼び名が存在する。チュートリアルを担当するNPCにクエストの進行に携わるNPC、更にはEGOに於けるボスマンスターなど、NPCの形態は様々だが、総称とは別に特定の名前を持つMOBモンスターは限りなく少ない。個体ごとに意識を持って言葉を交わし、拳句には自らの意思に従い行動を取るなど、もはやそれはNPCやMOBの領域を超えているので、一人のプレイヤーとして認めても遜色ないと言えよう。

だからこそ、解決することのできない問題が浮かび上がってくる。彼女は、一体何者なのか。そして先ほどの人狼と悪魔も同じく。

「わたしがMOBモンスター？ ……それはジョークではなく、真面目に言ってるの？」

少し呆れ顔になった彼女は、小さく息を吐く。その後ろでは、天井付近をぐるぐると旋回する悪魔を筆頭に、モンスターの笑い声が其処彼処から溢れ出し、耳を劈いた。

「なっ、なんだよ、何がおかしいんだっ」

尻餅をついたまま、オレは声を荒げた。意味も分からずに笑われ、てしまい、恥ずかしさから頭に血が上っていく。できることなら、今すぐにもこの場から逃げ出したかった。それもこれも全ては現状が物語っていると云えるだろう。

たとえ今此処でログアウトを試みたとしても、新たにログインする際にアバターが出現する場所は変わらない。言うなれば、オレには逃げ場など存在しないのだ。

一つの命を守り切り、生き残ることを半ば諦めているからこそ、モンスターを相手に反論するような間抜けな行為を実行に移せるのだろう。だがしかし、目の前に立ちはだかる大量のモンスターにま

ともな抵抗一つできずに死んでしまうのであれば、次に活かせるように少しでも情報を得ておきたいところだ。

そんなオレを見かねたのか、ロアは宙に浮きながら限界まで近づくと、そつと、手を差し伸べてきた。立ち上がるように促しているのだろう。

それがまた羞恥に拍車を掛け、思考が暴走を始める。モンスターの手助けなど借りるものか。

ロアの手を振り払い、オレは一人で立ち上がってみせた。

「……その様子では、三日間生き残れば大したものね」

折角の好意を無下にされたというのに、ロアは機嫌を損ねることもなく、冷静にオレの様子を分析に掛かる。

「生き残るって……此処でか？」

反問し、ロアが頷く姿を確認する。口を開く前に一旦後ろを振り返し、全体に視線を流していく。途端に、声を上げて笑っていたモンスターたちが静まり返った。

ひよつとすると、ロアはボスモンスター級のNPCなのだろうか。だとすれば、安易に歯向かうような態度を取れば、あっという間に殺されかねない。しかしながらロアをNPCとするには自らの意思を持ちすぎているし、そもそもNPCがプレイヤーの態度によって意見を変えるなどあり得るのか。まるで矛盾が頭の中を蝕んでいくかのようだ。

役に立たない思考を中断し、こちらを向き直すロアの赤い瞳に視線を向ける。

「ステータスが低い者は、此処では生き残ることが困難と言えるわ。たった一度でも死んでしまえば、あなたもわたしもその時点でゲームオーバーとなるんだから、時には形振り構わず助けを乞いなさい。囚人と言えども、わたしたちは皆仲間みななんだから」

「……囚人？ オレが？」

残念なことに、オレにはロアが何を言っているのか理解することができない。EGOに初めてログインする初心者プレイヤーとはい

え、あまりにも情報が不足している。

いや、それはともかくとして、彼女は聞き捨てならない言葉を口にしていた。

「一度でも死ねばゲームオーバーって、どういうことだ？」

EGOでは、インターネット上にて発売されたデータプログラムを購入した者にIDCチップと呼ばれるものを発送している。IDCは子供の掌に収まる大きさだが、その中には膨大な量のデータが含まれていて、それを基にEGOの公式サイトでアカウントを取得することが可能だ。

ログイン前に目を通した説明書によると、EGOでは一つのアカウントに付き、三つのアバターを作成することが可能となっているのだが、EGOには他のMMORPGとは異なる点が存在する。それは、一つのアカウントに付き、作成したアバターの数に関係なく二回しか死ぬことができないことだ。

作成したアバターが一つなら、二度の死をやり直すことができるが、三度目の死を体験したアバターはEGOにおいてゲームオーバーとなり、強制的にアカウントを消失してしまう。

また、メインアバターの他にサブのアバターを一つ作成しているプレイヤーの場合、メインとサブのアバターによって、既に二つの命を扱っていることになるので、どちらかのアバターが二度目の死を体験し、残る一つのアバターが死してしまえば、アバターを一つしか作成していないプレイヤーと同じようにアカウントが消滅することになる。

このシステムの存在によって、EGOのプレイヤーの九割以上が一つのアバターしか作成しておらず、サブのアバターを作成するプレイヤーは変人扱いされるほどだ。プレイヤー同士で殺し合うPKシステムも採用されているEGOにおいて、高額を支払い購入したIDCが三度の死により塵と化すシステムには賛否両論の声が上がっているが、逆にこのシステムが存在するからこそ、EGOのプレイヤーは命を大事にし、常に危険と隣り合わせのスリルある仮想世

界を満喫しているのも事実だった。全世界で絶大なる支持を得て、総アカウント数が一千万を超えたのも納得せざるを得ないだろう。

「……あなた、本当に何も知らないの？」

目を疑うものを見てしまったかのように、ロアは眉間に皺を寄せていく。

E G Oのプレイヤーであれば誰もが知っているであろう三つの命のシステムを、ロアは知らなかった。否、知らない振りをしてオレを騙そうとしているんだ。

たった一度でも死ねばゲームオーバーとなり、アカウントを消滅させられると嘘を吐いて、E G O初心者のオレを脅かして、そして……それから、どうするんだ？

そんな嘘を吐いて、彼女たちに一体何の得があるんだ。

ロアの瞳は、真っ直ぐにオレの姿を捉えている。嘘を吐いているようには到底思えない。

まさか、本当に……。

「まあ、別にいいわ……。それよりもまず、あなたに聞いておきたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

ログイン早々、何らかのクエストが発生したのか、ロアは自分の瞳に映るものをオレの後ろへと移した。

「その扉、どうやって開けたの？」

顎の先で指すのは、黒色の鉄扉だ。その言葉を合図に興味の対象が移ったのか、ロア以外のモンスターたちも皆一様に鉄扉に向けて視線をぶつけている。

「鍵なら掛かってなかったぞ」

「嘘言わないで。あなたが出てきたその部屋は開かずの間と呼ばれているのよ？ この一年間で誰もその扉が開いたところを見たことがないわ」

その言い方から察するに、部屋の外側からは入ることができなかつたらしい。とはいえ、鍵が掛かってなかったのは事実だ。確かに

見た目は重そうな扉ではあるが、押してみれば呆気なく開いてしまった。

「今見ただろ、扉が開くところを」

「っ、それはまあ……確かにそうだけど……」

ロアは納得のいかない様子ではあるが、目の前で起こった現実をありのままに伝えたままでだ。

「そもそもだな、EGOに初めてログインするプレイヤーに対してEGO内で起こった現象について質問されても、オレはまだ説明書に目を通しただけなんだから何も分からないぞ」

オレが質問をするのが当たり前であって、されるのは明らかにおかしい。EGOでの案内役を務めるNPCは一体何処にいるんだ。もしかしてロアがチュートリアルとでも言うつもりか。

「あ、あなた……今初めて、EGOにログインしたの？」

今までは冷静さを保っていたロアが、大げさとも言える反応を示す。しかもそれはロアだけではなく、オレとロアの話聞いていた沢山のモンスターが揃いも揃って同じ反応を取った。

一体全体、彼らは何に驚いているのか。EGO初心者のおレには、それすらも理解できない。

「……お、おう。そうだけど……そんなに驚くことか？」

テストが終了し、EGOが稼働を始めてから一年が経過した今現在、オレは自宅でEGOのIDC^{チップ}を発見し、アカウントを作成した。

EGOでは、初期設定の段階において様々な選択肢を迫られ、回答を義務付けられている。

性別、体格、容姿、これらはエクスポート時に自動的に認識され、属性と種族の項目に関してはプレイヤーの好みによって選択し、それぞれの属性と種族により、特定の特技と魔法を習得可能なシステムだ。

IDCをコンピュータ上にエクスポートして初期設定を終えると、IDCは自動的にデータを消去する。これは登録したプレイヤー以

外には扱うことができないようにするためだ。

その後、コンピュータ上でEGOを起動し、IDとパスワードを入力すると、強烈な電波信号が脳に送り込まれ、半睡眠状態へと陥る。その状態において、プレイヤーの意識だけがEGOに転送され、現実とは異なる仮想世界を満喫することができるわけだ。快適な環境でプレイするために、現実世界のオレは部屋のベッドで横になっている。はたから見れば睡眠を取っているようにしか見えないので、勉強の息抜きには丁度いいだろう。

また、EGOからログアウトする際には、EGO上でウィンドウを開いてコマンドの入力を実行に移せばいい。それ以外にも、EGOにログインしている状態で現実世界の体に触れられると、人体への危険を察知し、強制的にログアウトするらしい。まだ一度もログアウトしたこともなければ、ウィンドウを開いたこともないので、試すべき行動は沢山ありそうだ。

「それじゃあ、此処が何処なのか……知らないの？」

「勇者軍の城下町だと嬉しいんだけどな」

あからさまに溜息を吐き、何がどうなっているのか分からないと言いたげな態度を取った。

もはや、此処が勇者軍の陣地ではないことぐらい理解している。

ログインすると同時に黒い部屋に出現したかと思えば、数え切れないほどのモンスターに遭遇し、逃げ場を失ったんだからな。あまり考えたくはないが、察するに此処は魔王軍の陣地内かもしれない。

どうやらオレはとんでもない場所に飛ばされてしまったらしい。こんな状況では幾ら命があろうとも足りるわけがない。ログインする度に鬨り殺されるのが目に見えている。

そんなオレの考えを見透かしたのか、ロアは至って真面目な表情で話を続ける。

「此処はね、魔王軍の陣地にある魔王城の城内なの。……そして、あなたがいた部屋は」

王の間。

ロアは、そう口にした。

魔王城の城内であろうことは薄々気づいてはいたが、しかしまさかオレが飛ばされてきたところが王の間だとは予想だにできなかった。「此処が、王の間……」

後ろを振り向き、室内の様子を改めて見渡してみる。そう言われてみれば確かに、魔王が坐するに相応しいとも思える黒々とした雰囲気作り上げられていた。

しかしそうになると、オレが座っていた椅子は話の流れから察するに玉座になるわけだ。室内が暗すぎて、鉄扉を開けてまともな光が差し込まれるまで気付かなかっただろう。先ほどは目に付かなかったが、3Dオブジェクトによって映し出された装飾品の数々が、無造作に床に転がってもいた。

「魔王軍と勇者軍にはそれぞれ？王の間？があつて、魔王軍には魔王が、そして勇者軍には王様が、王の間の主として存在するわ。…」

「…だけど、魔王軍の王の間には魔王が存在しないの」

「魔王が……存在しないだと？ それじゃあどうして王の間が存在するんだよ」

ただ、なんとなく設置したわけではあるまい。それなりの理由があるはずだ

「アンノル、説明を代わろう」

とここで、選手が交代する。

ロアに変わって、人狼の姿を成したモンスターがオレの前に立つ。宙に浮く死神のロアは、それほど身長は高くなく、天井に張り付く悪魔も両翼を除けばオレと変わらないほどだが、今現在、オレの目の前に佇む人狼は、三メートルを超えているだろう。

「まず、自己紹介をしてもいいかな？ 私の名前はローランド」ベイクルアだ。宜しく」

「お、おう……」

恐ろしげな外見からは想像し辛かったが、人狼 ローランドはベイクルアは、目を緩ませ、握手を求めてきた。友好的な素振りに戸惑いつつ、オレはローランドの手を握り、握手を交わした。

「ルピスタ」タスピール。それがオレの名だ」

EGOにログインして、オレは初めて自分の名前を口にした。

但し、相手は人間じゃない。モンスターだ。

「ふむ、タスピールか。……なるほどね」

オレの名前を耳にして、ローランドは口の端を右に左に動かしながら反応する。

「これはあくまで私の推測でしかないのだが……タスピール、キミはEGOにログインする際、初期設定においてアバターを選択することができなかったのではないかな？」

「……なんで、それを？」

凶星だった。

オレは自宅で見つけたIDCを利用して、EGOのアカウントを取得するために公式サイトを調べた。IDCに記載されたIDとパスワードを入力した後、すぐにオレはベッドに横になり、半睡眠状態へと誘われることになった。EGOから発せられる電波信号を脳

細胞が受信する範囲は十メートル強と説明書や公式サイトに書いてあったので、自分の部屋に籠っていればログインするには問題なかった。

だがここで一つ問題が発生する。それは初期設定を終わらせることなくE G Oに飛ばされたことについてだ。

説明書や公式サイトのご案内によると、E G Oを初めてプレイする場合、自身の分身となるアバターの作成を義務付けられているが、それはE G Oにログインすると同時に選択画面が出てくる手はずとなっている。しかしだ、オレがログインした際には、選択画面など一切出てこなかった。その数秒後、目が覚めれば今度は魔王軍の陣地に飛ばされていた。自宅にあったI D Cは埃を被っていたから、もしかすると壊れていたのかもしれない。

「まず、キミが知っているであろう真実は、此処では当て嵌まることはないだろう」

話の内容に眉を顰め、オレは耳を傾ける。

「キミは、私を含めた此処に存在する全てのモンスターがNPCかMOBであると勘違いしているようだが、それは間違いだ。私を含め、全員が一人のプレイヤーとして生きている」

「えっ、あんたら全員が？」

周囲を見渡してみれば、ローランドの言葉にしっかりと頷くモンスターたちの姿を確認できる。ロアは勿論、空を舞う悪魔も同じように首を縦に振った。

「……で、でも、魔王軍にプレイヤーがいるなんて聞いてないぞ」

公式サイトには、プレイヤーが扱うことが可能なアバターは勇者軍に限られると記載されていたはずだ。それなのに何故、彼らはモンスターのアバターを作成し、E G Oに存在することができるのか。それはなー、E G OのクソツタレGMの野郎どもが、俺ら囚人をテスターとして利用してっからだよ」

話に割り込んできたのは、空から降ってきた悪魔だ。

「えと、確か名前は……ヨシルカだったか？」

「ご名答ッ、よく憶えてたじゃねえか、お前さん記憶力がいいみてーだな」

カカカ、と笑い、地に足をつく。風の音が止んだおかげで、彼ともまともに話ができそうだ。

「俺の名前はレツカス！ レツカス〓ヨシルカだ！ 何の因果か知らねえが、こうして俺とお前さんは出会ったんだからな、気軽にレツカスと呼んでくれや」

悪魔 レツカス〓ヨシルカは、オレの手を強引に掴み取り、ぶん回しながら握手する。

「囚人が テスターって……それ、本当か？」

話の規模が大きくなり、頭が混乱してきた。しかも今、俺らって言わなかったか。

「タスピール、キミはEGOの最終クエストをご存知かな」

「最終クエストって……あの、報奨金が一億ドル貰える奴のことか？」

質問を質問で返し、ローランドの顔を見上げる。

「その通りだ」

肯定し、ローランドは頷いた。

本来、MMORPGには明確な終焉は用意されていないのだが、EGOにはゲームクリアしたプレイヤーに報奨金が支払われることになっている。その額、実に一億ドル。一生遊んで暮らせる金額だ。勇者軍の陣地に作られた？門ゲート？をくぐる勇敢な者を、EGOでは総称して勇者と言います。

そして、勇者と呼ばれる者たちがEGOに作られた全ての門ゲートを制覇すると、ゲームクリアの褒章として？王者の証？と呼ばれるものをGMから授与される。これを手に入れた者が、EGOを完全制覇した唯一のプレイヤーとして、現実世界にて報奨金を手にするシナリオだ。

あまりにも高額な報奨金に目が眩んだプレイヤーは少なくなく、たった一人で数十種類のアカウントを使いこなす猛者も中には存在

するらしい。

「それがどうかしたのか？」

「？王者の証？を手にすることができるのは、なにも勇者だけではないということさ」

そう言つて、ローランドは周囲のモンスターを示すように手を向けた。

「王者の？者？は勇者の者、そして王者の？王？は魔王の王……、つまりEGOを完全制覇することが可能なプレイヤーは、勇者軍だけではないということだ」

勇者軍だけでなく、魔王軍にも、ゲームクリアの条件があるらしい。

しかしながら何故、彼らは魔王軍のプレイヤーとして行動しているのか。そもそもどうやって魔王軍のプレイヤーになったのか。

頭を捻り、ロアとレツカスの言葉を思い出す。

「……そういえば、囚人がどうか言つてたよな？ あれはどういうことなんだ」

少し離れた場所で話を聞いていたロアが、再度オレの許へ歩み寄つてきた。

「わたしと、ヨシルカとベイクルア、そして此処にいる全てのプレイヤーは、現実世界では囚人として服役中の身なの」

「……は？」

今度こそ、目が点になった。

思いもかけない告白に、オレは口を開けたまま、ロアと視線を合わせる。

「これは勇者軍のプレイヤー誰一人として知ることのない、わたしたち囚人にしか話されていない極秘事項なのだけど、EGOの開発メンバーでありGMを務める狂氣的な開発者たちは、EGOで人を殺すことができるか否か試すために、テストの実験台として囚人を利用してあるわ。……そして、その実験台にされた囚人が、わたしたちよ」

「それはつまり、現実世界にも影響が出るってこと……なのか？」
恐る恐る真偽を確かめてみると、ロアはしつかりと頷いた。

此処に来てからというもの驚かされることばかりだが、さすがに度肝を抜かれた。

「勇者軍のプレイヤーは、インターネット上で発売されたデータプログラムを購入し、IDCを手に入れることで、EGOにログインすることが可能となる。但し、それは私たちのような囚人ではなく、あくまで一般人を対象としている。つまりキミも、本来ならば勇者軍の陣地に転移するはずだった」

再び、ローランドが話し始める。

オレの姿を瞳に映し込み、憐れむような表情を浮かべている。

「現在、魔王軍で活動する全てのプレイヤーは、服役中の囚人たちだ。そして今、キミも魔王軍の陣地にいるということは、恐らくは何らかのバグによって魔王軍のプレイヤーとして処理されることになったのだろう。初期設定ができなかったのもそれが原因とみて間違いない」

できることなら信じたくはなかったが、現に今、オレは此処にいる。勇者軍の陣地ではなく、魔王軍の陣地に転移し、魔王軍のプレイヤーと言葉を交わしている。たとえ目の前の現実を否定したくとも、彼らが存在すること自体が事実であることを証明していた。

「どうやらキミは私たちと同じ立場ではないようだ。服役中の囚人というわけではなさそうだからね。……だが、たとえキミが囚人ではないとはいえ、魔王軍のプレイヤーとして此処に存在していることは事実だ。よって、EGOの真実を知る権利があるだろう」

それから暫く、オレは彼らの話に耳を傾けることになった。

EGOの開発チームは、テストにおいて、まずは囚人を実験台へと指名した。

EGOでは、IDCによって初期設定を終え、電波信号を受け取り半睡眠状態になったプレイヤーに対し、脳細胞を破壊し尽くす凶悪なウイルスプログラムを送り込んでいる。ゲーム内で死亡した後、

現実世界でも死に至るか否か、それを確かめるために、プレイヤーをワザと死亡させ、七日後に二度目の死を体験させるらしい。

脳細胞に送り込まれたウイルスが活動を開始するには七日間のタイムラグが存在し、それは テストが終了し、EGOが稼働し始めた後、一般人が三回以上死亡した瞬間に現実世界でも死に至らないように偽装し、死因を解明し辛くするのが目的だった。

だが、EGOの本当の恐ろしさは別に存在する。

それは？終焉のカウントダウンシステム？だ。

たとえゲーム内で死に至らなくとも、一度でもウイルスを脳細胞に送り込まれたプレイヤーは、七日間以上ログアウトをし続けている場合、ウイルスが強制的に活動を始める。

つまりは、EGOの裏の顔を知ったとしても、決して途中で止めることはできないことになる。三度の死を体験するか、王者の証を手に入れるか。二者択一なのだ。それもこれも全ては、脳細胞にデータプログラムをエクスポートする技術が開発されたことが原因と言える。

だが、最も重要なのは、魔王軍と勇者軍の全てのプレイヤーが助かる方法だ。

勇者軍のプレイヤーがウイルスを死滅させ、EGOから解放されるには、全ての門をくぐり抜け、王者の証を手に入れなければならない。

そして魔王軍のプレイヤーが解放されるには、
、「EGOにリアルタイムでログイン中の、勇者軍の全てのプレイヤーを殺すことだ」

「そんなの無理に決まってるだろ！ EGOは世界中で稼働してるんだぞ？ 一人残らず殺すなんて不可能だっ」

むちゃくちゃな条件だった。これではまるで死ねと言っているよ
うなものだ。

「不可能でも、やらねばならないのだ……。それにまだ、救いはある。圧倒的に理不尽な条件とはいえ、私たち囚人は勇者軍のプレイ

ヤーを一人殺すたびに、刑期が一日短縮されるのだ」

「……………そのために……………GMゲーム・マスターに従って、罪もない人を殺すのか……………」

魔王軍のプレイヤーは服役中の囚人のため、どんなに酷い扱いを受けても文句を言うこともできず、GMゲーム・マスターの指示に従い続けるしかない。それは納得せざるを得ないだろう。だがしかし、ゲーム内で勇者軍のプレイヤーを殺し、現実世界でも死に至らしめることに対し、迷いや躊躇いはないのか。

「否定はしない。直接手を下すわけではないが、事実として人を殺すことに変わりはないのだからな。GMゲーム・マスターにとって私たち囚人は、都合のいい テスターということだ」

魔王軍の全てのプレイヤーは、たった一度の死により、現実世界でも死に至るように設定されているので、仮想世界とは言えども死に物狂いで生きていかなければならない。

一般人とは異なり、ゲーム内で死ねば現実世界でも死に至ることを知らされている彼らは、死から逃れるために必死でゲーム内を生き、勇者軍のプレイヤーを狩り続けている。

当然、中には拒否する者や積極的にプレイしない者、更には歯向かう者もいるが、現実世界での拷問を受けることにより、例外なくGMゲーム・マスターに屈する形となり、従うことで生きながらえているというわけだ。

元々、一つのIDでは二回しか死亡することができないのは公式サイトでも公表済みだが、現実世界に影響があることは伏せられているので、今もなお現実世界ではEGOのIDを手に入れ、脳細胞にウイルスを送り込まれる一般人が増え続けている。それはつまり、魔王軍のプレイヤーがウイルスから解放される可能性は日に日に少なくなっているということだ。

仮想世界での現実を目の当たりにして、オレは目の前が真っ暗になりそうだった。そんなオレの思考を気にした様子もなく、レツカスがカラカラと笑いだす。

「だがよー、ルイピスタは俺たちとは違って囚人じゃねえんだろ？
んじゃあ今すぐEGOからログアウトして、すぐに警察に訴えて
くれれば問題解決だぜ、これで俺たちも死の恐怖から解放されるっ
てわけだ」

そう言われてみれば確かに、オレは一般人の中で唯一、EGOの
真実を知っている。

それに加え、今ならまだGMにも気づかれていないかもしれない。
ログアウトを実行に移すなら、今だ。

「そ、そうだな！ オレがログアウトすれば、あんたらは勿論、勇
者軍のプレイヤーも皆まとめて助かるんだよな？」

レッカスの言葉に希望を抱き、頬を緩める。

そうと決まれば、いつまでもこんなところにはいられない。ウイ
ンドウ画面を出してログアウトのコマンドを選択するんだ。

右手の人差し指で左手の甲に触れ、知覚を感じ取るようにスライ
ドしてみる。これがEGOに於けるウィンドウ画面の入出の仕方だ。
ここで一つ、また新たな疑問が浮かび上がる。

EGOでは、知覚は認識されないはずだ。それなのに何故、オレ
は指先の感覚から肌に触れる感触まで、しっかりと感じ取っている
のだろうか。

「……………どうかしたの？」

手の動きを止めたオレを不審に思ったのか、ロアが声を掛ける。

「いや、……………なんでもない」

今はそんなことを気にしている場合ではない。

EGOの真実を伝えるために、ログアウトを実行に移さなければ
ならないんだ。

「じゃあ、短い間だったけど……………また、何処かで」

ありがとう、と言うのはおかしい気がした。現実世界に戻り、E
GOの真実を世に公表したとしても、此処にいる奴らは囚人だ。死
に至ることがなくなっただとしても、もう一度出会うことができるか
は分からない。

だから、誰の目も見ずにウィンドウ画面へと視線を向け、ログアウトを実行に移した。

「……ん、……あれ？」

が、何も起こらない。

否、正確には異常な事態が発生していた。

「どうした、ログアウトの仕方が分からねえのか？」

いつまで経ってもログアウトしないオレを見かねたのか、レッカスが横に並び、ウィンドウ画面を覗き見る。

「えーっと……ログアウト、不可能？ ……なんだこりゃ」

ログアウトを実行に移すと、ウィンドウ画面にエラーが表示され、同時にログアウト不可能とのメッセージが浮かび上がる。

「ログアウト不可能って……どういうこと？」

レッカスに続いて、ロアがウィンドウ画面に目を通す。次いで、ローランドも同じく。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ、ログアウトできないってことはつまり……このままだとオレ、永遠にEGOの中にいなけりゃならぬってことなのか？」

「残念だが、そういうことになるだろうな」

溜息を吐き、ローランドは顔を俯けた。

「……そんなバカな……な、なんでこんなことに……」

何度実行に移しても、ログアウト不可能のメッセージが浮かび上がってくる。

このままだと、オレは現実世界に戻ることができない。もしそうなってしまえば、オレは勇者軍のプレイヤーだけでなく、此処にいる魔王軍のプレイヤーにも勝る最悪まふの状況に陥ってしまったことになる。

「この状況から察するに、キミは既にGMゲーム・マスターに気づかれている可能性が高いと言えるだろう」

「つまり、オレがログアウトできないのはGMゲーム・マスターの仕業ってことか…

…」

ウイルスには感染しているものの、オレ以外の全ての人間は現実世界に戻る事ができる。

だが、オレはEGOを完全制覇しなければ戻ることすら不可能だ。……いや、たとえ完全制覇したとしても、ログアウト可能になるか否かはGMゲーム・マスターにしか分からない。言うなれば、今のオレは籠の中の鳥と同じだ。

「……ルイー、あなた現実世界では一人暮らしなの？」

ロアが、オレの名を初めて口にする。

ほんの少し驚いたが、すぐに言葉を返す。

「母さんと二人暮らしだ。……でも、それがどうした？」

現実世界におけるオレの状況を把握し、ロアは安堵の表情を浮かべた。

「それなら、あなたのお母さんが現実世界でああなたの体に触れさえすれば、EGOのシステム上、強制的にログアウトするから問題ないわ」

「その手があったか！」

なるほど、確かにそれならログアウト不可能な状態に陥ったとしても、強制的にログアウトすることができるかもしれない。母さんが仕事から帰ってくるのは夕方頃だから、二時間も経てばオレの異変に気づいてくれるはずだ。

「そう上手くはいかないだろう」

しかし、水を差す人物が一人いた。それはローランドだ。

「相手は人の命を弄ぶことに何の躊躇いも持たないGMゲーム・マスターたちだ。強制ログアウトすらも不可能となつていても不思議ではないな」

城内が、しんと静まり返る。

「……ま、まさかそこまでは……」

しない、とは言い切れない。人を死に至らしめるシステムを生み出した奴らが、抜け道を残すほど間抜けではないはずだ。

ローランドの言葉に愕然とし、オレはその場に立ち尽くす。陽気な喋り方のレッカスが話しかけるのを躊躇するほど、今のオレは落

ち込んでいた。

けれどもE G Oは、絶望に浸る時間すらも与えてはくれないらしい。

「ぐっ、なんだ、この音はっ」

突如、何処からともなく振り時計の音が鳴り始めた。天井から否、空から聞こえてくる。

周囲がざわつき、囚人たちの喋り声が室内に響きだす。ローランドを含め、ロアとレツカスも何が起こっているのか分からないようだ。

窓のそばに近づき、暗闇に埋もれる空を見上げてみる。とここで左手の甲が淡い点滅を二度繰り返す。これはE G Oの中でメッセーヂを受信した時の合図だ。此処にいる奴らには例外なく、メッセーヂが届けられているようだ。

隣に並んで窓の外を眺めていたロアは、すぐにメッセージを確認し、オレにも見えるように甲の位置を変える。そして、オレは目を疑った。

【件名】 生まれたての魔王を殺せ

【本文】 全てのE G Oプレイヤーにお知らせ致します。

つい先ほど、魔王軍の陣地にて、魔王が誕生致しました。

魔王の名は、ルイピスタ「タスピール」。生まれたての魔王です。

これに伴い、E G Oでは、本日二十二時より魔王討伐クエストの開催を決定致します。

魔王討伐クエストへの立候補者の中から、最もステータス値の高いプレイヤーに挑戦

権が与えられ、魔王ルイピスタを相手取り、一対一の真剣勝負を挑むことができます。

魔王ルイピスタの討伐に成功した者には、クエストクリアの報奨金として、現実世界

において、E G O 開発本部より現金一億ドルが贈呈されます。魔王ルイピスタを討伐

する者が現れるまで、毎週日曜日の二十二時にて開催を予定しておりますので、魔王

討伐クエストへの参加をご希望の方は、こちらまでメッセージをお願い致します。

生まれたての魔王 ルイピスタ「タスピール。それは勿論、オレの名だ。

これは一体何の冗談だ。

「生まれたての魔王……ルイピスタ「タスピール……!?!」

メッセージに目を通し、ロアがオレの名を呟く。現状を把握しているのはGMゲーム・マスター以外に存在しないだろう。何がどうなっているのか頼むから教えてくれ。

「……ルイ、あなたのメッセージを見せて」

「オレの? どうしてだよ」

聞き返すと、ロアは自身に届けられたメッセージに視線を向ける。「このメッセージは、魔王が生まれたことを知らせるために送られてきたものだから、もし仮にあなたが本当に魔王なら、あなたに届いたメッセージには何か別のことが書かれているかもしれないわ」なるほど、確かにロアの言うとおりだ。

魔王に対して、魔王討伐クエストへの参加を促すわけがないからな。

言われるがまま、オレは左手の甲を指でスライドし、メッセージを確認する。そして、

「……は、はは……っ、だからログアウトできないのか、オレは……」

空笑いが、現実を直視する。今この瞬間に我が身へと降りかかる不幸を受け入れたくはなくとも、たった一つのメッセージによって、無理矢理に納得させられてしまう。

【件名】魔王のIDを持つ者へ

【本文】ルイピスタ「タスピール様、おめでとうございます。」

あなたがご使用になられたIDは、魔王軍の魔王としてEGOをプレイ可能なIDと

なっております。他のプレイヤーとは異なる点が幾つかございますので、初めに、簡

単なご説明をさせていただきます。

魔王のIDを持つ者は、勇者軍のプレイヤーとしてEGOをプレイすることができま

せん。EGOへのログインが行われると同時に、魔王軍の陣地にある魔王の城の一室、

王の間へと強制転移されます。

公式には発表されておりませんが、魔王軍のモンスターの中にはプレイヤーの方も存

在し、あなたを含めた全ての魔王軍のプレイヤーは、EGOにおいて一度の死を体験

することにより、アカウントが消滅されるようにプログラムされております。

また、例外として、魔王のIDを持つ者がEGOの中で死に至った場合、その瞬間、

全ての魔王軍のプレイヤーが死に至ります。

あなたの配下となる魔王軍のプレイヤーと共に、王者の証を手に入れるか、または真

のクエストクリア条件を達成しない限り、あなたはEGOからログアウトすることが

できませんので、予めご了承下さい。

では、生まれたての魔王ルイピスタ「タスピール様。死に至る最後の日まで、EGOをお楽しみください。」

あまりにも理不尽で一方的な宣告に、つい、足の力が抜けてしまった。

そんなオレに肩を貸し、ロアが体を支えてくれる。みっともなく涙が出そうだ。

「何が書いてあったの？」

ロアに見えるように、手の甲を傾ける。

そして、ロアもまた同じように、GMゲーム・マスターから届けられたメッセージを読み、愕然とした。

「……オレが死ねば、此処にいる全てのプレイヤーが……死ぬんだとよ」

生まれたての魔王、ルイピスタ「タスピール」。

生まれて初めてEGOにログインした、MMORPG初心者だ。

だが、そんな頼りがいのないオレの肩に、囚人たちの命が掛かっている。信じたくはないが、これが現実だ。あらがうことができない。

「お……おい、どうしたってんだよ？ 何かヤバいことでもあったのか？」

見る見るうちに青ざめていくオレとロアの表情によって、辺りが不安に包まれていく。

「ルイ、此処にいる皆にメッセージを転送して」

レッカスの声を聞き、ロアは息を吐く。心を落ちつけようとしているのだろう。

ロアは自分の手をオレの右手に重ね、コマンドの入力先を指し示していく。それにより、どうやらオレに届けられたGMゲーム・マスターからのメッセージは、全ての魔王軍のプレイヤーに転送されたらしい。オレとロア、そしてレッカスを中心として、周囲がざわめき始める。

「ルイピスタが……俺たちの魔王だって……？」
信じられないものでも見るかのように、レッカスが視線をぶつけてくる。

それは憐みか、それとも絶望か。恐らくは、後者の方が色合いが

強いに違いない。オレが死ねばレツカスも死んでしまうのだからな。EGOをプレイしたことのない初心者に、自分の命を握られていると考えてみれば、誰もが絶望するはずだ。

「なるほど……、魔王討伐クエストの真の狙いが分かった」

そこに、ローランドの声が耳に届く。

転送されたメッセージに目を通したのだろう。

「キミが死ねば、私たちも死ぬ。そしてそれは、魔王討伐クエストにおいても例外ではない」

「……あ」

魔王討伐クエストの真の狙い、それは、

「EGOが稼働を開始してから一年が経過し、未だ死に至らず、もがき続ける囚人を」

一人残らず皆殺しにすることだ。

その言葉が木霊し、此処にいる全ての囚人が絶望に声を上げることができなくなった。

「……ロア」

そんな中、真つ暗に染まり始める視界の向こうで、オレはまた別のことを考えていた。

隣に寄り添い、微かに肩を震わすロアの息遣い、そしてその生温かな息の吹きかかる感触に、確かにオレは知覚を感じ取っていた。

エンドレス・ゲート・オンライン。この世界には、知覚が存在する。

それはつまり ……

【2・1】

EGOの世界は、魔王軍と勇者軍の二つの陣地と、合計十個の門ゲートにより生み出されている。

勇者軍の陣地に作られた一アン・ゲートの門をくぐると、広大なエリアへと誘われ、エリア内にはMOBのモンスターが存在し、経験値を積むことが可能だ。更には様々な町やダンジョン、クエストなどが存在している。

町の中はセーフティーエリア内となるので、モンスターに襲われる心配はない。魔王軍と勇者軍が同じ町に入ったとしても、実際にはエリア内が異なっているので、町の中で鉢合わせることもない。また、それぞれの陣地内でプレイヤーが販売している商品をショップで購入することが可能となっている。ショップ販売になるので、購入者が誰なのかは不明だ。まさか魔王軍のプレイヤーが購入しているとは思えないだろう。

一アン・フィールドのエリア内に二ドゥ・ゲートの門が存在し、二ドゥ・ゲートの門をくぐると、次は三トロワ・ゲートの門へと繋がり、更にその先は四カトル・ゲートの門、五サンク・ゲートの門へと続いていく。五サンク・ゲートの門をくぐり五サンク・フィールドのエリア内を突破して、最後に待ち受ける魔王の門サタン・ゲートをくぐると、魔王軍の陣地へと到達する。

また、勇者軍とは逆に、魔王軍の陣地にも門ゲートが用意されているのだが、一アン・ゲートの門は存在せず、六シックス・ゲートの門に始まり、七セブ・ゲートの門、八エイト・ゲートの門、九ナイン・ゲートの門、十ティーン・ゲートの門、そして勇者の門ヒーローズ・ゲートへと繋がっている。

互いの陣地を合わせると、合計で十二個に及ぶ広大なエリアが存在し、これらは魔王軍の陣地と勇者軍の陣地を左右対称に、弧を描くように世界観が創造されている。

勇者軍の一アン・ゲートの門と魔王軍の六シックス・ゲートの門は、エリア内の名称は異なるものの、実際には同じエリア内として扱われるので、六シックス・ゲートの門をくぐり六シックス・フィールドのエリア内を散策する魔王軍のプレイヤーは、一アン・ゲートの門をくぐり一アン・フィールドのエリア内を散策する勇者軍のプレイヤーと遭遇する可能性がある。

合計十個の門ゲートが存在するとはいえ、実際には魔王軍と勇者軍の門ゲートは同じものとして認識されるので、つまりは合計五個の門ゲートしか存在しないことになる。

魔王軍は、六のエリア内では勇者軍がくぐってきた一アン・ゲートの門（実際には七セツト・ゲートの門）をくぐることで、次のエリア内へと進むことができる。逆に勇者軍は、一アン・フィールドのエリア内では魔王軍がくぐってきた六スイス・ゲートの門（実際には一アン・ゲートの門）をくぐることで、同じく次のエリア内へと進める。結果的に見て全ての門は弧を描くように繋がっているので、これがエンドレス・ゲート・オンラインのタイトルの由来となった。

それぞれの門ゲートをくぐるには、門番を倒さなくてはならない。これがまた非常に強敵で、E G Oが稼働して一年が経過しているというのに、勇者軍は二ドゥ・ゲートの門を通過したプレイヤー数が二桁にも満たない。その点に関して言えば、魔王軍はプレイヤーは圧倒的に勝っていた。魔王軍と勇者軍のプレイヤーは最大で七名のパーティーを編成することが可能なので、門番と戦闘する際、七対一で挑戦することができる。

しかしそれでもまだ門番ゲート・キーパーを倒したプレイヤーの数が二桁に達していないのだ。

二の門ドゥ・ゲートをくぐったプレイヤーは、他のプレイヤーとパーティーを編成して、再び二ドゥ・ゲートの門ゲート・キーパーと戦闘を行うことが可能なので、プレイヤー同士が協力し合えば、もっと多くのプレイヤーが二ドゥ・ゲートの門をくぐっていてもおかしくはないのだが、ただでさえ三回死ねばアカウントが消滅するというのに、わざわざ他のプレイヤーのために危険を冒す意味はない。

E G Oの公式サイトでの発表によれば、勇者軍で二ドゥ・ゲートの門をくぐったのは、単独プレイヤー、三名パーティー、五名パーティーの計九名のみ。その彼らも、まだ三トロワ・ゲートの門には辿り着いてすらいなのが現状だ。

「六スイス・フィールドのエリアで経験を積むしかねえな」

長々とE G Oに関する説明をしていたローランドを相手に口を挟

んだ人物は、レッカスだ。

三メートルにも及ぶ長い両翼を休めた悪魔は、周囲を見渡した。
「ルイピスタを守る奴はいくらでもいる。なんせ俺たちの魔王なんだからな。でもよー、さすがの俺たちも魔王討伐クエストには手出しすることはできねえ。つてことはつまりだ、お前さんは今すぐにも強くなる必要があるってことだ」

一理ある。……いや、まさにその通りか。

オレが死ぬことによって、全ての魔王軍のプレイヤーが死に至るのであれば、城内に閉じこもっていればいいだけの話だ。

しかし、そう上手くはいかないのがE G Oだ。

毎週日曜日の二十二時、魔王討伐クエストが開催される。オレが死ぬまで、永遠にだ。

決して逃げ切ることはできない。魔王討伐クエストは、魔王のIDを持つオレに課せられた義務のようなものだからな。クエストの放棄など不可能なのだ。

「なるほど、六のエリアか……。スイス・フィールド六の門の周辺であればMOBのレベルも低いから、此処にいる誰かが魔王と共にパーティーを編成し、行動すれば、万が一にも死ぬ危険性はないな」

レッカスの台詞に、人狼の姿を成すローランドが頷いた。見た目は恐ろしいが、此処にいる奴らは全て人間だ。NPCやMOBではない。命を持つ者として、E G Oに存在するんだ。

「そうと決まれば出発だぜっ」

生まれたての魔王を守るために、パーティーを編成することになった。

オレとレッカス、ロア、そして他四名の囚人たちが加わり、パーティーへの申請と登録を完了する。これにより、オレたち七人は行動を共にすることになる。

パーティー内の誰かがMOBを倒すと、分け前として経験を手に入れることができるので、E G O初心者のおれでもすぐにレベルアップし、ステータスを上げることが可能だ。

勿論、最終的にはオレが自分自身の手でMOBを倒して、特技や魔法などのスキル習得をしなければならぬ。ローランドの話によれば、特定のスキルに関しては、自身の手によって熟練度を上げなければ習得できないらしいからな。

「待つて」

パーティー編成が終わり、早速城の外へ向かい始めるメンバーをロアが呼び止める。

「ルイー、あなたのステータスを教えておいて。その方が行動しやすいわ」

「ん……、ああ、そうだな」

どうやらオレのステータスを知っておきたかったらしい。確かにオレを守りながら戦闘をしなければならぬわけだから、知っておいた方が作戦を練りやすく、戦い方なども構築しやすいだろう。

「えーつと、ステータス画面は……と」

二、三度、左手の甲をスライドさせて、ステータス画面を発見した。コマンドを入力し、オレは自分のステータスを確認してみる。すると、

「……オール255だ」

「えっ」

呆気に取られ、ぼつりと呟く。

その声を聞いたロアは、すぐにオレのそばへと近づき、ステータス画面を見た。

「HP255、MP255、STR255、……AGI、VIT、INT、DEX、LUK、SEA、EVA……、全てのステータスが……カストしてる……」

目を疑いたくなるような数値を前に、ロアは言葉を無くしていた。ロアが言うように、EGOに存在するステータスは以下の通りだ。HPは生命力を表し、各プレイヤーの属性・種族に合わせた値が自動的に上昇する。

MPは精神力を表し、HPと同じようにステータスが上昇してい

く。

STRは筋力を表し、攻撃力・武器・防具の装備条件に関係する。AGIは敏捷を表し、命中率・戦闘での回避率に関係している。VITは体力を表し、最大HPに関係している。

INTは魔力を表し、最大MP・魔法攻撃力に関係する。

DEXは技術を表し、製造時の条件・成功率・出来に関係している。

LUKは幸運を表し、全ての条件下において関連性がある。

SEAは索敵を表し、他のプレイヤー及びモンスターの位置を把握する範囲に關係している。

そして最後にEVAは回避を表し、他のプレイヤー及びモンスターに気付かれずに回避可能な範囲に關係する。

レベルが上昇する際に得られる振り分け値は、それぞれ好きなステータスへの振り分けが可能となっている。MMORPGにおいてよく見られる傾向として、三種類以上のステータスを平均的に上げていくバランス型、一種類のステータスを集中的に上げる一極型、それを二つに増やした二極型などが存在する。恐らくは、此処にいるロアやレツカスたちも、何れかの型に嵌った振り分け方をしているに違いない。

だが、そんな努力をあざ笑うかのような出来事が、オレのステータス画面に起こっていた。

「カンスト……って、マジかよ」

レツカスと他のメンバーがオレの許へ慌てた様子で近寄ると、ステータス画面に目をやり、口を開けたまま静止する。だが、それも無理はないだろう。たとえオレがEGOにおいて例外中の例外であり、魔王のIDを持つ者だとしても、ステータスが全てカンストしているなんて誰が予想できたか。

カンストとは、カウンターストップの略称だ。

通常、ステータスには限界値が設定されていて、合計十個のステータスが存在するEGOにもカンスト値が設定されている。EGO

のステータスは、255が限界値だ。しかしながらステータスをカ
ンストするには、それこそ廃人クラスになるまで一日中ログインし
てなければ不可能だ。そこまでやって、ようやくカンストへとたど
り着くことができる。

だが、EGOに初めてログインしたオレのステータスは、初期の
段階で既にカンストしていた。それも一つや二つではなく、全ての
ステータスだ。

「す、すげーな、……これなら別にパーティー組まなくても死なね
えんじゃねえか」

レツカスの発言は、的を得ている。正直に言えば、此処にいる誰
よりもオレは強いことになるだろう。オレを守るためにパーティー
を組む必要は皆無だということだ。

「……いえ、ステータスをよく見て」

すると、ステータス画面を見てから口を閉じていたはずのロアが
指をさす。

「確かに、全てのステータスがカンストしているわ。でも、ルイー
のレベルは1のままよ」

言われてみればレベルは1のままだ。これが何を表しているのか、
ロアは話を続ける。

「全てのステータスがカンストしているのに、レベルが1のままと
いうことはつまり、レベルにはカンストが存在しないことになるわ
言い換えればそれは、わたしたちが勘違いしているだけであって、
ルイーのステータスはまだカンストしていないのかもしれないわ」
「それって、ということとは……オレはまだレベルを上げることが可
能であり、ステータスを上昇させることも不可能ではないってこと
か？」

オレの問いに、ロアはしっかりと頷いた。だが、そんなに都合よ
くいくのだろうか。

魔王のIDを持つオレは、他のプレイヤーとは異なり、初期の段
階から全てのステータスが255になっていた。しかしそれは魔王

にとつての初期ステータスであり、魔王には魔王の限界値が設定されている可能性が高い、とロアは言っている。

もし、それが事実であれば、今すぐにも六のエリアスイス・フィールドに向かい、レベルを一つ上げてみたい。

「あー、そーいやるイピスタはまだ特技や魔法は習得してねえんだよな？」

「え、……おう、そうみたいだけど。それがどうかしたのか」

ステータス画面を更に一つスライドし、これまでに修得した特技・魔法一覧に目を通してみる。残念か否か不明だが、真つ新たな画面が視界に映し出されている。

「つてことはだ、レベルを上げなきゃ特技や魔法は覚えねえだろうし、熟練度を上げることもできねえつてわけだよな？ それならたとえステータスがカンストしてたとしても、レベルを上げる意味がねえつてことはないわけだ」

ロアとレッカスの言うとおりだ。

たとえ全てのステータスが255だとしても、EGO初心者のおレには、圧倒的に経験が不足している。魔王討伐クエストでは、勇者軍のプレイヤーの中で最もステータスが高い者が挑戦権を得られる。そしてそれは同時に、現段階で最も勇者に近い存在のプレイヤーが魔王討伐を目指すわけだから、経験の差は歴然であり、特技や魔法の習得数においてもオレが不利であることに変わりはない。

だからこそ、経験を積む必要がある。

「悩んでいても意味がないし、とにかくまずは六のエリアスイス・フィールドに向かう」

「おうよっ、生まれたての魔王を守る役目は任せとけー」
一時はどうなることかと思っただが、当初の目的通りに話を進められそう。

天井にぶつからないように空を舞い、城内を突き進むレッカスの後を追う、オレたちはまず、六の門スイス・ゲートへと足を運ぶ。

途中、他のプレイヤーに声を掛けられることがあつたが、恐らく

は魔王が誕生したことへの興味によるものだろう。中には握手をしてくれと言い出す者もいた。

「ほら、見えるか？ あれが六の門だ」スイス・ゲート

螺旋状の階段を下りていくと、レツカスが声を掛ける。

視線を向けてみると、窓にへばり付いていた。

「あの門をくぐれば、六のエリア内に繋がってるからな。そこからは戦場だぜ？」ゲート

窓の外を見やれば、暗闇の中に一際光り輝く巨大な門を視界に映す。あれが六の門か。スイス・ゲート

たった一度でも死ねば、現実世界でも死に至る状況にあるというのに、オレは今、心の底からワクワクしている。ログイン早々仲間ができて、パーティーまで組んでいるのだから当然だ。

現実世界において、隣の家に住む幼なじみがE G Oで遊んでいることを知り、オレはずっと羨ましかった。オレもE G Oで遊んでみたいと思っていたからな。

「行こう、六の門へ」スイス・ゲート

オレの声に皆が振り向き、返事をせずに小さく頷く。魔王討伐クエストの開始時刻まで、あまり時間は残されていない。ほんの少しでもいいから、E G Oに慣れておこう。

「城を出れば門はすぐそこだ、気合入れていけよー」ゲート

一階へと下りると、そこは広々とした空間になっていた。上の階だけでなく、此処にもまた同じように、沢山のモンスターたちの姿を見て取れる。魔王軍の陣地内では、此処が一番多くのプレイヤーが集まるのだろう。

彼らが向ける好奇の視線に触れながら、オレは城門の前まで歩いていく。

近くまで寄ると、プレイヤーの存在を認知したのか、独りでいき始めた。

「おお……、これがE G Oの世界か……」

城門の外には、闇に染まった光景が視界を覆い尽くし、その中で

唯一、闇に染まらないのが六の門だ。スイス・ゲート 城門から距離はあるものの、直線上に設置されているので、此処からでもその姿がよく見える。

「魔王軍の陣地は空から地まで真っ暗だからな、灯りがなけりや暮らしていけねえぜ」

ぽつぽつと、其処彼処に淡い光が漂っている。恐らくは、魔法によるものだろう。それでもしなければ外を歩くことすらままたらなところなのだ。

「あっちにあるのがショップで、こっちに見えるのが飯屋だ。安いくせに味は確かだからな、魔王軍にいる奴らは誰でも一度は食いに行ったことがあるはずだぜ」

仮想世界の中で食事をして、満腹感を得られるのは、ある意味深刻な問題と言えるだろう。

EGOで食事をし続ければ、現実世界では何も食べていなくともお腹が減ることはない。だがそれが原因で栄養失調に陥る者も少なからず存在する。その点に関しては、テレビや新聞などで話題にも上っていた。

但し、それでも止める者はごく僅かしかいないし、現実世界で食事を取る行為を怠るプレイヤーが後を絶たないのは、MMORPGにおける全体的な悩みの一つとして挙げられる。HPやMPを回復させる手段にも繋がるとはいえ、もう少し改良を重ねた方がよさそうなのがする。

「さあ、着いたぞー」

レッカスの案内を受けているうちに、どうやら目的地へと着いてしまったようだ。

オレの目の前には、スイス・ゲート 六の門が聳え立つ。そう表現して間違いはないだろう。

そこら辺に作られた建物では比べものにならないほど立派で、魔王城に匹敵するであろう神々しさと高さを兼ね備えている。さすがはEGOの看板といったところか。

「でかいな……」

「そりゃそうだ、門ゲートだからな」

何がそりゃそうだなのかは不明だが、あえて突っ込まないことにした。この門ゲートを前にして、そんな無粋な真似はできそうにないからな。

息を呑む暇すら与えずに、まずはレツカスが歩み寄り、光り輝く門ゲートをくぐった。

門ゲートの向こう側は、光の壁によって視認することができない。実際にくぐってみなければ、そこに何があるのか分からないってことだ。「大丈夫だから、心配しないで」

不安を感じ取ったのか、オレの顔を覗き見るロアがぼそりと呟いた。

「ありがとよ、ロア」

オレは初めてロアの名前を呼び、首を縦に振る。

本来、勇者軍の陣地に転移するはずだったオレは、一人だけ魔王軍の陣地に飛ばされた。

でも、決して一人ではない。ロアやレツカスがついている。それにステータスも飛び抜けて高いのだから怖いものなんてない。

「行こう、門ゲートの向こう側へ」

視線を交わし、共に頷き合う。

そして、オレとロアは六の門スイス・ゲートをくぐった。

【2・2】

「ようこそ、スイス・フィールド六のエリア内へ」

不確かな空間を抜け、青々とした空に見下ろされた大地を視界に映し出す。

ある程度の予想はしていたというのに、魔王軍の陣地との差に思わず呆気にとられ、声を無くしていると、そこにロアの声が届けられる。

「此処が……スイス・フィールド六のエリアなのか」

「そう、EGOにログインした魔王軍の全てのプレイヤーが、腕試しに経験を積むところよ」

暗闇から一転、青空への変化に、オレは瞼を瞬かせる。後ろを振り向けば、そこには先ほどくぐってきたスイス・ゲート六の門が聳え立っていた。

「魔王軍の陣地に戻るには、元来た道を戻ればいいわ」

視線の先を確認し、ロアが説明する。

スイス・ゲート六の門をくぐり直せば、また魔王軍の陣地に戻ることができるらしい。

「転移石ついで道具もあってな、それを使えば今までに行ったことがある好きな場所に転移することが可能だぜ。まあ、ちつとばかり値が張るのが難だがよ」

「転移石か、なかなか便利そうな道具だな」

「広大なエリアを要するMMORPGでは、転移系の道具は必需品とも言えるだろう。」

特にEGOに至っては、魔王軍のプレイヤーはたった一度の死によって現実世界でも死に至るので、常に危険と隣り合わせとなる。そんな中で生きていくには、MOBとの戦闘において、いつでも逃げることができるように備えておいた方がいい。

「そついや転移系の魔法はあるのか？」

「ないわ」

疑問を口にして、ロアが即答する。

そうなんだろうな、とは思っていた。しかし転移する手段が一つしか存在しないのは残念だ。

「そっか……それならオレも幾つか転移石を持っていた方がよさそうだな。皆は持つてるのか？」

他のメンバーに尋ねてみると、各々が手の甲をスライドし、道具画面を開いてみせる。

ロアは勿論、全員が一つか二つ以上の転移石を常備していた。

「おお、結構沢山持つてるんだな」

「ダンジョンやクエストをクリアすれば一つ手に入れることができるわ。でもショップでは売買することができないから憶えておいて」
転移石をショップで購入することができないのは、死の危険性を実感できるようにするためか、またはプレイヤーを死に至らしめるための障害を少しでも減らそうとしているのか。

全てはGMゲーム・マスターが知っている。EGOのルールとシステムは、彼らが作り出したのだからな。

「ほら、あつちに森が見えるだろ？ あれが六のエリア内スイス・フィールドで一番近いダンジョンだ」

レッカスに言われた方角に目をやると、草原の先に木々が生い茂る場所を見つけた。

「魔王軍のプレイヤーが最初に経験を積む場所　？夜森よもりの庭？よ隣に並ぶロアが呟く。

夜森の庭、それがあのダンジョンの名称か。

「ここら辺はMOBの出現率が低いんだけどよ、夜森の庭に入ればうじゃうじゃ出てくるからMOBを狩り放題だぜ」

魔王軍のプレイヤーたちは、自分たちがモンスターである以上、MOBのことをモンスターとは呼ばない。同じ存在とはいえ、自らの意思を持つ者としての自覚があるのだろう。モンスターがモンスターを狩るのではなく、あくまでも彼らの中ではプレイヤーがMOBを狩る、と考えている。それを忘れてしまえば、もはやプレイヤー

ーとしての尊厳は無くなってしまふ。

「……そういえばさ、此処にいる皆は現実世界では知り合いなのか？」

夜森の庭に向けて歩きつつ、パーティーを組む六名のプレイヤーに質問を試みた。

魔王軍の全てのプレイヤーが囚人ということは、一か所に集められてEGOにログインしている可能性が高い。ということはつまり、現実世界においても彼らは共に知り合い同士となるだろう。だが、ロアは首を横に振ってみせる。

「同じ刑務所の中でログインしているのは確かだけど、他の皆には一度も会ったことがないわ」

「ほ、本当かよ……」

他のメンバーの顔を見ると、各々が頷く。どうやら嘘ではないらしい。

「テスターに選ばれた囚人たちは、一人用の独房に収監されているの。だから現実世界では他のメンバーには勿論、魔王軍のプレイヤーには誰一人として顔を合わせることができないわ」

徹底した管理によって、囚人たちが現実世界において結託するのを阻止しているのだろう。

これも全てはGMの意向によるものかもしれない。

「捕まった理由も人それぞれだからなー、そう簡単には相部屋にはできねえさ」

肩を竦め、レツカスが苦々しく笑う。

此処にいるオレ以外のメンバーは、現実世界で何らかの罪を犯し、囚人として今現在服役中の身だ。しかしながら相手が囚人だからといって、命を弄ぶ行為が許されるわけがない。それを承知の上で、ゲーム・マスターGMは彼らを テスターとして利用し、今もなお、苦しめ続けている。

立場は違えども、彼らも勇者軍のプレイヤーたちと何ら変わらな
い。EGOの被害者だ。

「……大変だな」

「お前もだけどな、ルイピスタ」

言われて、それもそうだと納得する。

他人のことを心配する前に、まずは自分の身を守らなければならない。一瞬の油断が、此処ではまさに命取りになる。何があるとも絶対に死んではならないのだ。

「さて、夜森の庭にご到着だ」

レツカスの声に前を向き、ダンジョンの入り口へと辿り着いた。

EGOでは、足を踏み入れることで風景が変化し、ダンジョン内へと転移するシステムではない。各エリア内のダンジョンは、ただの映像として立体化しているだけではなく、その場所に確かに存在している。

「此処が夜森の庭か」

草原では、遠目にMOBの姿を何度か確認することができたが、さすがに序盤ということもあって、襲い掛かってくる好戦的なMOBは存在しないようだ。

我先にとレツカスが森の中へ飛び込んでいく。その背中を追いかけて、他のメンバーも森の中に入っていった。残されたのは、オレとロアの二人だ。

「……ルイを守るためにパーティーを組んだのに……バツカス……」

「ぶふっ、バツカスは酷いな」

バカとレツカスを掛けた呼び名に、思わず吹き出しそうになる。

そんなオレの姿を見やり、ロアはほんの少し頬を膨らませた。

「別に酷くなんてない。ヨシルカには相応しすぎる呼び方よ」

ふいつと横を向き、視線を逸らされる。笑われたのが恥ずかしかったのかもしれない。

「オレたちも早く行こう」

「……ええ、そうね」

どちらからともなく歩きだし、オレとロアは二人並んで夜森の庭

に足を踏み入れた。

夜森と名が付くように、ダンジョン内は暗闇が支配している。魔王軍の陣地も空が暗かったが、こちらにも負けてはいない。人工的な光は皆無で、木々の隙間から差し込む日の光が唯一の道しるべと言えるだろう。

「真っ暗で何も見えねえぞ」

「そう言うと思ったわ」

予めオレの台詞を予期していたのか、ロアは夜森の中で左手首を軽く振ってみせる。すると、

「うわっ」

突如、ロアの指先に向けて光が集束する。空から見え隠れする太陽を集めるかのように、眩い輝きを放ち始めた。

「ロアッ、どうなってんだ」

「光の集めただけよ」

と言い、少しばかり得意げにオレの顔を見る。

驚くさまがおかしかったのか、心なしかロアは嬉しそうに見えた。「属性や種族に関係なく習得可能な初歩の魔法だから、ルイーもすぐに覚えるわ」

もう一度、左の手首を振る。

指先に集まった光を前に飛ばし、魔法によって生み出された幻想的な灯りが夜森に道しるべを作り出していく。

「……綺麗だな」

「えっ、……あ、ええ、……そう、ね」

淡い光を放つ夜森の道に、オレは見惚れていた。こんなにも綺麗で現実離れた景色は、此处でしかお目に掛かれないだろう。仮想世界を満喫するプレイヤーならではの特権だ。

ロアと二人で光に包まれた道を進んでいく。そして、すぐにレッカスたちの姿を見つけた。

「ヨシルカ」

「おう、アンノル！ やつと来たか」

怒り気味の口調のロアを気にすることもなく、レッカスは片手を上げて反応する。

他のメンバーも、すぐそばにいるようだ。

「お前らが到着するのを待ちきれなかったんでよ、ちよいとMOBを狩ってたぜ」

そう言っつて、レッカスは顎で隣を指す。

その先には、頭部を切断されて今にもエフェクトが消滅しそうなMOBが倒れていた。

「そいつ、レッカスたちが倒したのか？」

「勿論だ。パーティー組んでるからルイピスタにも経験値が入ってるはずだぜ」

まだ一度も戦闘をこなしていないが、とりあえずステータス画面を確認してみる。

すると、レッカスの言うとおりに僅かだが経験値が溜まっていた。

「レベルはまだ上がってねえだろうけどよ、んなもん俺たちとパーティーを組めば時間の問題だ。此处で一時間ぐらいぶっ続けてMOBを狩り続けりゃ、魔王討伐クエストが開始するまでにはレベル10にはなってるはずだぜ」

レベルは、上げれば上がるほど次のレベルに上がるための必要経験値が高くなっていく。

だが、最初の段階では、レベルの高いプレイヤーと共に効率のいい経験値の稼ぎ方をしていれば、あっという間にレベルが上がっていく。これはMMORPGに限らず、他のゲームでも同じことが言えるだろう。ロアやレッカスがパーティーを組んでくれたおかげで、オレは楽にレベルを上げることができそうだ。

「ルイピスタ、お前さんのステータス画面見せてみるよ。あと二回か三回ほど戦闘すればレベルが上がるんじゃないかねえの」

オレの隣に並んでいたロアを押しつけ、レッカスが顔を覗かせる。

一瞬、ロアの表情が引きつったのは、見て見ぬふりをおこつた。それが安全だ。

「経験値が5ポイント加算されてるな、……えっと、次のレベルアップまで、あと……」

レツカスの声が止まった。横を見ると、口を開けたまま固まっている。

「どうした、レツカス？」

「あ、……いや、っていうかなんだこれ？ バグってんのか？」

眉根を寄せるレツカスは、ステータス画面を指さし問いかける。

逆隣りに移動したロアが、オレと共にステータス画面に視線を落とす。そして、

「数値が……無くなってる……」

ぼそりと、ロアが呟いた。

言葉通り、オレのステータス画面には、他のプレイヤーにはあるはずのレベルアップまでに必要な経験値が表示されていなかった。それどころか、レベル自体が存在していない。

「これって、つまりオレは……レベルアップできないってことなのか？」

「……そう、かもね」

これは、此処にいる誰もが未経験の出来事だ。曖昧な返事しかできるはずがない。

ロアは勿論、レツカスや、他のメンバーにも、レベルアップするための数値が表示されている。だがオレには、それが存在しない。ひよっとすると、オレは一生このままなのか。

「なあ、此処に来た意味あるのか」

堪らず、ロアに問い訊ねた。

しかしながらその答えを知っているのは、恐らくはGMゲーム・マスターしかいないだろう。

「分からないわ。……でも、経験値が貯まっているのは確かよ」

「……まあ、そうだな」

先ほど、レツカスがMOBを倒した際、パーティーのメンバーであるオレにも経験値が加算されていた。レベルが上がることはなく

とも、経験値を貯めることは可能ということだ。

「とりあえず、今は考えるのを止めよう。EGOでの戦い方を覚えるのが先だ」

頭を悩ませていても答えが出てくると決まっているわけではない。あと数時間後には魔王討伐クエストが開始し、魔王軍全てのプレイヤーの命を懸けて、勇者軍の挑戦を受けなければならぬ。もたもたしては時間が幾らあっても足りない。

「そうと決まれば狩りまくろうぜい」

ブッツと首を横に振り、勢いをつけて飛翔する。空を飛ぶことが可能なレツカスは、夜森の暗さなど関係ないようだ。木々の天辺^{てっぺん}まで上昇し、暗闇に埋もれた夜森を見渡していく。

「あつちに一匹、そつちにも二匹、……お、そこにも一匹発見だ。」

……んでもって、こつちには行くんじゃねえぞ、七人で固まってやる。お前らしっかりと距離を保ちやがれー」

「ルイー、行くわよ」

MOBの位置を把握し、ロアは夜森の中を歩き始めた。

各々、レツカスに示された地点へと足を向け、狩りを開始する。

「……なあ、ロア？ 此処って、初期のダンジョンなんだよな？
それなのに……こんなにも用心しなくちゃならないのか？」

ふと、頭に思い浮かんだ疑問を口にする。

オレの台詞を背に受け、こちらを振り向かずにロアは答えた。

「ヨシルカの言っていたことを最後まで聞かなかったの？ 位置を
把握していたのはMOBだけじゃないわ」

「MOBだけじゃない？ ……あつ」

レツカスは、MOBを匹単位で数えていたが、最後だけは七人と
言っていた。

「……此処にいるプレイヤーは、何もオレたちだけじゃないってこ
とか」

「そういうこと」

ロアの頭が小さく揺れた。どうやら正解のようだ。

「勇者軍のプレイヤーには気を付けなさい」

そう、此処にいるのは、魔王軍のプレイヤーとMOBだけではな
い。

此処は六のエリア内であると同時に、アン・フィールド一のエリア内でもあるのだ。
レツカスが見つけた七名は、恐らくは勇者軍のプレイヤーがパーテ
ィーを編成して行動しているのだろう。

「ヨシルカは此処にいるメンバーの中でSEAが突出しているわ。
だから相手側に察知されずに行動することができる」

「でもよ、危険を冒してまで此処で経験を積む必要があるのか？」

夜森の庭は、辺りが暗闇に包まれている。魔法によって灯りを生
み出せば、他のプレイヤーも気づいてしまう可能性が高い。それな
らばいつその事、周囲を見渡しやすい草原で狩りを続けた方がいい
のではないだろうか。

だが、ロアは首を横に振る。

「夜森の庭では、MOBの出現率と経験値量が比較にならないわ。時間に余裕があれば草原での狩りも有効だけど、今はとにかく一秒だって時間が惜しいでしょう」

納得の上で、危険と隣り合わせの行動を取っているということか。それに、ルイーのステータスは全て255なのだから心配なんてしなくていいわ。EGOが稼働し始めてから一年以上が経っているけど、恐らくは魔王軍と勇者軍の全てのプレイヤーの中であなたが一番強いから」

少なくとも此処で、オレの相手になるプレイヤーは存在しないと断言し、ロアは夜森の中を進んでいく。その後を追いかけてながらも、オレは未だに不安を取り除けなかった。

テスターとしてEGOに参加し、一年前に実装された後も新たにEGOにログインし続ける彼らは、勇者軍のプレイヤーには持ち得ない利点がある。それはEGOのエリアに関する情報を得ていることだ。

テスターとしてエリア内を行動したことは、決して無駄ではない。その経験があるからこそ、勇者軍のプレイヤーよりも優位に立つことができ、危険を回避しながら圧倒的な差で攻略していくことが可能なのだ。

だが、オレはあくまでもEGO初心者であり、ログインするのはこれが初めてだ。たとえステータスが一般的なカンスト状態にあつたとしても、不安を拭い去ることなどできない。

確かに此処は、六のエリア内に作られた初心者用のダンジョンだ。出現するMOBは大したことはないだろう。しかしそれはプレイヤーを相手には当て嵌まることはない。

EGOは、魔王軍の陣地と勇者軍の陣地とを対極に、弧を描くように門がゲート続く。

それはつまり、六のエリア内に転移した魔王軍のプレイヤーのそばには、一のエリア内をもう間もなく攻略し終えるであろう勇者軍のプレイヤーが存在するということにもなる。

先ほど、レツカスが索敵範囲を調べることによって見つけた七名のプレイヤーは、少なくとも勇者軍の中では特に攻略を進めているパーティーであることは事実となる。一年が経過してなお、二の門ドゥ・ゲートをくぐったプレイヤーは二桁に満たないらしいからな。

「なあ、さっきの七名はあと少して二の門ドゥ・ゲートに辿り着くほどの腕を持つてるんだらう？　だとすれば……やっぱり此処を出た方が……」

「言っただけでなかつたかしら」

ようやくと、ロアが後ろを振り返る。

何度も質問を繰り返すオレに、飽きることなく返事をしてくれるのは非常にありがたい。

これがレツカスを相手にしていれば、恐らくは笑いながら心配なと言われるだけだろう。

「門ゲートと門ゲートが弧を描くように、六のエリア内と一のエリア内に作られた街や村、それからダンジョン内部に至るまで、魔王軍と勇者軍の全てが対極にあるのがEGOの特徴なの」

「全てが……対極に？」

「門ゲートだけでなく、全てが対極にあるとは、一体全体どうということなのか。」

「ルイー、あなたが想像する安全と危険は、此処に関してはまるっきり逆なの。夜森の庭にいるよりも、草原にいた方がむしろ危険が増すわ」

おかしな話だった。全方角を余すことなく見渡せる草原が、暗闇に満ちた夜森の庭にいるよりも危険だなんて誰が想像できるだろうか。

しかし、ロアは至って真面目だ。オレが訝しむことを予想の範疇にあるとし、話を進める。

「分かりやすい例を挙げるけど、六のエリア内スイス・フィールドで最も六の門スイス・ゲートに近いダンジョンは、夜森の庭になるわ。でもね、一のエリア内アン・フィールドにおいて、最も一の門アン・ゲートに近いダンジョンも、此処になるの」

思考をフル回転させ、ロアの台詞を反芻する。

そして、オレはロアが言いたいことの意味に気づいた。

「そう……か、魔王軍と勇者軍のプレイヤーがエリア内で同じダンジョンに入ったとしても、実際には別のダンジョンになるわけだね？」

「正解よ」

少しだけ、口角を上げる。

笑みを作るまでには至らなかったが、ロアをガツカリさせることがなくて安堵した。

「魔王軍と勇者軍のプレイヤーは、EGOでは別の存在として扱われているわ。そもそも勇者軍のプレイヤーたちは、魔王軍の中にプレイヤーが混ざっていることすら知らないのだから、彼らがわたしたちを発見した場合、MOBを狩っているのだと勘違いするはずよ。実際にはPKプレイヤーキルに手を染めようとしているとも知らずにね」

「無意識なPKプレイヤーキルシステムか……恐ろしいな」

勇者軍のプレイヤーは、たとえ勇者軍のプレイヤー同士のPKプレイヤーキルを行わなくとも、魔王軍のプレイヤーが存在するとは知らずに、EGOによって人を殺めている可能性があるのだ。

EGOが現実世界にまで影響を及ぼすことを知る者がいないことによつて、無意識的な殺人が日常的に行われていることになる。

誰もが殺人鬼になりうるMMORPG エンドレス・ゲート・オンライン。

それは人が持つ尊厳を踏み躪る最低最悪の仮想世界だった。

「話が逸れてしまったけど、つまりはヨシルカが見つけた勇者軍のプレイヤーは、それほど強いプレイヤーではないことになるわ。仮に二の門ドゥ・ゲートを突破するほどのレベルを持つプレイヤーがいたとしても、その可能性は限りなく低いはずよ。レベルが上がれば上がるほど、レベルの低いMOBを倒しても経験値が貯まりにくくなるから、此処にいる理由はないのだからね」

自分よりも弱いプレイヤーを捜し出し、PKプレイヤーキルを試みる無粋な輩も、中には存在するだろう。だがしかし、此処は魔王軍と勇者軍のプレ

イヤーが最も多いであろうダンジョン内部だ。

プレイヤーキル
PKをすれば、瞬く間に他のプレイヤーたちの間で噂が広がり、PKを行ったプレイヤーは現実世界において要注意人物として晒されることになる。そうなってしまえば、そのプレイヤーよりも強いプレイヤーに狙われる可能性が出てくるから、人目に付く場所では、そう簡単にはPKできないのだ。

「もう一つだけ言っておくと、夜森の庭はEGOにおける最も難易度の低いダンジョンであると同時に、魔王軍と勇者軍のプレイヤーを合わせれば、全てのダンジョンにおいて最もプレイヤー同士が鉢合わせる可能性が高いダンジョンでもあるの。勇者軍のプレイヤーの存在に気づいたら、すぐにその場から離れられるように気を付けておいて」

「え……戦わないのか？」

ふと、疑問が口に出てしまった。

「どうやらこの質問はロアの機嫌を損ねてしまったらしい。眉を顰め、オレの顔を見つめる。」

「戦えば、どちらかが死ぬことになるわ。……ルイー、あなたはそれでもいいの？」

囚人は、勇者軍のプレイヤーを一人狩る度に、現実世界での刑期が一日分短縮される。

それは勿論、囚人として服役中のロア自身にも当て嵌まることだ。だが、ロアはオレの質問に問い返してきた。

「……ロアは、倒したことがないのか？」

「当然でしょう。レベルを上げるにはMOBを狩ればいいだけだし、わたしには刑期を短くする意味も理由もない。だって……罪なんて犯してないのだから……」

そう言った後で、ロアは視線を逸らした。

教える必要のないことを口にしたらしく、後悔しているのだろう。しかしながらオレの疑問は止まらない。ロアが囚人になった経緯を知りたくなっていた。

「ロアは……どうして、魔王軍のプレイヤーになつたんだ？」

何故、捕まったのか、とは聞かなかつた。言い方は違えども、ロアは少しだけ肩を揺らし、逸らした顔を元に戻してくれる。

「今から一年以上前、現実世界で行われた世界一のハッカーを決める大会で、わたしは史上最年少での優勝を果たした」

「世界一のハッカー？ ……ロアがか？」

問うと、ロアは頷き肯定する。

まさかロアがハッカーとしての腕を持っているなんて思いもしなかつた。人を見た目で判断してはならないとは言つが、これはさすがに驚かざるを得ないだろう。

「……でもね、それが悪夢の始まりだつたわ」

ぼつぼつと光り輝く魔法の灯りを赤い瞳の中に映し込み、ロアは昔を思い出すかのように語り出す。胸が苦しくなりそうな表情で、辛そうに口を動かしていく。

「ハッカーの大会で優勝したわたしの許に、EGOの開発チームから連絡があつたの。チームの一員にならないかつて誘われたわ。…

…でも、わたしは断つた。脳細胞にウイルスを送り込み、人を殺すシステムに賛同できるはずがなかつたもの」

「それが原因で……今此処にいるのか」

そう、と頷き、ロアは深い溜息を吐く。

「開発チームへの参加を拒否したわたしは、無実の罪をでっち上げられて、囚人としてEGOへの参加を強制されているわ」

あくまでも可能性としての話だが、ロアはEGOのGMゲーム・マスターになつていたのかもしれない。

それが一転し、無実の罪を科せられてしまい、命を懸けたゲームに参加する羽目になつた。

もし仮に、ロアが開発チームに参加していたとすれば、EGOの狂气的なシステムに賛同し、人殺しを推奨することになつていただろう。そう考えれば、参加を断つたのは英断だったのかもしれない。だが、それが原因となつて囚人として服役中なのも事実だ。

「無実の罪か……どこまでも腐り切った奴らだな」

今すぐにもGMを捜し出し、その命を狩り取ってやりたくなる。しかしながら、それを実行に移せば、オレも人を殺したことになるだろう。たとえばGMが相手だとしてもだ。

「だから、わたしが刑務所を出る方法は一つしかない……。王者の証を手に入れて、それを勇者軍のプレイヤーに渡すためにドロップするの」

魔王軍のプレイヤーが王者の証を手にしたとしても、勇者軍のプレイヤーを主に置くシステム上、完全制覇したことにはならない。全てのプレイヤーの脳細胞に潜むウイルスプログラムを駆逐することは不可能なのだ。

でも、だからと言って、リアルタイムでログイン中の勇者軍のプレイヤーを全て殺し切ることなど現実的ではないし、ロアには人を殺すつもりもない。自分の手で現状を打破する方法は皆無にも思えた。しかしだ、そんな中にも一つだけクリアする方法がある。

それは、王者の証だ。

「たとえ誰一人として勇者軍のプレイヤーがEGOを完全制覇していなくとも、勇者軍のプレイヤーが王者の証を手に入れることができれば、全てのプレイヤーはウィルスから解放されることには変わりはないわ。だからそれはつまり、魔王軍のプレイヤーが勇者軍のプレイヤーに代わりに王者の証を手に入れたとしても同じことになるの」

王者の証を手に入れた者は、EGOを完全制覇したことになり、現実世界において一億ドルの報奨金を受け取ることができる。そしてそれは、一度でもEGOにログインしたことのある全てのプレイヤーの命を救うことにも繋がる。ロアは、一年以上前からずっと、EGOから脱出する方法を考えていたのだ。しかし、その方法には穴が一つ存在する。

「王者の証をドロップするには……ロア、お前が死ななくちゃいけないってことだろ……？」

MOBは当然のことながら、全てのプレイヤーはゲーム内で死に至った場合、今現在所持中の道具をランダムにドロップし、所持金の十分の一を失うことになる。これは強制的であり、死の代償とも言えるMMORPGならではのシステムだ。

他のMMORPGであれば、死に至ることに悔しくはあるものの、死の代償さえ支払えばそれを終わりだ。けれどもEGOは他の全てのMMORPGとは根底から異なっている。

死ねば、終わり。既に送り込まれているウィルスが七日後に活動を開始し、現実世界において死に至らしめるのだ。刑務所を出るためとはいえ、自ら死を選択するなんておかしすぎる。

「大丈夫よ、現実世界で死ぬまでにはタイムラグがあるから、EGOでわたしが死んでしまったとしても、次の瞬間には王者の証を手に入れた勇者軍のプレイヤーがEGOの完全制覇者としてわたしたちを救ってくれるから」

「もし、拾わなかったらどうするんだよ。それに……王者の証を手に入れたとしても、GMゲーム・マスターがそんな危険な奴のことを野放しにしておくとと思うか？ それ以前に、魔王軍のプレイヤーが王者の証を手に入れることをGMゲーム・マスターが許すとも思っているのか？」

「それはあなたには同じことが言えるわ、ルイー」
言葉を返し、ロアは立ち止まる。

獣の息遣い、そして足音が聞こえてきた。既にその姿を視界にも映し出している。

「ルイー、あなたは生まれたての魔王……。だからこそGMゲーム・マスターはあなたを野放しにはしない」

夜森の庭のMOBは、どうやらまだ好戦的ではないらしい。こちらの姿に気づく位置に出てきたものの、間抜けにもそこら辺をのそのそと歩いていた。

「何故、あなたが魔王のIDを手に入れたのかは知らないけれど、魔王討伐クエストなんてものを即座に開始するところを考えれば、現状として、あなたの方が危険に晒されているわ」

そう言われて、オレはようやく思い出す。

何故、オレの自宅にはEGOのIDCがあつたのか。そしてそれが魔王のIDだったのか。

オレと魔王のIDの間には、偶然とは言い難いものが存在している。囚人ではないオレが魔王軍のプレイヤーとして活動することになるのは、まだ納得できなくもない。しかしだ、魔王のIDでログインし、EGOへとやって来たオレは、此処からログアウトすることができない。

仕事が終わわり、母さんが家に帰ってくれば、半睡眠状態を延々と続けるオレの異常に気付くはずだ。そうなればきつと、EGOの裏の顔が世に知れ渡ることになるだろう。そんなことを、EGOのGMがただ黙って見ているわけがない。必ず、何らかの対処を施すはずだ。

それが魔王討伐クエストであり、EGOと現実世界において、オレを二度殺すつもりなのだ。

ということとはつまり、あと数時間後には開始される予定の魔王討伐クエストに挑戦する勇者軍のプレイヤーは、GMである可能性が非常に高いということになる。もし、GMが魔王討伐クエストの挑戦者となれば、オレには勝ち目がない。他のプレイヤーからすれば、オレのステータスは全てがカンスト状態にあるが、そんなものはGMの前では何の意味もないだろう。彼らもまた、オレと同じように、全てのステータスがカンストしているはずだ。

そう考えると、オレは今更ながらに恐ろしくなってきた。少しでもいいから、勝つ可能性を高めるために、EGOでの戦い方を、身を持って経験し、覚える必要があるだろう。

「……それに、今のわたしにはそれ以外に此処を抜け出す方法が思い浮かばないから、いつか王者の証を手にする日を夢見て、門番に挑み続けなければならぬ」

EGOには十個の門が存在し、それぞれ門をくぐるには門番を倒さなければならぬ。

それは勇者軍だけでなく、魔王軍のプレイヤーも例外ではない。王者の証を手に入れるには、五体の門番ゲート・キーパーと戦うことになるだろう。しかしだ、一人で倒してしまえるほど甘くはない。

「ロア、キミは本気で王者の証を手に入れるつもりなんだな……」
「当り前よ、そうしなければ運命を切り開くことなんてできないって知っているもの」

考え直したりはしないだろう。

ロアは、生き残るために王者の証を手に入れ、現実世界で自由になるためにワザと死ぬつもりだ。たとえ王者の証を手に入れるのが何年先になろうとも、諦めることはない。それがロアの決めた攻略方法なのだ。

但し、本当にそれでいいのだろうか。

「……なあ、ロア？」

ふと、思い出したことがあった。王者の証についての話をロアとしていなければ、恐らくは思い出すことはなかっただろう。

「なに？」

「……真のクエストクリアって、なんだろうな」

魔王であるオレの許へ届けられた開発本部からのメッセージには、王者の証を手に入ればEGOからログアウトすることができると思われていた。それはつまり、ロアが言っていたように、王者の証を手に入れた者が勇者軍のプレイヤーの誰かに殺される必要があるということだ。メッセージだけでは気付くことのできない真実に直面し、オレは胸の奥が締め付けられた。

ただ、本当に王者の証を手に入れることでしか全てのプレイヤーを救うことはできないのか。

「え」

「いや、あのさ……、オレに届いたメッセージにはさ、王者の証を手に入れるか、または真のクエストクリアをしない限りログアウト不可能って書いてあっただろ」

真のクエストクリア。

その言葉を耳にしたロアは、息を潜め、思考する。

「……そういえばそうね。ルイーに言われるまで気付かなかったわ」
「なあ、真のクエストってのが何なのか分からないけどよ、それをクリアすれば……ロアが王者の証を手に入れる必要はないってことじゃないか」

肩が揺れる。一年以上を掛けてEGOの攻略を続けてきたのだから動揺するのも無理はない。

王者の証を手に入れる他に、EGOを抜け出せる方法があるかもしれないのだ。そんなものが存在するというのなら、何としてでも

真のクエストクリアの条件を知っておきたい。しかし、

「その話は魔王討伐クエストを切り抜けた後で、ゆっくりとしまし
よう……」

赤に染まった真っ直ぐな瞳をオレに向け、強引に、ロアは話を終
えてしまう。

そしてすぐに、意識を前へと戻した。

ロアの姿を見て、オレは思考を中断する。確かに今はそんなこと
を話している場合ではない。

「ルイー、あなたが倒しなさい」

「オレが？」

頷くロアから視線を移し、四本足の獣へと意識を持っていく。

「今のあなたには、圧倒的に経験が不足しているわ。あなたに攻撃
することが可能であれば、わたしでも倒すことができるはずよ」

「情けなくて溜息が出そうだ」

「もう出てる」

指摘されて、オレは再度溜息を吐く。本当に情けない。

「ロアが魔王軍でよかったよ」

公式サイトから送られてきたメッセージには、別のことも書かれ
ていた。

全ての魔王軍のプレイヤーは、魔王への攻撃を禁じられている。

EGOのシステム上、魔王への攻撃は不可能なのだ。一対一の勝負
を申し込まれ、許諾などしない限り、魔王軍のプレイヤーのみを対
象に、オレは無敵の存在というわけだ。

つまりは、機嫌を損ねたロアに後ろからブスリと刺される心配も
ない。

「……はあ、わたしはルイーが魔王で不安よ」

わざとらしく肩を竦めるオレを横目に確認し、ロアは呆れた表情
で溜息を吐く。

「ほら、武器を手にとって」

真っ黒な外套の内側に隠すように携えた、これまた黒に染まった

長剣の柄を握り締め、ゆつくりと鞘から引き抜いていく。鉄が擦れる音が耳に届き、艶やかな黒に僅かな赤が施された鋼が、夜森の庭の空気に触れた。

EGOにログインした時、オレが持つ名無しの黒剣は、既に初期装備として背に携えていた。

服装もさることながら、魔王が装備するに相応しく、それなりの攻撃力と守備力、そして付加能力を持ち合わせてもいた。ロアとレツカス、そしてローランドと共に初期装備を調べてもらったところ、黒剣には閻属性を除く全ての属性を対象に攻撃力が倍加し、外套には状態異常などの特技や魔法を受け付けない効果が備わっていた。外套はともかくとして、黒剣については、今現在全ての魔王軍のプレイヤーが持つ武器の中で、最も強力であると言えるだろう。

「たとえば仮想世界とはいえ、此処では現実世界で剣を振るのと何も変わることはないわ。剣を振るえばMOBを切り裂くことができ、肉が裂ける感触が剣から柄に、そして手に伝わってくる。それは逆に、あなたがMOBの攻撃を受けたとしても同じことだから憶えておいて」

その言葉を聞いて、オレは大事なことを思い出す。今に至るまで誰にも問い訊ねなかったことが不思議なほどに大きな疑問だった。MOBを狩る前に、そして魔王討伐クエストが行われる前に、どうしても聞いておかなければならないことだ。

「……ロア、EGOには知覚が存在するの？」

知覚。それは感覚器官に与えられた機能の一つであり、人が持つ五感の中では触覚と同義だ。

仮想世界において、知覚を実際に感じ取るか否か。それはとてつもなく恐ろしいことだ。

「ルイー、あなたが肌で感じているものは全て現実に等しいわ」
肯定してほしくなかったが、ロアは戸惑いもせず事実を口にす
る。

「っ、……だが、公式サイトには知覚があるなんて一言も書いてな

「かつたぞ」

今更そんなことを言っても無意味なことは理解している。

EGOを運営するのは、人を殺すことに何の躊躇いも持たないG
Mたちなのだからな。^{マスター}

認めてしまえば、本当に後戻りができないことを肌で実感することになるだろう。だが残念なことに、ロアは否定する。

「全ての魔王軍のプレイヤーは、五感の全てをEGOにおいて感じ取ることが可能なの」

「そんなバカな……っ」

勇者軍のプレイヤーが知覚を感じ取れば、現実世界でもすぐに話題となり、運営問題へと発展するに違いない。だが、それが魔王軍のプレイヤーであれば、秘密が漏れることはない。何せ相手は囚人なのだから脱獄でもしない限りは心配する必要もないのだ。

改めて感じたが、魔王軍のプレイヤーは囚人と言う名のモルモットだ。誰がどう見ても明らかに、人として扱われていない。

「知覚があるってことは……もし仮に、此处で……EGOにログイン中に死に至るようなことがあれば、現実世界と同じような苦痛を味わうことになるのか？」

「だからこそ、わたしたちは死ねないの」

その言葉が、重く押し掛かる。

生まれたての魔王としてEGOにログインするオレに、重圧として襲い掛かる。

EGOでは、仮想世界と現実世界、合わせて二度の死を体験する可能性があり、しかもそれは囚人を対象にする場合に限り、前者にも苦痛を感じるようになる。

もし、此处で死ねば、現実世界でも同じ苦しみを味わうことになり、そしてその恐怖を、既にEGOにおいて体験している魔王軍のプレイヤーたちは、二度目の死が訪れる七日後まで、死への絶望に怯えながら生きていかなければならない。

「……此处は最悪な世界だな。反吐が出るよ」

五感が存在し、全てを感じ取ることができるEGOでは、それも不可能ではない。

痛みに苦しみ悶える魔王軍のプレイヤーの姿ですら、日常的な光景にもなりうるだろう。

「囚人として投獄された初めの頃は、わたしもまだ何度も泣いていたわ。それこそ此処で泣き叫び、そして現実世界でも涙を流した。……でも、そんなことを繰り返しても救われるわけじゃないし、助けがくる保障もない。だから、どんなに悲しいことがあっても、絶対に泣かないって決めたわ」

決して笑うことはなく、感情を捨て、頑なに表情を殺し、喋れない人形のように生きていく。

それがロアの選択だった。何ともやるせない気持ちになる。

「これ以上話をするのは時間が勿体ないわ。今は目の前の敵に集中して」

しかし、ロアはあくまで冷静に敵の姿を捉えている。

それがまた何故だか寂しそうに見えてしまう。

「……おう」

返事をし、軽く息を吐く。

両手で黒剣を固く握り締め、手のひらに触れる感触を確かめてみた。

これは仮想であり現実だ。知覚を感じ取れる以上、死ぬ物狂いでMOBを狩り、経験を積み、生き抜いていかなければならない。

だからオレは、一歩前に出た。

距離を測り、慎重に、しかし確実に、MOBの許へと近寄っていく。だが、

「待って」

ロアの声が背に届く。

すぐそばに敵がいる状況で、あえてロアは呼び止める。

「なんだ、ロア？」

「ヨシルカから報告が届いたわ。……すぐ近くに別のパーティーが

現れたみたい」

指で手の甲をスライドし、レッカスから届いたメッセージを確認する。

「どうやら、先ほどの七名編成のパーティーとは別のパーティーが近辺を散策しているらしい。」

「ご丁寧にも方角と距離関係までしっかりと書かれている。レッカスがいればダンジョン内でも安全に狩りができそうだな。」

「どうする、レッカスのところに戻るか？」

話が長くなり過ぎたせいで、まだ一匹も倒していない。オレたちの代わりに他のメンバーがMOBを狩っているかもしれないので、少しは経験値も貯まっているはずだが、やはり自分の手でMOBを倒して、EGOでの戦い方を学んでおきたいのが本音だ。

「そうした方がいいわ。夜森の庭のプレイヤーには恐いもの知らずで無謀なプレイヤーが多いから、もし見つかりでもすればすぐに攻撃対象にされるはずよ」

EGO初心者のプレイヤーが、最も初めに訪れる可能性が高いダンジョン、それが此処だ。

ダンジョンに足を踏み入れると同時にアバターが転移するわけではなく、しかも予め入口が決まっているわけでもない。魔王軍と勇者軍のプレイヤーが同じタイミングで夜森の庭の散策を始めたとしても、EGOの構造上、それぞれのプレイヤーが立つ位置は左右対称となり、出会う可能性もそれほど多くはない。

ただ、やはり夜森の庭は初心者向けのダンジョンということもあり、簡単に最深部までたどり着くことが可能だとロアは言っていた。つまりは、いつまでも同じ場所に居続けられ、いずれは他のプレイヤーに見つかってしまふことになる。

「行きましよう」

ロアに促され、オレは目の前の敵を倒すことなく、その場から立ち去ることを決めた。

命拾いしたのはMOBか、それともオレ自身か。

増すだろう。ステータス上ではオレよりも劣っているとしても、実際にはレツカスの方が索敵範囲も広く、誰よりも勝っているということだ。

「なるほど……、でもレツカスはそれでいいのか？ 索敵以外にも上げておかないと戦闘で困るんじゃないか？」

「ヨシルカはAGIとSEAの二極型だから心配ないわ」

不安をよそに、ロアは呆気なく回答する。

「AGIとSEAの二極型か……」

敏捷と、索敵。レツカスが集中的に上げているのは、その二つだった。

索敵能力に優れていれば、他のプレイヤーやMOBに気づかれる前に位置を知り、同時に敏捷に特化した上げ方をしていれば、危険な状況下に陥ったとしても、すぐにその場から逃げ去ることができ。この二つを特化し、上げていくことによつて、レツカスはEGOを生き抜いてきたのだろう。一度でも死ねば現実世界でも死に至るEGOにおいて、実に見事な考えだ。

「レツカスって、実は頭いいの？」

「違うわ。ヨシルカは別のMMORPGで廃人レベルのチーターだったから、どうすれば此処で生きていくことができるのかを知っていただけよ」

チーター。それは不正を行なうプレイヤーの俗称だ。

ズルをしたり、騙したりすることに長けた者が、MMORPGにおいてチート行為をすることで、故意にレベルを上げたり、自動的にMOBを狩り続けたりすることが可能となる。

勿論、ほとんどのMMORPGにおいてチート行為は禁止されている。そんなことを続けていけば、いずれはGMに見つかってしまうだろう。

「本人から直接聞いたことだけど、RMTで生計を立てていたらしいわ」

RMT リアル・マネー・トレードによつて、レツカスはお金

を稼いでいたらしい。

MMORPGでRMTをするには、それ相応の腕が必要になるが、レツカスにはその手の才が備わっていたということか。

「でもね、過度なチート行為で暴走しすぎて、その時プレイしていたMMORPGにシステム上の負荷を掛けすぎたみたい。現実世界に損害を与えたのが露見して捕まったらしいわ」

詰めが甘いと言うべきか、間抜けと言うべきか。

とにかく、レツカスらしい捕まり方かもしれない。本人からすれば不名誉だろうがな。

「因みに、ロアはどのステータスを上げているんだ」

「因みに、わたしは自分のステータスを誰にも教えないの」

「……そ、そっか」

ばっさりと切り捨てられ、オレはただ顔を引きつらせて声を絞り出した。

よく考えれば分かることだが、命を懸けてプレイするEGOにおいて、自らのステータスを知られることは、死に値すると言えるだろう。言いたくないのも当たり前だ。

「だけどよ、それならレツカスのステータスについて言い触らしても大丈夫なのか？」

「言い触らしたことはないけれど？」

言い触らした相手を前にして嘘を吐く。

「オレに今話したよな」

「同じパーティーのメンバーなのだから当然でしょう？ 他のメンバーも皆知っているわ」

パーティー内で索敵を担当するのがレツカスということは、それなりにSEAが高いことが見て取れるだろう。しかしながらAGIに関しては別だ。ロアに言われなければ、オレはこの先もずっと知らなかったかもしれない。

「いや、同じメンバーだと言ってもな、さすがにそれは」

「安心して、ルイーを除く他のメンバーは半年以上固定しているか

ら

オレの言葉を遮り、ロアは不安を取り除く。

「……半年もメンバーを固定してパーティーを組んでるのか？」

「少し前に……一人死んで、今は六名になったけれどね」

長い溜息を吐く。その時の光景を思い出しそうになったのか、ロアは軽く頭を振ってみせる。

「ヨシルカのステータスは、パーティー内のメンバーなら全員が知っているの。だから、ルーイが知っても問題はないわ。……まあ、本人の口から言いたかったでしょうから、それに関しては悪いことをしたとは思っているけど……」

頬を掻き、表情を見せずに夜森を歩く。そしてオレはその隣に並んで、後れを取らないように歩を合わせている。

「レツカスのことだから、きつと怒るぞ」

「まだ出会って一時間も経ってないのに、ヨシルカの性格が分かるの？」

「分かりやすい奴だからな。第一印象で、いい奴だけど、どっか抜けてる奴だなんて感じたよ」

その通り、とロアは言い、肩を上下した。

ロアも、レツカスとは現実世界で出会ったことはない。ただ、それでもレツカスの裏表ない態度には好感が持てるのだろう。実際には黙って見ていられないだけかもしれないけどな。

「もうすぐ着くわ」

話をしていると、MOBを狩りに出る前に集まっていた場所へと戻ってきたらしい。

「……ん？」

そして、気付いた。

オレとロアの許に、もう一通のメッセージが届いていることに……。

「どうかしたの、ルーイ？」

「いや、これ……」

来るな、とだけ書かれた短いメッセージ。

二人で読み、互いに視線を合わせる。その直後、

「　　ッ、なん、だっ」

突如、赤い物体がオレの脇腹に直撃した。

「いってええっ」

反動によつて地面を転がり、周辺に土埃が舞う。

しかもそれで終わりではない。どうやら先ほどの赤い物体は、火の塊だったらしい。

外套に燃え移り、灰色の煙と赤紫に踊る炎がオレの肌を焼く。

「ルイッ」

少し離れた位置から、ロアの声が聞こえた。

二拍ほど遅れて、今度は水しぶきが襲い掛かる。

「ぶわうっ、熱っ、って冷たっ」

水柱がオレの体を隈なく駆け巡り、燃え移っていた炎を沈下させる。

少々荒っぽい技だが、おかげで焼死体となつて発見されることはなくなった。ロアに感謝しなければならぬ。

だが、ロアの姿を視界に映したかと思えば、すぐ後ろに別のプレイヤーが剣先を向けて今にも飛びかかるうとして見えた。

「ロアッ、後ろだっ」

「くっ」

しかし残念ながら声が届くのが遅すぎた。

オレの無事を確認し、ロアが後ろを振り向こうとした時には、後ろにいたプレイヤーの剣がロアの体を背中から突き刺し、貫通する。

「なっ、……ロアッ」

堪らずにロアの名前を叫ぶ。けれども、ロアは口を開こうとはしない。

否、正確に言えば、開く必要がなかった。

「なにっ」

勇者軍と思われるプレイヤーの声が夜森の庭に響く。

一瞬にしてロアの姿が掻き消えたのだから当然だ。

「此処よ、残念な人」

と、いつの間にかロアはプレイヤーの背中に回り、黒くねじ曲がった鎌のようなものを左腕に巻きつかせ、鎌の先でプレイヤーの首を刈り取った。

首から上を無くしたプレイヤーの胴体が、その場に崩れ落ちる。

だが、四散しない。エフェクトは未だ残ったままだ。

「わたしは死神。魂を狩る者よ」

そう呟き、ロアは刈り取ったプレイヤーの頭部に視線を向け、髪の毛を引っ張り持ち上げる。

「ひっ、ひいっ、なんだっ、俺は一体どうなってるんだっ」

首だけになったプレイヤーが、恐怖に声を漏らした。

しかしそれも当然と言えよう。首を獲られ、一瞬のうちに死んでしまったはずのアバターが、未だに意識を保っているのだ。プレイヤーからしてみれば、我がことながら恐ろしくて動揺するのも無理はない。

「巢に戻りなさい、残念な人」

もう一度、残念な人と言い捨て、ロアは宙へと首を放り投げる。

すると驚くことに、胴体を失ったプレイヤーの首がゆっくりと姿を無くしていく。それは決して四散しているわけではない。死によってアバターが消滅する際、レックサスたちが倒したMOBのように点滅を繰り返し、やがて体が四散するかのようにならなくなる。

けれどもロアが倒したプレイヤーは、それとは異なる現象を起こしていた。

「ロア、どうなってんだ」

「死神の特技。この死神の鎌を使って、対象のプレイヤー一人を強制的にログアウトさせたの」

ゆらりと体を反転させ、左腕を向けた。

渦を巻くように左腕へと侵食した黒い鎌は、手首から肩の上まで張り付いている。

「強制ログアウトだと？ そんな特技があるのかよ……」

「魔王軍のプレイヤーならではの特技よ。勇者軍のプレイヤーには扱えないわ。それより、次が来るから気を付けて」

口を止め、意識を夜森の全体へと集中させる。

ロアを見習い、オレも辺りに目を向けてみた。……確かに、いる。

オレたち二人を囲むように、一人、二人、三人……、合計で六人か。

「オレに攻撃した奴はどいつだ？ ぶつ飛ばしてやる」

「殺さずに倒しなさい。人殺しになりたくなければね」

随分とハードルの高いことを言いやがる。

MOBの一匹すら倒したことがない初心者に言うことがそれか。

「瀕死状態とどで止めておくなんて器用な真似、今のオレにはできねえぞ」

「そう言うと思ったわ。……それなら、わたしの援護を」

援護と言われても、オレはまだ特技や魔法を憶えていないし、回復魔法なんて使えない。

そんな状態で満足に援護ができるとは到底思えないのだが、それでも現状において、オレはいないよりはマシな存在らしい。

「努力はしてみる」

「いい返事ありがとう、ルイー」

ロアが和らぐ。ロアが、少しだけ笑みを見せてくれたのだ。

しかし、その表情を十分に眺めることは敵わず、次の攻撃が始まった。

「後ろの二人、止めてっ」

「任せろっ」

前後に二人ずつ、そして左右に一人ずつ、気配を感じている。

後方を向くオレを目掛けて、暗闇の中から二名のプレイヤーが姿を現した。

「死ね、魔王ッ」

片方が高く飛び上がり、両腕を振り上げて鉄の剣を視界に映し込ませる。もう片方は言葉を使わずにオレに向けて一直線に駆けつける。

どうすればいい。考えるな。思考するだけ無駄だ。

「これでどうだっ」

上からの敵の動きに合わせて体を翻し、振り向きざまに外套を脱ぎ去り目隠しに利用する。

角度を見て、目の前の敵の視界にも影響を与え、オレは横に転がり態勢を整えた。

「うっ、くそっ」

外套に目を取られオレの姿を失った上の敵は、地に足を着くと同時に辺りを見回す。

だが、その時には既にオレは後ろ側へと回り込み、背に剥き出しとなった鞘から黒剣を引き抜き、下の敵の足を切る。

「ぐあっ、……っ」

声を上げ、足を押さえて倒れ込んだ。

これで一人、動きを止めた。大量の血が切り口から溢れ出ているが、勇者軍のプレイヤーは知覚を感じないのだから我慢する必要もあるまい。

「貴様ツ、よくも」

負け犬のような台詞を吐く上からの敵は、闇の奥へ外套を投げ去り、剣を構え直す。思考する暇を与えない。たとえオレがEGO初心者であり、今の状態ではロアに敵わないとしても、仮にもオレは全ての魔王軍のプレイヤーを支配下に置く、生まれたての魔王だ。プレイヤーに恐れを成してたまるものか。

攻撃の手をロアへと変えられる前に、オレは地を蹴り一瞬で間合いを詰める。

「死ね ツ」

殺すつもりはない、が、つい言葉を口にしてしまう。ロアに聞かれたらどうか。

腕を捻り回転を掛け、真っ直ぐに足元目掛けて剣先を伸ばす。

「見え見えなんだよっ」

オレの動きに対抗し、敵は真横に回避を試みた。

しかし、遅い。圧倒的にオレの方が動くのが早い。真横にずれる姿を目で追い、線で捉え、地を走りながらも方向転換し、敵の逃げ道を塞ぐ。

あえて単調な攻撃を試みせたのは、敏捷力に絶対の自信を持っているからだ。剣の使い方が様にならない状態ではあったが、それでも腕を振り、下手くそながらも黒剣を扱うことは不可能ではない。油断したわけではないだろうが、まさか動きを合わせられるとは思わなかったに違いない。

敵は目を丸くし、慌てて鉄の剣を構え直そうとする。が、流れに身を任せることができずに足を捻り、夜森の庭に背を付けた。

「終わりだっ」

決して動きを止めることなく、地に伏した敵を追い抜きざまに片足を切り落とし、同時に反撃へと備えて黒剣に重心を置き、両足を上げて宙を舞う。

右側から、体全身を上空で捻って左側へ。敵を跨いで再度もう片方の足を突き刺す。

苦痛に満ちた声が夜森に木霊し、敵がのた打ち回った。動きを止めるにはこれで十分だ。

回復魔法でもどうにもならなかったらオレは人殺しってわけだ。自分でどうにかして無事に生き残ってくれ。

「ロアッ」

敵を二人倒したことに安堵している場合ではない。

まだ、あと四人の敵が残っている。

「そつちをっ」

声を荒げ、ロアが右へと首を振ってみせた。

そちらの方角に、一人。反対側の地には既に一人、実体を無くしつつあるアバターの姿を視界に捉える。前方には、見たところ敵は一人しかいない。どうやら二人の敵を強制的にログアウトすることに成功したらしい。

左手の鎌で前方の敵を引き付け、右手からは水の壁を作り出し防

御手段を取っている。

その手間を無くすため、オレは右側の敵に向かって駆け出した。

「おおおおおあああああああっ」

「ッ、くっ、……魔王めっ」

オレの声に気づき、敵はロアへの攻撃を中断した。

槍の矛先をこちらへと向けたかと思えば、唇を震わせて短めの呪文を唱えるのが見えた。

瞬間、矛先が青緑に輝き、暗闇を明るく照らし出す。目晦ましか。
「無駄だっ」

駆け抜ける際に拾い上げた外套で自らの視界を塞ぎ、足を止めずに一気に距離を縮める。

予想外の行動に敵の不意を突き、思考と実行を半歩遅らせる。

その間、オレは外套を宙に投げ、敵の視線が泳ぐのを確認し、限界まで近づくと前に敵の足元を目掛けて思いつき黒剣を投げ飛ばした。

「なっ、バカか貴様ッ」

「バカはお前だろっ」

共に声を上げ、言葉を交わし、故意に意識を逸らす。

ロアが無事なら、それでいい。オレには武器が無くともコンスト状態の筋力が備わっている。

言うなれば、地力の差が圧倒的ということだ。

「ぐおっ、……ぶはあっ」

槍を相手にするには、間合いを詰めればいい。そうすれば矛先に脅威を感じることもない。

外套と、黒剣。自らの武器と防具を投げ捨てたことよって、敵の油断と興味を誘うことに成功したオレは、一拍の遅れを取り戻させることなく、敵の懐に入り込む。

そして、M M O R P Gとしては原始的とも言える攻撃手段 己の拳を用いて、敵の顔面を殴りつける。加減はしない。武器も防具も持たないオレが隙を見せたら、それだけで命取りになるからな。

「これでとどめだっ」

手から槍を零し、堪らず地に転がる敵の上半身に跨る。身動きを取れなくなった敵は足をバタつかせるが、既に手後れだ。

オレは拳に力を込め、鼻っ柱をへし折る勢いで連打する。

敵の頭上に浮かんだHPBヒットポイントバーに視線を向けてみれば、八割以上が減少し、レッドゾーンへと突入していた。あと少しで、こいつは死に至るだろう。そして、現実世界でも同じく。

だが、ロアの言ったことだけは忠実に守ってみせる。

オレは魔王だ。それぐらいのことが守れなくて魔王討伐クエストを切り抜けるものか。

「死なずに、倒すっ」

横を向き、ロアの姿を確認する。

前方の敵と相対し、黒鎌を自在に操るロアは、オレの方にも意識を向けていたらしい。

横目にオレと視線を交わし、すぐに理解してみせた。

「くっ、……おらよっ」

ノックダウン寸前の敵の顔を、両手で挟むように持ち上げる。

力の限界を感じ取ることもなく、軽々と持ち上げたかと思えば、上体を捻り勢いをつけ、敵のプレイヤーを空高く投げ飛ばした。

「ヒッ」

意識が朦朧とする中で、更なる悲劇が敵に襲い掛かる。

前方に敵を迎えたまま、あるうことが右足を左足に掛けてくるりと反転し、背中を晒した。

だが、それにより左腕に絡みついた黒鎌の先で宙を裂き、身動きの取れなかった敵の首を流麗な動作を持って刈り取ってみせる。死に至る前に、強制ログアウトを余儀なくされた。

これで残す敵はあと一人。恐らくはあいつがオレに魔法をぶつ放した野郎だ。

「行くぞ、ロアッ」

残る一人は、ロアが背を向けたにも関わらず、攻撃の手を緩めて

しまった。宙を舞う仲間が首を刈られたことに驚愕したのだろう。

「くっ、こいつら……強えっ」

数で圧倒していたはずの敵は、形勢が逆転したことにたたらを踏む。だが、

「ごめーん、待ったあ？」

甘ったるい声が、夜森の庭に響き渡る。

オレとロアは声の主を視界に捉え 目を疑った。

「も、燃えてやがる……っ!？」

声の主は、全身を真っ赤に染め上げていた。 否、赤々と揺れ

動く炎の渦の中心にいた。

木々に燃え移ることなく、間を縫って此処まで駆けつけたのだろう。

「いつの間に……」

新たな敵の出現に、ロアは目を瞬瞬いた。オレも、そしてロアも、そいつの気配を微塵も感じ取ることができなかった。あれほどまでに赤に燃える存在に、全く気付かなかったとは考え難いが、声の主は確かにそこにいる。幻想ではない。

「来るのが遅いんだよ、エトリーナッ」

炎の渦に包まれた女性プレイヤーの姿を視認し、もう一人の敵が怒声を上げた。

彼女が駆けつけたことよって一息つき、心を落ち着けたようだ。その様子から察するに、それ相応の腕の持ち主であることが窺える。

「初めましてえ、生まれたての魔王う、わたくしはマルベラ＝エトリーナ^ゆって言うのお」

人を小馬鹿にしたかのような口調で自己紹介を始めた声の主マルベラは、にんまりと笑みを浮かべながら両手を広げてお辞儀する。

翼を持っているわけではない。しかし、死神のロアと同じように、両足は地についていない。

「……あなた、何者？」

眉間に皺を寄せ、ロアがマルベラを睨みつける。

しかしながらマルベラは気にもせずゆっくりと首を回した。

「うふふ……、わたくしは炎属性の精霊族なの、憶えておくといいわあ、……でもねえ、どうせ今此処で貴方たちは死んじゃうのよお？」

くつくつと笑い声を上げ、残った一人の仲間に向けて同意を求めらる。

その姿を見て、オレは声を漏らした。

「……化け物みたいな奴だな、お前」

目が、笑っていない。

赤に輝く瞳の奥には、今までに相対したプレイヤーとは異なる、異常な意識を植え込ませるには十分な恐怖を持ち合わせていた。

「くふふつ、化け物はどつちよお、貴方は魔王でしょう？　そしてわたくしは善良なる一般人なんだからあ」

両腕を回して自分の体を抱きしめる仕草を取り、被りを振ってみせる。

そんなマルベラの姿を瞳に映し、ロアが口を開いた。

「あなたは……いえ、あなたたちは何故、彼が魔王だと？」

一つの疑問。頭の隅に引っかかっていた疑念を、敵に問う。

確かに、これはおかしな話だ。オレが魔王だということを知っている者は、魔王軍のプレイヤーとGMゲーム・マスター以外には存在しない。それなのに、彼らはオレの正体を知っていた。

出会い頭に攻撃を仕掛け、オレが魔王であることを理解していた。しかも、一般人という言葉を用いている。それが意味するものは、一つしか存在しない。

「さあて、なんででしょうねえ？ わたくしに勝つことができれば教えてあげてもいいんだけどお、でもどうせ死んじゃうんだし意味がないわよねえ、……ほおら」

「ッ、ルイッ」

瞳に映る景色の全てが赤に変化した。

呪文を唱えることなく、マルベラは一瞬のうちに両手に直径二十センチほどの炎の塊を作り出し、オレとロアに片方ずつ、動作もなく投げ飛ばした。

オレの名を呼び、ロアの声に反応する。

背に回ったオレを守るように、ロアが水の壁を出現させ、炎の塊から身を防いだ。

しかし止まらない。炎の塊は水の壁を貫通し、なおも威力を失ってはいなかった。

「ちいつ、くそつたれがつ」

即座にロアの肩を引き、立ち位置を入れ替えると同時に、地面に伏した。

ロアに覆い被さり、炎の塊を背に受け止める。

「ぐあ……っ」

もう片方は水の壁に当たった反動で軌道が逸れ、真っ暗な大樹に火を灯す。

炎が背中に燃え移り、HPBをじりじりと削っていく。それを見たロアが、唇を動かし一瞬のうちに呪文を唱える。

「しっかりして、ルイッ」

暗闇の空から、水の滝が零れ落ちてきた。対象となるのは、オレ

とロアの二人だ。

赤く燃える炎は収まったが、オレのHPは一割ほど減らされてしまったようだ。

「くっ、大丈夫だ……」

ロアの無事を確認し、そして我が身の状態を確かめる。

体には異常はない。火に炙られ焼け焦げた背中が悲鳴を上げているが、今はそれどころではなかった。目の前の敵に意識を集中させなければならぬ。

「あら、あらあ、さすがは魔王なだけはあるわねえ？ わたくしの攻撃を受けてもゼーんぜんHPが減ってないわあ」

くすくすと感情のない笑い声を上げ、オレとロアの様子を観察している。

魔王が相手だというのに、何故そんなにも余裕を持っていられるのか。

「レツカスたちは何処に行ったんだ……」

こいつらと同じく、オレたちも七名パーティーを組んでいた。

だが、MOB狩りをしていたのが原因で、夜森の庭に散り散りになっている。誰の姿も見えないということは、まだ誰も狩りから戻っていないということだ。

しかしそれはおかしい。少なくともレツカスだけは此処にいるはずだった。

「うふっ、その様子から察するに、此処が貴方たちの集合場所だったのねえ？ つまりあの悪魔が索敵要員つてことになるわけだわ

あ

息を呑む。肩を震わし、オレはマルベラの姿を網膜に焼き付ける。

「……それ、どういう意味だ」

冷静を装い、声が上がらないように問いかけた。

すると、マルベラは嬉しそうに口角を上げ、言葉を返す。

「死んだわ」

死を、口にする。

たった一度の死によって現実世界においても死に至る魔王軍のプレイヤーにとつて、それは取り返しのつかないことだ。

「いいええ、殺したのお、わたくしが、この手でえ」

両手の指を一本ずつ順番に動かしていき、手品師のような仕草をして見せる。

だが、それがオレとロアをあざ笑っているかのように感じ、オレは思わず拳を握り締めた。

「嘘だ」

「嘘じゃないわあ、だってわたくしの炎に身を焦がしてまる焦げになつていたものお」

レツカスが、死んだ。

まだ、本人の口から囚人になつた理由は勿論のこと、どのステータスを上げているのかさえ聞かされていない。それに加え、オレのことも何も教えていなかった。

「……っ、マルベラアッ!!」

黒剣は、この手に無い。敵の注意を引き付けるために利用したまままだ。

しかしオレは躊躇なく駆け出していた。勝算も無しに、レツカスの敵を討つために。

「ッ、はや」

マルベラの声が漏れる。だがそれは最後まで言い切ることはできない。

力を籠めて、足のばねを限界まで利用する。一步、そして二歩、それだけの足跡を残すだけでマルベラのすぐそばへと距離を縮めると、最後の一步で地を垂直に蹴り、宙に浮くマルベラの眼前へと移動する。

そして次の瞬間、オレの拳がマルベラの顔面を捉えた。

「いつぎゃああああっ」

殴られた反動により、勢いよく地に落ちていく。

また、重力に逆らえずにオレが両足をつけ、直後にマルベラの許

へと駆け出す。レッカスを殺した相手に、手加減はしない。

息を吐く間もなく、オレはもう一度拳を握り締めた。しかし、

「こつちだ、魔王ッ」

「!?!? ちいつ」

敵はマルベラだけじゃない。もう一人いたのを忘れていた。

そいつは両手を重ね、手のひらをオレに向けている。

僅かな時間差で呪文を唱え終えたのだろう。声に気づいて振り向いてみれば、そいつはオレと目が合うと同時に、^{とど}止めておいた魔力を一気に解放する。

マルベラに背を向けて、オレは左手を前に出して受け止めてみせようと意気込み、態勢を整える。が、それが命取りになった。

「くふつ、油断大敵火が亡々よお、生まれたての魔王ッ」

背後から笑い声が耳に届き、すぐに後ろを振り返る。けれども一拍遅かった。

地に寝そべった格好で、マルベラは弓を引くように両手を構えていて、そこには赤々と燃え続ける炎の矢が作り出されていた。

「ばーい、ばい」

「ぐつ、ああがああつ」

炎の矢が胸を貫通し、更に後ろから別の敵が呪文をぶつ放し、オレの背中に衝撃を与えた。

挟み撃ちに遭い、激痛が全身を襲う。痛い、痛い、痛い。

「ありがと、ルイー」

だが、それを好機と見たのか、微かにではあるが、ロアの声が聞こえた。

勿論、聞き間違いではない。オレの耳はロアの声を憶えている。

「さよなら、残念な人」

残念な人、と声が響いた。

それから二秒と経たないうちに背後から敵の悲鳴が上がり、以降は聞こえなくなる。

四散することなく、強制的にログアウトさせることに成功したの

だろう。無謀にも単身マルベラに突っ込んでいったオレを咄に使って、もう片方のプレイヤーを片づけるとは、随分なことをしてくれるものだ。

「あらあ、死んじゃって……ないみたいねえ、残念だわ」

不満そうに呟き、オレを飛び越してロアへと視線を向ける。

炎の渦を巧み扱い、着込んだ真つ赤なドレスに付いた泥を隅々まで落としていく。そして、

「……あ、鼻血が出てるわあ」

ぼつりと呟く。

「ッ、……ロア」

「早くこつちへ」

刹那、夜森の庭に亀裂が奔ったような気がした。

苦痛に悶えつつ、オレはマルベラから距離を取る。親切にも拾ってきてくれたのが、ロアの横に並び、黒剣と外套を受け取った。

黒剣を手に携え、外套を羽織る。そして、目の前の敵に視線を向けた。

マルベラは、先ほどまでとは明らかに異なる、おぞ悍ましい雰囲気を漂わせている。

「ああん……、もう、レディの顔を殴るなんていけない子ねえ……これじゃあもう手加減なんてできないじゃないのお、……だから、ね、ごめんなさあい？ 死よりも深い痛みを、恐怖を、絶望をおつ、与えてあげるからあつー！！」

表情が一転、正に化け物へと成り変わってしまった。

熱気を増した炎の渦が、燃え盛る精霊イフリートの正体を露わにする。恐らくは、全ての力を解放し、オレたちを始末するつもりなのだろう。

EGOだけでなく、現実世界においても人を殺してやる、といった殺気がこれでもかと伝わってきた。

「アレはただのプレイヤーではないわ。勇者軍のプレイヤーが選択可能な種族には精霊族なんて存在しないもの」

「それじゃあ、マルベラは……」

夜森に燃え盛り、辺りを真っ赤に染め上げる精霊を見やり、ロアは迷いなく言い放つ。

「マルベラ」エトリーナ、彼女はGMよ」
ゲーム・マスター

GM、それはEGOを仮想世界と現実世界の両側から支配し、罪のない沢山の人々を死に追いやる犯罪者たちだ。マルベラは、そのうちの一人だということか。

「……通りで強いはずだ」

「他のメンバーは……死んだのかもしれないわね。わたしたち二人を残して」

悲しげな音を響かせて、ロアが声を絞り出す。

半年以上に渡ってパーティーを組んでいたメンバーが、自分一人を残して帰らぬ人となってしまったのだ。泣いてもおかしくはないだが、ロアは息を呑み込み、顔を上げる。涙だけは決して流さないと決めていたのだ。

「……なあ、ロア？ マルベラがGMゲーム・マスターつてことは、ひよつとして……ステータスもオレと同じでカンストしてるんじゃないかねえのか？」

「ひよつとしなくてもカンストしてるはずよ。相手はGMゲーム・マスターなのだもの」

不安は的中した。

たとえオレのステータスが全てカンスト状態にあると言っても、特技や魔法は一切習得していないのに対して、同じくカンスト状態のマルベラは、GMゲーム・マスターとしての腕や実力を存分に発揮してくるだろう。正直、勝ち目はないかもしれない。

「……でも、マルベラは油断しているわ。GMゲーム・マスターとしての権限を行使しないのが証拠よ」

「権限か……、言われてみれば確かにそうだな」
ゲーム・マスター
本来、GMは多種多様な権限を持ち得ている。

それらを行使することによって、以前のレツカスのようなチート行為に手を染める人物や、MMORPG内部にて自分勝手な行動により他のプレイヤーに迷惑を掛ける者を処罰することが可能となっ

ている。しかし、マルベラはGMとしての権限を未だ行使していない。ゲーム・マスター

「可能性の話だけけど、GMは魔王に対して権限を扱えないのかもしれないわ」ゲーム・マスター

ロアの予想は、あながち外れてはいないだろう。

つい一時間ほど前に開発本部からメツセージが届き、魔王討伐クエストの開催を知らせてきたというのに、まさかGM自身ゲーム・マスターがそれを台無しにするわけにはいかない。

しかし、だとすれば何故、オレを襲うのか。

「魔王討伐クエストで堂々と挑んで来ればいいだけの話なのに、なんでこんな回りくどいことをしやがるんだよ、つたく……」

「知らないの？ GMはEGGのクエストには参加できない決まりなのよ」ゲーム・マスター

「それ、本当か？ …… ってことは、魔王討伐クエストではオレを殺すことができないのか」

「ご名答、と呟き、ロアは長めの呪文を唱え始める。

それでもまだ、納得がいかない。魔王討伐クエストに参加できないから、此処でオレを殺すつもりなのは理解できるが、動機が見当たらない。

ゲーム・マスター GMにとつて、オレの存在が脅威だからか。それならそれで魔王のIDなど初めから作らなければよかっただけだ。EGGが稼働を始めてから一年以上が経過し、今更魔王が現れたからといって慌てふためくのもおかしい話だ。

そうやって一つ一つ考えていくと、何とも情けない答えが導き出されてくる。

「まさか、報奨金を払いたくないからじゃねえだろうな……」

ドンツと、脇腹を突かれる。隣を見ると、ロアが呪文を唱えながらこちらを睨みつけていた。

笑わせるな、と言っているのかもしれない。

だが、これしか正当な理由が思い浮かばないのも事実だ。

EGOのシステム上、魔王が誕生すると自動的に魔王討伐クエストが発生し、そしてそれはGMにも止めることはできないもろ刃の剣の可能性が高い。

生まれたての魔王は、EGOでの戦い方を知らないのです、勇者軍のプレイヤーに倒される危険性があり、万が一にもそうなってしまうえば、報奨金として一億ドルを支払うことになる。

そんな大金を支払うことになれば、ゲーム・マスター事実上、開発本部は破産だ。だからこそ、事前に阻止するためにGMが直々に手を下しにやって来たのだろう。

しかし、それはもう一つの可能性を潰すことになる。

「王者の証を手に入れたプレイヤーにも報奨金が支払われるんだよね？……でも、もしそれが不可能だとしたら……」

EGOにおいて、ロアがこれまでに掲げてきた目標は、王者の証を手に入れて、勇者軍のプレイヤーにドロップ入手させることだ。けれども、今の予想が事実だとすれば、ロアの努力は無駄だったということになる。

ふと、視線を横に向けてみた。

呪文を唱え終えたのか、ロアはゆっくりと息を吸いこみ、胸を震わせながら吐き捨てる。

「今更、後戻りはできないわ。わたしも……そしてあなたもよ、ルイ」

「……ああ、分かってる」

後悔だけはしていない。自業自得だとしても、これがオレの運命であり、そのおかげでロアやレッカスと出会うことができたのだからな。

オレは今、此処にいる。全ての魔王軍のプレイヤーの命を懸けて、ゲーム・マスターGMと命を奪い合う。

「オレは生まれたての魔王、ルイピスタタスピールなんだからなっ」

その言葉を合図とし、ロアが黒鎌を横一線に振り抜いた。

かまいたちを生み出し、炎の渦の中心に浮かぶマルベラへと飛んでいく。

「無駄よお、夜森の庭を火の海に変えてあげるわあっ」

片手を夜森の空に掲げ、一瞬のうちに巨大な炎の塊を練り上げる。すると、マルベラに目掛けて放たれたはずのかまいたちが急激に軌道を逸れ、炎の塊の中に溶け込んでいく。魔法を飲み込み、更に巨大化しているように見える。

「これがあ、貴方たちの顔を恐怖に引きつらせるう、隕石に早変わりするのよお」

意識を高め、マルベラに向けて視線をぶつける。

オレとロア、そしてマルベラを囲い込むように炎の柵が出現し、夜森を焼き尽くす。

暴れすぎたのが原因か、柵の外にはちらほらと他のプレイヤーの姿を確認することができた。

「死にたくなけりや下がってろっ」

自分以外の面倒は見きれない。

ゲーム・マスター

GMを相手に余裕をかましていられるほど、自信過剰な性格はしていないからな。

「あははあ、ほうらっ、これで死になさあいつ」

巨大な炎の塊が分裂する。幾つもの火炎の飛礫が宙に浮かび上がり、オレとロアに目標を定めて飛来する。正に炎の隕石だ。

一つ、また一つと燃え盛りながらも落ちてくる。互いにぶつかり合い軌道を逸らし、更にぶつかることでまた軌道を修正し、対象となるオレたちに動きを予測させない。しかもそれが僅かな時間で行われているのだから、こちらからすれば堪らない。

「ロア、オレに掴まれっ」

水の壁は既に破られた。オレはまだ防御手段を持っていないので、ここはオレの瞳に映るものと自身の感覚を信じて、全ての隕石を避けるしかない。

不安を口にせず、ロアは背中からオレの首に手を回し、思いつき

り抱き着いた。

瞬きする余裕すら与えずに飛来する隕石の軌道を、ぶつかると前まで見続けて、もうダメだと思った瞬間に体を横にずらす。

「なっ、避け……っ」

マルベラの驚く顔が視界の端に映り込むが、次々と襲い掛かる隕石を前に敵の位置を把握などしてられない。

「ルーイツ、真っ直ぐ行ってっ」

「任せろっ」

背に、ロアの声を受ける。

二つ同時に同じ場所へと落下する隕石には、あえて前へ向けて走り出す。隕石の間をすり抜け、これまたギリギリのところであわすことに成功した。

仮にも、オレは魔王だ。カンスト状態のステータスは伊達じゃない。体の使い方、こなし方、動き方、全てを理解し、AGIの高さを極限まで利用する。

たとえロアやレツカスのように空を舞うことができずとも、稲妻のように地を駆け、暗闇に紛れ一瞬のうちに距離を詰め、相手に襲い掛かることは不可能ではない。

何故なら、オレは魔王だ。むしろそれぐらいのことはできてくれなければ、此処では到底生き残ることができないだろう。

「左よっ」

マルベラの位置を見るのは、ロアの役目だった。

オレの瞳には隕石の軌道だけを捉え、最短距離を移動しながらマルベラへと近づいていく。

この間、ほんの数秒足らずだが、まるでスローモーションでも見ているかのような気分だ。

「ちょこまかと邪魔な虫たちねえ、早く死ねばいいものをおっ」

怒気を含んだ声が燃え盛る夜森の庭に響き、隕石とはまた別の炎の塊を生み出していく。

それを見たロアは、動きを合わせるかのように黒鎌を縦に振る。

「え、……なっ」

瞬間、オレは足を使うことなくマルベラの眼前へと移動していた。「ひえっ、あ……、なんでっ」
驚いているのは、マルベラも同じだ。何が起こったのか理解していないのだろう。

だが、好機を逃すほどロアは優しくくない。

「残念な人、あなただけは絶対に許さないっ」

背中越しに発せられるのは、赤に燃える周辺を暗闇へと還す死神の魔法だ。

今までと同じように、ロアは？残念な人？と口にした。それから、瞬き一つする暇もなく、ロアは唱え終えていた呪文をマルベラへと向けて解き放つ。

「むぐうあっ、いぎいいいいっ」

マルベラは両手で顔を覆い、これ以上傷を負うのを防ごうとする。しかし、予め動作を予測していたロアは、マルベラの体を的にしていた。ほぼ、ゼロ距離から強大な魔法の直撃を受けたマルベラは、奇声を上げて地面に落ちていく。

足場を失ったオレも、それに続いて落下するかに思えたが、ロアは両手を腰に回し、オレの体を支える。自分だけでなく、オレを掴んだまま、宙に浮いているのだ。

「死神の特技、狭間抜きよ。あなたもGMの一人なら、全ての属性と種族が持つ、個々の特技や魔法をしつかりと憶えておくことね」

無様にも地上に転がるマルベラの姿を見下ろし、ロアが言い放つ。

「ロア、狭間抜きって、どんな技なんだ」

神経を研ぎ澄まし、胸の鼓動が何度も波打つ。

そんな中、ほんの少し余裕が出たオレは、宙で体を支えるロアに問いかける。

「対象となるプレイヤー一人との間に生まれた空間、つまりは狭間を、死神が持つ鎌で切り抜いたの。言うなれば瞬間移動のようなものね」

便利な特技だ。そう言えば別の敵に背中から刺された時も、いつの間にか立ち位置が変化していたな。死神だけは敵に回したくないものだ。

「それよりも、剣を構えて」
指摘されて気付く。

地に伏したマルベラは、仰向けになりこちらを睨みつけている。辺りには落下し尽くした隕石の残骸が火の手を悪化し、柵の外側で傍観していた他のプレイヤーたちに被害を与えている。

「今は運がよかっただけと思いなさい。……さあ、あいつがHPを回復する前に仕掛けるわ」

「おお、行くぞ」
頷き、オレは黒剣を両手で握り締める。

その仕草を確認する前に、ロアはマルベラ目掛けて隕石の如く急降下を始めた。

「マルベラ　ッ」
相手はただのプレイヤーではなく、ゲーム・マスターGMだ。EGOで死亡したとしても、現実世界には何の影響もない。ウイルスを送り込まれているのは、一般のプレイヤーと囚人なのだからな。

オレはマルベラの名を叫び、ロアの動きに合わせて黒剣の先を向ける。だが、
「なああんだあ、とつくの昔にバレてたのねえ……」
ぼそりと呟く。

その声は聞こえなかったが、代わりに次の言葉を耳にすることはできた。

「ゲーム・マスターGMとしての権限を行使しい、ロア＝アンノルのアバターをお……、強制ログアウトさせるわあ」

青白い閃光が、辺りを覆っていたはずの火の海を、そして夜森の庭全体へと駆け巡る。

瞬間、オレは言葉通りに？落下？していた。

「ッ、……ロ、ロアッ!？」

空中で体を反転させ、宙を見上げる。

しかし、いない。ロアの姿は何処にも見当たらない。

「あ……あああ、うわああああっ」

最後の仲間が、消えた。

重力に抗うこともできずに、オレは背を向けたまま、マルベラの許へと落ちていく。

「うふ……ふふうっ、……魔王う、貴方もすぐに彼女のそばへ逝かせてあげるわあっ」

絶望を意味する声が聞こえた。

ロアはまだ、死んではいけない。現実世界では生きているし、EGOにログインし直すことは可能だ。けれども此処にはいない。少なくとも今すぐにはログインすることはできないだろう。

当初は七名いたはずのメンバーは、オレ一人を残して全員が消えてしまった。

一人ぼっちになったことを認識し、一瞬にして恐怖が全身を駆け廻っていく。

ダメだ、勝てない。オレ一人でマルベラに敵うはずがない。

「これでえ、ジ・エンドよお」

もう一度、体の向きを変える。すぐ目の前にマルベラの笑い顔が見えた。地に伏したまま、両手には炎を丸く固めた球体を作り出している。……ああ、もうすぐ死ぬ。

そう思った。……が、

「諦めんじゃねえっ、ルイピスタ　ッ!！」

声が、耳に届く。

胸の鼓動を高く高く波打たせ、目の前の絶望に立ち向かう気持ちに再点火させる。

そいつはオレの名前を口にして、目にも止まらぬ速さで空を舞い、死に至る寸前のオレをGMから救い出す。
ゲーム・マスター

「レッカスッ」

死んだはずの悪魔の名を、オレは喉が潰れても構わないほどに大きな声で叫んだ。

ロアと同じようにオレの体を抱きかかえ 否、悪魔の正体を現したレッカスは爪先の尖った両足でオレの肩を乱暴にも掴み上げ、両翼で風を切り上空に向かって急上昇した。

「レッカス、死んだかと思っただぞっ」

「死ぬかよ、バカッ、オレには死神映しが効いてんだよっ」

聞いたことのない言葉を口にして、レッカスは勢いよく夜森の天辺へと抜け出した。

空が、明るい。夜森の頂上には、陽の光がしっかりと向けられている。

「ロアの技かっ」

技の名前から察するに、ロアの技と考えて間違いないだろう。

案の定、レッカスは笑みを浮かべて頷いた。

「あつたりめえだろっ！ 一回こっきりの技だが、対象のプレイヤー一人に死神の特性を一つだけ与えることができるんだとよっ、んでもって、俺に映された技は黄泉がえりってんだっ」

死神映し、それはロア以外のプレイヤーに、死神の特性を与えることが可能な特技か。

だが、黄泉がえりという技がオレには分からない。

「つまりどんなことができるようになるんだっ」

「その名の通り蘇ることができんだよっ」

再会できたことによる嬉しさから、互いに声を荒げ、未だ生きていることを実感する。

まだ、オレは一人じゃない。たったそれだけのことで、力が溢れ出てくるようだ。

「蘇るだつて？ 死神はそんなことまでできるのかよっ」

身に覚えはある。ロアが背中から刺された時、HPBはほんの少しでさえ削られることはなかった。レツカスのそれとは多少異なるが、恐らくは同じものか、または似た特技であることに違いはない。死神族の恐ろしさと同様、オレたちの中でも、ロアは最も必要な存在であると言えるだろう。

「黄泉がえりを映されたプレイヤーはな、EGOで死亡した時、裁定を無効にして強制ログアウトすることができるんだぜ。相手からしてみれば、目の前のアバターが消えるんだから殺してやったと勘違いするだろうな」

黄泉がえりによって、レツカスは強制ログアウトを実行に移し、再度ログインし直したのだろう。タイムラグがあるとはいえ、無事で何よりだ。

狭間抜きに、死神映し、そして黄泉がえり、更には強制的にログアウトを行なえる死神の鎌、正に無敵のアバターと言えよう。

「レツカスが生きてるってことは、他のメンバーも生きてるのかもしれない、ここでレツカスが言葉に詰まる。どうやらそれは聞いてはいけない質問だったようだ。

「残念だが……死神が死神映しを扱えるのは、一度につき一回のみだ……」

それはつまり、レツカス以外のメンバーには、死神映しによって黄泉がえりを扱うことができないということになる。

「自分で言うのもなんだけどよ、俺はパーティーの中でも要かなめの存在なんだ。如何にしてメンバーを危険から遠ざけるか、それこそエリア内全体を索敵するつもりで神経を使う必要があるからな。……だから、パーティーの中で最も死んではならないメンバーが、俺なんだよ」

死神映しの効果が切れるまで、ロアは次の死神映しを行使することができない。

では誰に黄泉がえりの効果を与えるか考えたところ、レツカスが選ばれたというわけか。

当然、死神映しを扱えるロアは死んではならない。だが、それよりも更に死んではならないのが、レッカスだったのだ。

「そう、……か」

そしてそれは、レッカスの命を救い、他のメンバーの命を救い出すことはできなかった。

悔しさに奥歯を噛み締め、同時に彼らを守ることができなかったオレ自身に腹を立てる。

「最初に見つけた七名パーティーがいたろ？ あれが俺たちを襲ってきたやつだ。それほど強^{つえ}え奴はいなかったんだけどよ、途中からあいつが加勢して、一気に形勢逆転だ。……まず、オレが死んだ。そして他のメンバーも……」

敵は七名ではなかった。七名編成のパーティーが二つも存在していたのだ。

そしてその中の一人が、GMゲーム・マスターというわけか。

「アンノルは……死んだのか」

「いや、死んでない。GMゲーム・マスターの権限を行使されて、強制ログアウトた」

「GMだと？ ……あいつが、そうなのか？」

ゆつくりと旋回し、中心にいるマルベラの姿を視認する。

既にマルベラは立ち上がっていて、こちらを見上げていた。

「あんまり何度も権限を行使するとお、他のぶれいやーに見られちゃうからあ、本当はもう使いたくないんだけどお、……でも、あと一回ぐらい大丈夫よねえ？」

にんまりと笑い、マルベラはレッカスに視線をぶつける。

このままだと、ロアと同じようにレッカスまでも強制ログアウトされてしまう。そうなれば、今度こそオレは一人になる。

「レッカスッ、なんでもいいからマルベラの口を塞げっ」

「？ ……おおっ、了解したぜっ」

何の説明もしていないのに、レッカスは状況を把握する。

訳を問わずに短めの呪文を唱え、すぐさま反撃の一手を繰り出し

た。

ゲーム・マスター

「GMのお、権限を行使してえ、レッカス〓ヨシル　うぐつ」
声が途切れる。

レッカスの放った黒い牙がマルベラの体に突き刺さったのだ。

「よし、予想通りだ」

魔法を行使する際、呪文を唱える必要がある。

ゲーム・マスター

それと同じで、GMが権限を行使するためには、自ら宣言しなくてはならないようだ。

「いったああいじゃないのおっ」

エフェクトが消滅する牙をあえて手掴みで引っこ抜き、握りつぶしてしまう。

しかしまだ終わらない。レッカスがお見舞いする空中からの長距離攻撃は、旋回をし続けていることもあって、マルベラも目で追うのがやっとのようだ。

両翼の先端に付いた棘がホーミング機能を持ち、マルベラの手のひらに貫通し、文字通り地面へと釘づけになった。

「こんのっ、ふざけた悪魔めえっ」

マルベラは怒りに我を忘れ、炎の精霊としての魔力を思う存分に開放し始めた。

「うわっ、あつっ」

地面が赤に染まり、ドロドロりと炎の柵を越えて辺りを侵食する。これはもはや火の海と言うよりはマグマだ。

逃げ遅れたプレイヤーがマグマの流れに呑み込まれ、悲鳴を上げながら四散する。今のが三回目の死だとすれば、あのプレイヤーは七日後に現実世界において死に至ることになるだろう。

「こりゃあ、降りれねえな……」

夜森の上空を旋回し、辺り一面を見下ろす。

レッカスの両足に肩を掴まれ、少しばかり食い込んだ爪の先が痛みを生み出す。魔王軍のプレイヤーは魔王に攻撃することができないので、幸いなことにダメージは受けていない。だが、もう少し丁

寧に扱ってほしいものだ。

ロアの場合は背中から抱きかかえられていたので、ほどよい胸の感触を満喫することができたわけだが、勿論そんなことは本人の前では言えるわけもない。

「どうすんだ、ルイピスタ」

「オレに聞くな、特技も魔法も使えないんだぞ。それを言うならレツカスがなんとかしてくれ」

「んなこと言われても俺はバカだからなー、あいつの倒し方が思い浮かばねえぜ、うはは」

笑っている場合か、と突っ込みたくなったが、正直オレもレツカスのことを責められる立場ではない。現状ではむしろオレの方が役立たずなわけだからな。

足場を必要としないレツカスはともかく、オレは足場が無ければ攻撃の際に勢いをつけることすら不可能だ。

「ロアがいてくれたらな……」

こんな時に頼りになるのは、やはりと言うべきか、ロアだ。

ゲーム・マスター

GMの権限によって強制ログアウトを余儀なくされてから、まだ一分も経っていない。

再びEGOへと姿を見せるまでには、もう少しだけ時間が必要となるだろう。

「おいおい、生まれたての魔王さんよ、俺だけじゃ不安だったのか？」

「不安に決まってるだろ、元チーターさんよ」

「んなつ、……てめっ、なんで知ってやがんだっ、まさかアンノルの野郎ッ」

そのまさかだが、今此処で話しておけてよかった。

最悪の事態を考えれば、どちらか片方、或いは共に死に至ることもある。

「結構あくどいことやってるんだからEGOでも抜け道っぽいこと知ってんじゃないのか？」

「んなもん、アンノルに聞きやがれ。此処での俺は生けるシバカネなんだからよ」

鼻息を荒くして、肩の上からレツカスが覗き込み、ニヤリと笑みを浮かべてみせる。

だが残念ながら言葉を間違えているので、様になどなっていない。

「それじゃあ、仕方ないな。……二人で、最後まで戦おう」

「……魔王と共に死ねるってんなら、俺も本望だぜ」

軽口で語り合い、幼い頃からの親友であつたかのように、互いにほくそ笑む。

やがて、マルベラが炎の渦を巻いてゆっくりと上昇してくる。ゲーム・G

マスターM対魔王軍の決着をつける時が訪れたようだ。

「回復されたら厄介だ、呪文を唱えさせる暇を与えるな」

「悪魔使いの荒い魔王だぜ、つたくよ……」

そう言いつつも、レツカスの口元を見やれば不満を感じていないことが理解できる。

「行くぞっ」

レツカスの声を聞き、オレは心の中で頷く。瞳の先に映るのは、

マルベラただ一人。

旋回を止め、両翼を畳み込み一気に降下を始める。目と鼻の先に炎の渦が熱気を振り撒き、その中へ躊躇なく飛び込んだ。

「死になさあいつ」

右手を上げ、マルベラは呪文を唱えずに小さな火炎弾を幾度も解き放つ。数が多すぎて目で追い切ることができないが、レツカスは意にも介さず火炎弾へと向かっていく。

「ちよっ、貴方たち……まさかっ」

「そのまさかだっ」

死を恐れなければ、此処では生き抜くことはできないだろう。

だが、死を覚悟しなければ、ゲーム・マスターG Mに立ち向かうことなど到底不可能だ。

大量の火炎弾を身に直撃させながらも、レツカスは全く怯まずに

降下し続ける。

赤銅に輝いた翼を突き破り、火が燃え移る。見物人のプレイヤーたちからすれば、火の翼を介した悪魔が炎の精霊に挑みかけるように見えたことだろう。

守る、という行為を取らずに攻撃を仕掛けたため、レッカスのHPがあまりにも早く減少していく。全身が傷つき、悲鳴を上げているはずだ。じりじりとはなく、一気にダメージを受けたことにより、レッカスもまた回復する暇がなかった。

だが、それでいい。その覚悟が無ければ倒せない。

「ッ、……ぐうっ」

炎の渦の中心を一直線に翔け抜ける悪魔と生まれたての魔王の勢いに呑まれ、マルベラは我が身を守る態勢を取った。更に僅かな時間で防御系の呪文を唱えようとしている。

しかし、遅い。もう間に合わない。

「おらあっ」

赤々と火花を散らし、夜森を台無しにする炎の精霊に向けて、悪魔が魔王を差し出した。

黒く輝く剣と共に。

「このわたくしがあ、一介のプレイヤーごときにいつ、負けるわけがな」

レッカスが銃の引き金となり、オレが弾の役割を担う。

勿論、両手に握り締めているものは、魔王の武器 黒剣だ。

「はあっ」

両腕を伸ばし、一瞬でも早く剣先を標的へと届かせる。

まずは一段、そして二段と、二つの勢いに任せて、オレが持つ黒剣がマルベラの胸を突き刺した。当然ながらそこで終わるわけにはいかない。たった一撃でGMを倒せるほど甘くはないからな。

「ぐぼっ、……ごぶっ、がっ、……いぎいいいいっ」

黒剣を握った手に、捻りを加える。

マルベラの体を貫通した黒剣が、初撃に終わらず追撃を迎えたの

だ。

マルベラの口元から、そして胸元から、大量の血が溢れ出る。魔王軍のプレイヤーではないということは、痛みを感じることはないのだろう。

だが、視覚は存在する。我が身に剣を突き立てられ、血反吐を吐いているのは事実だ。精神的に堪えているのはまず間違いない。その痛みを現実世界でも味わっている人々がいるということを知り、思い知れ。

「がはっ、がああがあっ」

オレの攻撃を受けて九の字に曲がったマルベラの体は、宙で止まることなく地に伏した。

「レツカスッ」

黒剣の先に、土の感触を得た。マルベラを突き刺し、身動きを取れなくするには絶好の機会だ。オレはレツカスの名を呼び、上空を見上げる。その時には既に、レツカスはオレのすぐ上に辿り着き、鋭く尖った牙を剥き出しにし、マルベラの顔面を噛み砕く。

「ひい、いぎいぎいぎいぎやああああああああっ!!」

夜森の庭に、炎の精霊の悲鳴が木霊する。

その声は、まだ見ぬGMにも届いていることだろう。

「うぐるるるしゅううるうううるっ」

人間とは異なる、悪魔の咆哮が耳を劈く。

まだ止めない。まだ止まらない。死に絶えるまで噛み砕く。噛み砕く。噛み砕くっ。

「いぎやあああああああああああああ
ッ」

悲鳴が絶叫へと変わり、喉を潰さんばかりに音を響かせる。

だが、やがてそれも聞こえなくなった。

後に残るのは、噛み砕かれて見るも無残なものへと変貌した炎の精霊の素顔と、四散するまでの僅かな間もひたすらに痙攣をし続ける胴体だけだ。

「二度と戻ってくんじゃねえぞ、くそ野郎が……っ」

人の姿に戻った後、レッカスは口の中からマルベラのものと思われる肉塊を吐き出し、言い捨てる。顔面だけでなく、両耳に至るまで全てを噛み砕かれていたので、レッカスの声が聞こえているとは思えない。しかしそれでも、言っただけでやりたいことは山ほどある。

此処で出会った仲間を殺し、更には現実世界でも同じことを繰り返し、他にも数え切れないほどの罪もない人々を殺してきたのだ。そんな奴には何を言っても無駄かもしれないが、冥土の土産に一言だけ呟いた。

「オレは生まれたての魔王、ルイピスタ「タスピール……。GMにゲーム・マスター負けるほど甘くはない」

他のプレイヤーが存在する中で、あえて名乗りを上げる。

オレは生まれたての魔王だ。そして今、オレが倒した人物、それはGMゲーム・マスターなのだ。

「……終わつたな、レッカス」

マルベラの姿が完全に見えなくなり、四散し終えたのを見届けると、オレはレッカスの横顔に視線を向けた。だが、

「おお、終わつたぜ……。俺の命も、ついでにな？」

「……レッカス、お前……っ」

その言葉を聞いて初めて、オレはレッカスのHPBを確認する。

マルベラが放った火炎弾を受け過ぎたのが原因か、残るHPは一割にも満たなかった。

「すぐに回復魔法をつ、レッカスッ」

他のメンバーは既にいない。此処にいるのはオレとレッカスだけだ。

しかし、レッカスは空笑いをしてみせる。

「無駄だ、ルイピスタ。こいつを止めることはオレには不可能だぜ

……」

親指を立て、後ろを指さす。

幾つもの穴が開き、ずたずたになった両翼は、今もなお燃え続け

ている。火炎弾にはダメージを蓄積する永続的な効果が備わっていたというのか。

「だ、だがっ、とりあえずHPを回復させておけば、まだ……っ」
「残念だけどよ、既にMP切れなんだよ」

じりじりとHPBが削られていき、レツカスはその場に倒れ込んでしまった。

MPが無ければ、呪文を唱えて回復魔法を行使することも不可能だ。マルベラとの戦闘に全力を注いだのが原因で、レツカスは体力的にだけでなく、精神的にも限界だったわけだ。

「ど、道具はないのかっ、そいつを食い止める道具はっ」
声を荒げ、レツカスに問う。

けれども首を横に振るだけで、既に生き残ることを諦めていた。折角、GMを倒したというのに、こんなにも呆気なく死に至るのか。そんなことが許されるのか。

レツカスは助かる術を持たず、死が訪れるのを、ただじっと待ち続けることしかできない。

「ロアがいてくれりゃあ、回復魔法を使ってくれたんだろうけどなあ……」

くっく、と喉を鳴らし、夜森の庭に背中を預けた悪魔は、マグマに身を委ねる。

「ぐっ、あぐう……」

肌が焼け、一瞬にして溶けていく。もはや触れることもできない仲間を前にして、オレはただ涙を溢れさせ、傍観することしかできない。

「現実……せか、い……でも、お前さんに……会って、みたか……った、な……」

「レツカス……レツカス……ッ、レツカスッ!!」
名前を呼んだ。何度も、何度も、オレを助けてくれた命の恩人の名を呼んだ。

そして、悪魔は消えた。炎の精霊が死に至るのを確認した後、自

分の役目を果たした悪魔のアバターは、夜森に庭に四散し、現実世界へと戻っていった。

「……う、ぐうううっ」

これが、EGOのルール。此処で死んだ者は、現実世界においても死に至る。

レツカスは、あと七日後に二度目の死を体験することになる。

「なんだよ……なんなんだよ……、こんなものが……ゲームだと言うつもりか……っ」

現実世界では一度も出会ったことがなく、更には此処でもたった一時間ほど前に出会ったばかりだというのに、悪魔の死が胸を締め付ける。

とここで、すぐそばに光り輝く門ゲイトが出現した。

「ルイーッ、無事みたいね」

門から飛び出すように姿を現したのは、ロアだ。どうやらロゲインをし直したらしい。

しかし、あと一步遅かった。ロアは辺りを見渡し、そして視線をオレへと向ける。

「あいつは？ 何処に行ったの？」

ロアは、まだ知らない。オレとレツカスが、命を懸けてマルベラを倒したことを。

そして、レツカスが死んだことも同じく。

「死んだよ……」

二つの意味を込めて、オレは返事をした。

「……ルイー、泣いてるの？」

オレの様子がおかしいことに気づいたのだろう。

すぐそばへと近寄り、ロアは後ろからオレの体を抱き締めてくれた。

淋しくも温かい、確かな温もりを感じ取ることができる。それがとても愛おしい。

「仮想世界だつてのに……知覚を感じ取れるのは反則だ……」

ぼろぼろと涙が溢れ出てきた。

堪えようとしても我慢できない。泣くのを止めることができない。そんなオレを優しく抱き締めて、ロアは耳元で囁く。

「ん……、知ってる。……でも、それがあから、わたしたちは今まで生き残ってこれたの」

知覚が無ければ、少なくとも此処では苦しまずに死に至ることができたはずだ。しかしながら勇者軍のプレイヤーのように知覚を感じ取ることができなければ、レツカスや他のメンバーたちは今まで生き残ることもできなかったらう。

常に危険と隣り合わせにいるという事実が、恐怖を生み、生き抜くために全力を尽くす。

そして、レツカスはオレを守るために、全力を尽くしてGMを倒した。ゲーム・マスター

ただそれが悲しくて、涙が溢れ出るのを抑えることができない。

「……ロア」

「ん」

「レツカスが……死んだ」

「……ん」

「オレを守って……マルベラと相打ちになつて……死んだんだ」

「……そう、……わかった」

言葉少なくとも、オレは此処で起きた出来事をロアに伝える。

ロアもまた、オレの話に耳を傾けてくれた。

それから暫くの間、零れ落ちる涙の滴が乾くまで、火の海と化した夜森の庭の中心にオレたち二人は蹲り、真つ暗な闇つすくまに同化し続けた。
ていた。

夜森の庭での一件から、既に二時間が経過していた。

赤に染まる暗闇の中から、更に黒を加えた空間に転移する。

今現在、オレがいる場所は、王の間だ。そばにいるのは、ロアとローランドの二人のみ。他のプレイヤーたちは部屋の外で待機している。

「無事で何よりだ」

玉座に腰掛けるオレに声を掛けたのはローランドだ。

ロアが持つ転移石を砕き、二人揃って魔王の城へと転移した時、そこに居合わせた多くのプレイヤーが驚きを隠せなかったことだろう。

EGOにおいて最も危険度の低いとされる夜森の庭へと向かったはずが、帰還してみれば既にぼろぼろになっていたのだから驚くのも無理もない。拳句には七名いたはずのパーティーは、オレとロアの二人を残して帰らぬ人となっていた。

そんなオレたちの姿を視界に映し、ローランドは大きな嘆息をしてみせた。

ある意味、それも当然と言えよう。魔王たるオレが死んでしまえば、ローランド自身も強制的に死に至るわけだからな。我が身が可愛いのは誰でも同じだ。……レツカス以外はな。

「このような状態にある中、こんなことを訊ねるのもなんだが……、
ゲーム・マスター
GMを倒したというのは事実なのか？」

「ああ、本当だ。マルベラ「エトリーナ」って奴だ」

ローランドの問いかけに、素直に応じる。

オレがGMに狙われたことを話してしまえば、魔王軍のプレイヤーは不安を感じるはずだ。EGOを支配するGMに目を付けられたってことになるからな。

だが、秘密にしても意味がない。これはオレだけの問題で

はなく、全ての魔王軍のプレイヤーに関わることだ。今後、GMゲーム・マスターに対する防衛策を早い段階で考えておかなければならぬだろう。無論のこと、今日の二十二時に開始される予定の魔王討伐クエストで無事に生き残ることができればの話だが。

「なるほど……、しかしまあ、GMゲーム・マスターを相手に勝ちを拾えたのは運が良かったな」

「……実力だよ、少なくともオレ以外に関しては、だが」
「いちいち嫌味を言う奴だ。」

実際のところ、オレたちがGMゲーム・マスターを倒したことが未だに信じられないのかもしれない。

だがそれも仕方のないことだ。本来、MMORPGにおいて、運営側に属するGMゲーム・マスターを倒すことなど設定上不可能になっているのが当然だった。それなのにマルベラは、死んだ。

ロアとレツカス、二人の力を借りて、GMゲーム・マスターを倒すことができた。決して起こってはならないことが、オレたちを中心に起こってしまったわけだ。

正直、素直に信じる奴の方が怪しいと言える。裏ではオレたちのことを嘘つき呼ばわりしているかもしれないからな。その点、ローランドはまだマシだ。伊達に魔王軍の中でもトップクラスのプレイヤーとして名を売るだけのことはある。

以前にも話を聞いたが、勇者軍のプレイヤーの中で二の門の門番ドゥ・ゲートを倒し、二のエリア内へと足を踏み入れた者は二桁にも満たないが、魔王軍のプレイヤーの数はそれなりに多い。

七の門の門番を倒し、七のエリア内へと辿り着いた者は、なんと九十二名にも上る。

テストにおいて既に門番の恐ろしさを学んでいた魔王軍のプレイヤーたちは、確実に生き残るために、七名編成のパーティーを組んで挑んだらしい。

EGOが稼働を始めてから一年が経ち、これまでに十五のパーティーが門番へと挑戦し、その戦闘よって十三の命が失われたことに

なる。彼らの命を軽んじてはいけませんが、これは決して多い数字ではない。

勇者軍のプレイヤーの中には、ソロでプレイして呆気なく死に至るケースが山ほどあるが、魔王軍のプレイヤーに関しては、同じようなケースは一切存在しない。現実世界と同じく、一度きりの命が生きるための術を学ばせているのが理由の一つとして考えられるだろう。

ゲイト・キパー 門番を倒し、セフト・フィールド 七のエリア内へと進んだ魔王軍のプレイヤーは、その勇気を誇ってもいいはずだ。それだけのことを成し遂げたのだからな。

その中でも、各パーティーのリーダー格は、他のプレイヤーに比べて圧倒的なまでの差を見せつけている。数時間前にオレが加わったパーティーのリーダー格は、当然のことながらロアだ。そしてロランドもまた同じように、別のパーティーのリーダーを任されている。

知略に溢れた頭脳を駆使することで、万全を期して敵を倒すことができる方法を生み出し続ける才を持っていた。また、リーダー格を務めるに値する確かな腕を持ち合わせていることから、魔王軍のプレイヤーの中でロランドの名を知らないものはいなかった。

「実力ね、……まあ、死なずにいてくれて有り難い。ただ、今のままではキミは死に至る危険性があるのも事実だ。早急に新たなパーティーを編成することをお勧めする」

「オレにはロアがいる。十分だ」
それに加え、今のオレは別のプレイヤーと共にパーティーを編成するつもりなどない。

考えたくもないことだが、もし仮に、夜森の庭でGMと出会ったように不幸な出来事が起こった場合、今のオレには仲間を守り切るだけの力がない。これ以上、すぐ目の前で仲間を失うような事態だけは、どうしても避けたかった。

「アンノルと二人だけのパーティーで生き残れるとも思っている

のか？ …… はあ、どうやらキミはまだEGOの恐ろしさを理解していないようだな」

恐ろしさなら、既に実感した。

マルベラとの戦闘によって、恐怖も、絶望も、何もかも経験してしまった。

だが、だからこそオレはロアと二人でパーティーを組む。ゲーム・マスターGMとの戦いを経験できたのは非常に大きく、ロアと共に組んで戦う方法も多少なりとも身に着けた。

それになんと言ってもオレのパーティーのメンバーはあいつらだけだ。他のプレイヤーと共に行動するなんて、夜森の庭での戦いを経験した今、誰がなんと言おうと不可能だ。

「なんとも言えよ、オレは自分の意見を曲げるつもりはない」

「……わがままな魔王だな、全く」

呆れた表情で、ローランドは王の間を後にした。

室内に残されたのは、オレとロアの二人のみだ。

「無謀なことを言ってくれたものね」

鉄扉が閉まり、ローランドの姿が見えなくなると同時に、つれない口調でロアが話しかけてくる。しかし不思議なことに、ロアの表情にはローランドと同じように呆れた様子は一切見えなかった。

「無謀なことを言っただけでもないんだけどな」

実際問題、ロアがそばにいてくれるだけで、胸の奥に疼く不安や恐怖、絶望の類を全て取り除くことができた。

ゲーム・マスターGMが相手というのに、ロアと共に立ち向かうことで勇気も湧いてきた。

ロアの存在をそばで感じ取ることによって、死を恐れつつも恐れのない心を持つことができた。

「ロア、お前がそばにいるだけで安心するんだ」

「ッ、……バカね。……魔王討伐クエストでは助けに入ることはできないのだから、しっかりと前を見て戦いなさい」

そっぽを向き、大きな溜息を吐く。

そんな仕草を見て、オレはほんの少し笑みを浮かべた。レツカスが死に、他のメンバーもいなくなってしまった。オレのそばにいるのは、ロアだけだ。些細なことだが、それがとても有り難かった。「そうだな」

もう暫くすれば、オレは魔王討伐クエストが行われるであろう空間に強制転移されるだろう。

挑戦者は、参加を申し込んだ全ての勇者軍のプレイヤーの中で、最もステータスが高いプレイヤーとなる。つまりは、現段階において、魔王の首を獲るに相応しい人物が選り抜かれているわけだ。魔王たるオレからすれば勘弁してほしいが、相手はオレが成長するのを待っていてはくれない。何せ相手が正義で、オレが悪の立場にあるのだからな。

だが、それでもオレは戦わなければならない。魔王討伐クエストには参加を強制されているので、逃げ出すことは不可能だ。

「……勝てる？」
ふと、ロアが呟いた。

オレの心を見透かしているのか、それともただ不安だけなのか。或いは両方か。

「その質問は間違ってるぞ」
眉を顰め、横目に覗き見ていたロアは、オレの言葉に二度の瞬きで反応する。

「オレは絶対に生き残らなくちゃならない。……だから、ロア。もう一度言い直してくれ」

全ての魔王軍のプレイヤーの命を預かる魔王は、何かあるとも死んではならない。配下の者たちを守り抜かなければならない。それがオレに課せられた使命だ。

レツカスたちを守ることができなかったオレに、他のプレイヤーたちは不安を隠しきれないだろう。しかし、此処で終わるつもりは毛頭ない。オレは生きる。絶対に生き残る。

だからこそ、ロアにもう一度言い直させた。

「……勝ちなさい、絶対に」

その言葉が、オレに勇気を与えてくれる。

死にかけてオレの心に、新たな温もりを感じさせてくれる。

「ああ、勿論だ」

勝てるか、ではない。絶対に勝つんだ。

質問から命令へと変化したロアの言葉に、オレは迷いなく即答した。

「さあ、そろそろ時間だな……」

ゆつくりと、玉座から腰を上げる。

黒の外套が辺りに同化し、より一層オレの存在を暗闇へと誘いざなわせていく。ゆらりとはためかせ、一步、また一步、前に歩を進め、鉄扉の前で立ち止まった。すぐ後ろには微かな息遣いが耳に届く。ロアの存在を感じるだけで、不安など微塵も残すことはなくなった。

赤と黒を交互に映し出す不思議な鉄扉を開き、王の間の外へ出た。すると、そこには数え切れないほど多くのプレイヤーの姿があった。魔王の初陣を見送りに来たのだろう。

「オレは死なない。絶対に」

しんと静まり返った城内に、魔王の声が響き渡る。それは闇に埋もれた魔王軍の陣地全体に届いているかのような錯覚を憶えさせた。城内だけでなく、城外にも、沢山のプレイヤーたちが見守ってくれているに違いない。

「ルーイ」

時間が来た。

転移石を砕いた時と同じように、全身が光に包み込まれていく。

そんなオレに、後ろから声を掛けるのはロアだ。振り向いてみれば、そこには赤に染まった真っ直ぐな瞳を向ける死神の姿があった。

「いつてらっしやい」

また、必ずこの場所に帰ってきてほしい。

その想いを籠めて、ロアが囁いた。

「行つてきます」

だからオレは、返事をする。また、必ず戻ってくるかと約束して、口元を緩めた。

やがて、オレの全身が黒から白へと変化し、魔王討伐クエストが行われるであろうエリア内へと強制転移した。

見たことのない空間が、両の瞳に映し出されている。

それは魔王軍の陣地にいた時とは異なる雰囲気を感じ、ここら
一帯に敵意を剥き出しにした者が多数存在することを無理矢理にも
認識させてくれた。

だが、それはあくまで半数でしかない。残りの半分は、死に対す
る恐怖に怯えながらも現実から目を逸らすことなく声を上げる者た
ちだ。

前者は、勇者軍のプレイヤーたちで、後者は魔王軍のプレイヤー
たちだ。

ドーム型のエリア内には、小規模ながらも森や洞窟、崖、更には
上空にまで足場が用意されている。そのうちの半分を魔王軍のプレ
イヤーが占有し、もう半分を勇者軍のプレイヤーたちが観客として
参加している。

初の魔王討伐クエストを見物するために、今現在EGOにログイ
ン中の、ほとんどのプレイヤーが此処に集結していた。

通常のエリア内に比べると見劣りしても仕方がないかもしれな
いが、こちら側から、あちら側の壁まで、魔王討伐クエスト専用エリ
アとして、しっかりと作り込まれていた。

一対一での戦闘を行うことを考えれば、此処はある意味で広大な
エリアと化すことだろう。

「ようこそ、魔王討伐闘技場へ」

辺りを見回していると、不意に声を掛けられた。

「ッ
ッ」

その声が耳に届くと同時に、オレは一瞬で距離を取り、黒剣の柄
に手を添える。

いつの間に、近寄られたのだろうか。そばには誰もいなかったは
ずなのに、気付いた時には人の気配を感じていた。

「……お前、誰だ」

頭部をすっぽりと覆う大きさのフードを被り、素顔を見せまいとする人物は、口元だけを覗かせている。服装のせいだろうか、表情を窺いにくいところはロアと似ていた。

魔王討伐闘技場、それが此処の名前か。そう言えば開発本部から届いたメッセージに記載されていたが、名前を出されるまですっかり忘れていた。

「此処にいるってことは、お前がオレの相手か」

問う。オレ以外に存在する、唯一の人物に。

エリア内に足を踏み入れることができるのは、原則として、魔王と挑戦者の二名だけだ。他のプレイヤーは観客席から勝負の行方を見物することは可能だが、参戦することはできない。

ということとはつまり、オレに話しかけた目の前の人物こそ、勇者軍を代表するプレイヤーになるわけだ。

「そう、私が貴方の相手をする事になったの」

先ほどはまだ確信を持つことができなかったが、今の声を耳にして、オレは理解する。

こいつは、女だ。

「……まさかE G Oで一番強いプレイヤーが女性だったとはな」

気配は感じ取ることができなかったが、オレの首を獲るといった気迫のようなものや殺気などは全く無い。どのように表現すればいいのか分からないが、とにかく不思議な感じがした。

「まだこれが一度目の魔王討伐クエストなんだから、他のプレイヤーたちは魔王の腕を確認したかったんだと思うわ。つまり、運が良かっただけね」

本当に強いプレイヤーは、様子見しているということか。

確かに、此処は通常のM M O R P Gのように何度でも死ぬことが可能なわけではない。勇者軍のプレイヤーと言えども、三回の死を経験すれば、アカウントを失うことになる。

未知数の力を持つ魔王を相手取り、そう簡単には腕試しなどでき

るはずもない。

しかしだ、それでも万を超え、更には十万をも超えるであろう立候補者の中から選り抜かれたプレイヤーであることに変わりはない。目の前のプレイヤーは、強敵だ。全力で戦わなければ死に至る。

「名前は、なんて言うんだ」

魔王討伐クエストにおける初めての対戦相手を前に、相手だけがオレの名前を知っているのは些か頂けない。だからオレは軽い気持ちで名前を聞いた。……が、目の前のプレイヤーはその言葉を待っていた。

「此処では初めましてになるのかしらね……」

フードの縁を両手で掴み、ふわりと捲り上げる。そして、素顔が曝し出された。

「私の名前は、イリーナ・タスピール。……勿論、私が誰だか分かるわよね、ルイ？」

「んなつ、……なんで、母さんが……っ!？」

魔王討伐クエストへの初の挑戦　イリーナ・タスピールは、オレの母さんだった。

EGOにロゲインした時よりも、強制的に魔王になってしまった時よりも、GMに襲われた時よりも、オレは今驚いていた。

何故、母さんが、此処にいるのか。オレには全く想像することができない。

「安心しなさい、ルイ。私は貴方を倒すために挑戦権を得たわけじゃない。……貴方を、助けるために……此処にいるの」

「オレを、助けるために……?」

その言い方から察するに、どうやら母さんは現実世界においてオレの様子がおかしいことに気が付いたのだろう。

パソコンの電源は点けっぱなしで、ベッドに横になり、何度も声を掛けても起きる気配がないのだから、ある意味当然だ。

しかし、だからこそ解せない。

何故、母さんが此処にいるのか。どうしてEGOが原因で目を覚

まさないことに気づいたのか。そしてもう一つ、どうやってオレを此処から救い出すというのか。

いや、それ以前に早すぎる。オレがEGOに囚われていることに気づかなければ、魔王討伐クエストへの参加申し込み時間には間に合わないはずだ。

それなのに、母さんは此処にいる。オレの異変に気付いた。

「……母さんは、EGOのプレイヤーだったのか」

目の前に佇むアバターは、オレの母さんだ。

此処に来て以来、初めて、オレは現実世界で知った顔に会うことができた。それもただの知り合いなどではなく、血の繋がった母さんだ。心がホツとするのが自分でもよく分かる。

だが、母さんは首を横に振る。否定しているようだ。

「確かに私はEGOのアカウントを持ち、アバターを作成し、今此処にいるわ。でもね、私はただのプレイヤーではないの」

オレたち二人をぐるりと囲み戦いが始まるのを今か今かと待ちわびているプレイヤーたちを眺め、母さんはEGOの秘密を口にする。

「私は、EGOの元GMゲーム・マスターであり、開発チームの初期メンバーだった

わ

「GMゲーム・マスターだつて？ ……か、母さんが？」

母さんが、EGOの元GMゲーム・マスターであることを明かす。それは正に驚愕するに相応しい真実だ。

三年前、父さんと離婚してオレと二人で暮らしていくようになるまで、母さんはコンピュータ関係の仕事に就いていた。まさかそれが、EGOの開発チームであったとは誰が想像できただろうか。

「ルイが魔王軍に強制転移されたということは、つまりは魔王のIDを持ち出したんでしょうけど、まずは昔のことから一つずつ話していくわね」

話さなければならぬことは山ほどある。それは母さんだけでなく、オレも同じだ。

けれども母さんは、それを全て見抜いている。オレが言いたかつ

たこと、そして伝えたかったことを、EGOのシステムと共に言葉にしていく。

「魔王軍の陣地に足を踏み入れた以上、ルイもEGOの裏の顔を知る機会があったと思うけど、此処、EGOは、現実世界において服役中の囚人たちを実験台にして、人間の脳を支配、そして洗脳し、人の命を弄ぶシステムを生み出すために作られたの」

ロアやレツカスから既に教えられていたが、元GMの母さんからも同じことを言われる。

改めて、オレは此処が狂った仮想世界であることを認識した。

「EGOにおける目的と異常なシステムに疑問を呈した私は、他に四名の仲間を連れて、開発チームを脱退することになったわ。……その際、何かの手かがりになればと思い、開発チームから持ち出したのが、魔王のIDCなの」

「……だから、家にあつたのか」

魔王のIDは、母さんが開発チームから持ち出したものだった。そうとは知らずに間抜けにも魔王のIDを扱いアバターを作成してしまったオレは、魔王軍のプレイヤーとして、魔王になってしまったというわけだ。我ながら自分の行動が愚かしい。

「でも、もし今の話が本当なら、今此処にいるのは危険なんじゃないか？ 名前を晒してまでオレに会いに来るなんて」

「ルイ、貴方に死んでほしくないからに決まっているでしょう」

その言葉に、オレは息を呑む。

家族だからこそ、母さんは此処に来た。GMゲーム・マスターに見つけられ、現実世界にまで影響を及ぼしかねないというのに、オレを助けるために此処に来てくれた。

「安心しなさい、ルイ。そんなに心配しなくてもいいわ。私のアバターの名前を見れば分かると思うけど、本名は使っていないから、EGO内において私が私であることを知っている人間は、ごく僅かしか存在しないわ」

魔王のIDによってアバターを作成した時、名前に迷ったオレは

本名を登録した。しかし一般的には匿名性を高めるためにHNハンドルネームを用いるのが普通であり、それに倣い母さんは本名ではなく、HNとして別の名前をつけていた。

そうやって考えてみれば、オレがパーティーのメンバーと共に倒したGMゲーム・マスターのマルベラは勿論のこと、ロアやレツカスの二人も本名ではないことになる。

オレはレツカスの名前すら知らずに死に別れてしまったのか。

「それじゃあ、本名で登録したオレはある意味珍しいんだな」

「勇者軍のプレイヤーの中では、確かに珍しいかもしれないわ。だけどね、ルイ。魔王軍のプレイヤーは普通のプレイヤーではなく、そのほとんどのプレイヤーが現実世界では囚人として服役中でしょう？ 現開発本部のメンバーたちが彼らを扱いやすく判別しやすいように、EGOでの登録名は、全ての魔王軍のプレイヤーが例外なく本名を用いているわ」

「っ、……じゃあ、レツカスは……本名だったんだな……」

それを聞いて、オレは心の底から安堵した。

レツカスを助けることはできなかったが、名前だけはしっかりと憶えている。これから先も絶対に、レツカスの名前だけは忘れないと誓おう。

「それに、私の心配はする必要はないわ。……だって、既にGMゲーム・マスターから目を付けられているのだから、今更目立つ行動を取ったとしても、危険度は大して変わらないわ」

既にGMゲーム・マスターに目を付けられているとは、一体どういうことなのか。

「……母さんは此処で、何か目立つようなことをしていたのか」

たとえば母さんが元GMゲーム・マスターだとしても、実際にはHNを利用してあるので、ぼろを出さない限りは正体がバレることはないだろう。それなのに、母さんはGMゲーム・マスターに目をつけられていると言った。それはつまり、何か目立つことをしてしまったわけだ。

問いかけると、母さんは頷いた。

「今、私が此処にいるのは、貴方を助けるためよ。……でもね、昔

から私が此処にいる理由は、別にある。それが原因で、私は元同僚に追われているの」

何の因果か、母さんは元同僚である開発チームのメンバーに追われているらしい。だが、その理由を聞いてみれば、確かに納得せざるを得ないと言えるだろう。

「私は、EGOの真のクエストクリアの方法を知っている。ゲーム・マスターとして、それを実現するために、私はEGOに存在する二名のGMを殺したわ」

「真のクエストクリアって……あつ」

その言葉を聞いて、オレは開発本部から送られてきたメッセージの内容を思い出し、すぐに左手の甲をスライドし、確認してみた。メッセージには、オレがEGOからログアウトする方法が記されている。

王者の証を手に入れるか、または真のクエストクリア条件を達成するか。

「ルイ、EGOでは勇者軍のプレイヤーは三度の死によって現実世界で死に至り、魔王軍のプレイヤーはたった一度の死で同じことが起きてしまうわ。それを防ぐためには、勇者軍のプレイヤーが王者の証を手に入れなければならない」

ロアが言っていたが、魔王軍のプレイヤーが王者の証を手に入れても、EGOを完全制覇したことにはならないので、両軍のプレイヤーがウィルスから解放されることはない。

しかも王者の証は道具の中でも数が一つしか存在しない特殊なものであり、他のプレイヤーに譲渡することは勿論、捨てることも不可能だ。魔王軍のプレイヤーが手に入れた王者の証を勇者軍のプレイヤーに渡すためには、必然的に死に至るしか方法はない。アバターが消滅すれば、所持していた道具が全てドロップされるので、勇者軍のプレイヤーが王者の証を手に行うことができるのだ。

仮にオレが王者の証を手に入れた場合、ログアウトすることは可能だとしても、脳に送り込まれたウィルスを死滅させることはでき

ない。つまりは、勇者軍のプレイヤーが王者の証を手に入れなければ、EGOの悪夢が終焉を迎えることはない。

だが、例外が一つだけ存在する。それは真のクエストクリア条件だ。

「そしてもう一つ、真のクエストクリアを達成すれば、私たちはウイルスの恐怖から逃れることができるの」

未だ始まることのない魔王討伐クエストを前にして、辺りの熱気は更に増していく。

生まれたての魔王が殺される瞬間を待ちわびているのだろう。

だが、それはない。母さんはオレを殺すために挑戦権を得たわけではないからな。

「真のクエストクリア条件、それは」
息を吸い、ゆっくりと吐く。

エリア内を震わせるほどの歓声が上がっているが、オレと母さんの耳には届いていない。目の前の現実を理解し、言葉を交わすことに夢中になっていた。そして、

「EGOを裏で支配する、五名のGMを殺すことよ」
ゲーム・マスター

母さんは、囁いた。

目の前に立つオレの耳にだけ聞こえるように、歓声にまぎれるように真実を口にする。

「五名のGMを……殺すだど？」
ゲーム・マスター

そう、と母さんは頷いた。

驚愕に固まった表情を見つめたまま、更に話を続ける。

「今現在、EGO内にはGMが二十名ほど存在しているわ。その全てが開発チームのメンバーであり、私の元同僚ね。その中でも開発チーム結成時の初期メンバーである五名は、ある意味で特別な存在なの」

ある意味で、と言った。

ここまでくれば、それが理解できないほど間抜けではない。

「……つまり、その初期メンバーの五人を倒せば、オレたちはウィルスから……」

「解放されるわ」

言葉を繋ぎ、母さんは笑みを浮かべる。

開発チームの初期メンバー、それは母さんの元同僚であり、チームメイトでもあったはずだ。

もし仮に、母さんが開発チームを脱退していなければ、真のクエストクリア条件の中に母さんを殺すことも含まれていただろう。それを考えると、母さんが今もなお開発チームの一員ではなくて本当によかった。

「まだ私が開発チームに在籍していた時、余興で作ったシステムが二つあるわ。そのうちの一つが魔王討伐クエストで、そしてもう一つが、真のクエストクリアね」

真のクエストクリア条件は勿論だが、まさか魔王討伐クエストが余興で作られたとは思ひもしなかった。その余興に巻き込まれて魔王のアバターを作成したオレは、つい数時間ほど前に死にかけた。

「開発チームの初期メンバー五名全てを倒すことができれば、勇者軍と魔王軍のプレイヤーたちが協力し合って本当の黒幕を討伐した

ことになり、真のクエストクリアとなるわ」

王者の証を手に入れることが現実的ではない今、五人のGMを殺すことが、ウィルスから解放される唯一の手段と言えよう。ただ、それもまた同じく、条件を達成するには困難な道のみであるはずだ。

「GMを殺すなんて……」

「不可能だと思う？ ……でも、私は殺したわ。私と共に脱退した四人の仲間と力を合わせて」

母さんには、仲間がいた。彼らもまた元同僚であり、EGOの元GMでもある。

「今さつき話したように、この一年間で私たちが殺したGMは二名ね。そして残るGMは、あと三名……」

EGOが稼働を始めた当初より、母さんと母さんの仲間たちは、ウィルスに感染したプレイヤーたちを救い出すために、暗躍していたということか。オレが知らないところで、まさかそんなことをしていたとは思ひもなかった。

母さんの話を聞いていくと、様々な真実を知ることができた。

テストが終わり、EGOが稼働を始めた一年前から、母さんはEGOの中で独自の調査を続けていた。EGOが命を弄ぶ危険なMORPGであることを承知の上で行動し、真のクエストクリアとなるGM討伐を果たすために今まで生き抜いてきたらしい。

開発チームの初期メンバーは十名で、そのうちの母さんを含む五名が脱退したので、必然的に残る五名が真のクエストクリア条件のGMとなるわけだ。

たとえ脳にウィルスを送り込まれることになるうが、母さんと仲間たちは一切臆することなく立ち向かっていた。しかしだ、今日の夕方に仕事を終えて帰宅すると、部屋で半睡眠状態に陥ったオレの姿を発見したらしい。魔王のIDを使い、アバターを作成したことを知ると、すぐにかかりつけの病院へと連れて行き、現在オレは現実世界において入院中のようなのだ。

魔王のIDを持つ者は、例外中の例外として扱われ、起動中のコ

ンピュータの電源を切ろうが体に触れようが目を覚ますことはない。強制ログアウトも不可能だった。

そんなオレを救い出すために、母さんは自分のアバターを用いて EGO にログインし、魔王討伐クエストに立候補した。幸いなことに、立候補者の中でも母さんは最もステータスが高く、挑戦権を得ることができた。やがて、魔王討伐クエストの開始時刻となり、魔王討伐闘技場へと姿を見せることになったのだ。

「GMは全てのステータスがカンスト状態で、しかもその属性と種族が習得可能な特技や魔法を全て扱うことができるから、普通のプレイヤーでは歯が立たないわ……。だけど、魔王のIDを持つ者は、GMを除く唯一の例外者として、ステータスの初期値が255から始まっているの。レベルが上がることはないけれど、経験値を積みば積むほど特技や魔法を習得することは勿論、ステータスを上昇させることも可能よ」

オレには、レベルが存在しない。初めは何らかのバグかエラーだと思っていたが、どうやらそれは間違いだったようだ。

「それじゃあ、オレは今よりももっと強くなることができるのか？」
「当然よ」

返事を聞き、オレは俄然やる気が出てきた。

GMにはカンストが存在するが、魔王たるオレにはカンストが存在しない。経験値を積みば積むほど、ステータスを上げることが可能なのだ。

勿論、初期のステータスが全て255のオレがステータスを上昇させるのは至難の業だが、努力すればGMを超えることも不可能ではない。

余興とはいえ、魔王のIDを生み出してしまったことを、今頃後悔しているに違いない。

「此処に来た以上、ルイも私たちに協力してもらおうことになるわ。魔王が仲間になればGMだってそう簡単には手出しできないでしょうし、何より他のプレイヤーたちと比べてステータスが群を抜いて

いるから、真のクエストクリアを達成するのもだいぶ楽になるはずよ」

魔王たるオレの存在が、ウィルスに感染したプレイヤーたちを救い出す力になる。

その事実が、物凄く嬉しかった。

王者の証を手に入れ、自ら死に至ろうと考えるロアを救うことができるのだからな。

「残るGMの名前を覚えておくわね。まずは一人目、マルベラ^{ゲーム・マスター}エトリーナ」

「マルベラ!? …… そいつなら数時間前に倒したぞ」

「それ、本当なの? エトリーナは炎属性の精霊族なんだけど……間違いない?」

間違いない。確かにあいつは、マルベラ^{ゲーム・マスター}エトリーナと名乗った。それに加え、炎属性の精霊族であり、自身がGMであることも認めていた。

「ああ、間違いない。あいつはマルベラ本人だ。オレとロアとレックカスの三人で倒した」

母さんに仲間がいるように、オレにも仲間がいる。

その仲間と共に、オレはGMを倒した。^{ゲーム・マスター}

「さすが魔王のIDを持つ者ね。…… そうだ、エトリーナを殺したのなら、経験値も貯まったんじゃないかしら? 振り分け値もそれなりに手に入れているはずよ」

そう言われて、オレは自分のステータス画面を確認してみる。

母さんに言われたように、いつの間にか振り分け値が貯まっていた。

「おお……、やっぱりGMを倒すと経験値も沢山貰えるんだな……」

此処に来て、オレが自分の手で倒したのは、マルベラただ一人。

それなのにオレの振り分け値は50ポイント以上貯まっていた。

魔王の城に戻ったら、振り分け値の振り分け方をロアに相談することしよう。

「そうなるよ、あとは二名を残すのみね」

母さんは嬉しそうに笑い、拳を力強く握り締め、小さく頷いた。

「二人目は、ギルバ「タスピール。貴方のお父さんよ」

「え、……えっ?」

さらりと、その名前を口にす。オレは、目が点になった。

「言っただけでなかったかしら、私とあの人は同じ会社で働いていたのよ

? そして私が元GMゲーム・マスターなんだから、あの人がGMゲーム・マスターでもおかしくはないでしょう」

この事態には、オレは驚きを隠すことができなかった。

母さんが元GMゲーム・マスターだという事実ですら信じられないほどの衝撃を受けたと言つのに、まさか、父さんまでもがGMゲーム・マスターだなんて、

困外の出来事が起こりすぎている。
ここで、一つの疑問が浮かび上がる。

母さんは開発チームを脱退したのに、何故に父さんは今もなお開発チームにいるのか。

しかしそれは、すぐに解決できる問題でもあった。

「……あ、……だから、母さんは……父さんと別れたのか……?」

「そういうことになるわね」

ほんの少しだけ悲しそうに、目元を緩ませた。

EGOのシステムに疑問を呈した母さんと他四名のメンバーたちは、開発チームを脱退した。

だが、父さんは開発チームに残る道を選択した。それが意味するものは一つしか存在しない。

父さんは、EGOのシステムに賛同したのだ。

離婚により親権は母さんへと渡ったが、父さんのことはしっかりと憶えている。とても優しく、家族を愛する父だった。当時は離婚の原因が分からなかったが、母さんの話を聞いてようやく理解することができた。

「そして最後の一人が、ローランド「ベイクルーア。彼が開発本部のリーダーであり、EGOのシステムを生み出した張本人よ」

「ローランドだと？ …… え、でも…… 魔王軍に……」

残る三名のGMのうち、一人はマルベラ^{ゲーム・マスター}「エトリーナ。こいつは既に倒した。二人目はギルバ^{ゲーム・マスター}「タスピール。オレの父さんだ。そして最後に呼ばれた名前を耳にして、オレは驚くことになった。

「五名のGMの中で、ベイクル^{ゲーム・マスター}「アは唯一、魔王軍のプレイヤーとしてアバターを作成しているわ。そうすることで、囚人たちを監視することができるし、彼らが団結するのを未然に防いでいるみたいね」

「…… くっ、そういうことか」

ローランド^{ゲーム・マスター}「ベイクル^{ゲーム・マスター}「ア。奴は魔王軍の陣地にいた。

GMであることを黙り、自身を囚人であると偽った。

奴はオレたちが死に物狂いで生き続けている姿を、心の底で笑いながら眺めていたのだろう。

「おかしいと思ってたんだ……。生まれたばかりの魔王であるオレの存在が初めからバレていたし、夜森の庭に行くことも知られていた……」

ローランド^{ゲーム・マスター}がGMであるということはつまり、夜森の庭でマルベラが率いる勇者軍のプレイヤーたちに遭遇し、不意を突かれ襲い掛かられたのも、偶然ではなかったわけだ。

オレたちは、ローランドに嵌められたのだ。

GM^{ゲーム・マスター}が魔王討伐クエストに参加できない以上、エリア内で殺すしか方法はないからな。

たとえGM^{ゲーム・マスター}とはいえ、魔王軍のプレイヤーであるローランドは、魔王たるオレに攻撃をすることができないので、必然的に他のGM^{ゲーム・マスター}がオレを狙わなければならない。そして名乗りを上げたのが、マルベラだったというわけだ。

「元々、EGOは彼が人の生き死にを間近で観察したいがために作り上げたものなの。そのシステムに興味を抱いた政府の人間や要人たちの援助によって、不都合なく開発を進めることができたわ。途中、私たちが抜けたとしても大して影響はなかったでしょうね。…」

「ただ、魔王が登場したことによって、彼は焦ったに違いないわ」
たとえ初期のステータスが全て255だとしても、生まれたての魔王では万が一にも魔王討伐クエストで倒されてしまう可能性がある。そうなれば、一億ドルの報奨金を支払わなければならない。それだけは絶対に避けたいと考えたのだろう。

母さんは、更に話を続ける。

「現実世界において彼の恋人でもあるエトリーナに、魔王を襲わせたのはそれが原因ね」

昔の話とはいえ、現実世界では共に友人同士でもあったので、母さんはローランドとマルベラの性格を熟知していた。二人が圧倒的なまでに異常な精神の持ち主であることを、初めから見抜いていたのだ。

魔王討伐クエストは、元々はGMの誰かが魔王のIDを扱い、プレイヤーたちの反応を楽しむための余興でしかない。実際には負けるつもりもなく、魔王討伐クエストにおいて一億ドルを支払うことも想像すらしていなかったのだ。

しかし、魔王のIDは奪われた。そして今此処に生まれたての魔王が存在する。他のプレイヤーに殺されてしまう前に、GMが殺そうとするのは当然の行いでもあった。

当初は五名存在したGMは、母さんと共に脱退した四名の仲間たちとの戦闘によって、二名のGMを倒した。

GMには死の概念が存在しないらしく、何度死に至ることがあるうとも、アバターが消滅することはない。しかしながら真のクエストクリア条件が存在する以上、倒したことには変わりないので、たった一度でも五名のGMを倒すことができれば、EGOは終焉を迎える。

母さんたちは、最初の一人は奇襲で倒すことができたが、その後はGM狩りを行うプレイヤーとして目を付けられてしまい、GMからの攻撃を受けるようになった。たとえ二階まで死ぬことが許されているとしても、カンスト状態のGMが相手なのだ。何度も死に、

そして立ち上がり続け、一度も死なずに生き残ったのは、母さんただ一人だった。

脱退した他のメンバーは、あと一度死ねば現実世界でも死に至る状態にあり、七日間以内でのログインとログアウトを繰り返している。そうすることによって、生き長らえているのだ。

「これで、言いたいことは全て伝えたわ。あとは、とにかく生き残りなさい。……ルイ、貴方は魔王軍を支配する魔王だけど、一度でも死ねばそこで終わりなの。その意味を理解しているわね？」
「……ああ、分かってる」

魔王討伐クエストが始まる前、ロアが言っていた。
絶対に勝て、と。

言葉は違えど、母さんも同じことを口にした。オレのことを大事に思ってくれているのだろう。嬉しくて、そして悲しくて、涙が溢れ出そうだ。

「さあ、そろそろ終わりにしないといけないわ」
「終わりに？」

何を、と思った。

すると、母さんは自分の胸元に手を当てる。

「此処を、狙いなさい。……できれば、苦しまないように、一瞬で殺して頂戴ね」

苦々しく笑みを浮かべ、死を求む。

「な、なんで……」

「ルールも憶えていないのかしら？ 魔王討伐クエストでは、どちらか一方が死に至るまで、永遠に終われないのよ……」

終わりの無い世界であるEGOにおいて、唯一終焉を迎える手段は、死に至ること。

オレと母さんは、どちらかが死ぬまで、此処から抜け出すことができないのか。

「ルイ、貴方が死ねば、貴方は勿論、沢山の人たちが命を失うことになるわ。……でも、私は違う。EGOではまだ一度も死んでいな

いから、今此処で貴方に殺されても、また必ず会える」

オレはまだ、此処に来てから一度も命に係わることはしていない。
ゲーム・マスター
GMはウイルスに感染していないから、魔王軍や勇者軍のプレイヤ
ーとは根本的な部分が異なっているのだ。

だが、オレは殺さなければならぬ。

今此処で、母さんを、この手に掛けなければならない。

「……くっ、ごめん……母さん……っ」

EGOにおいて、オレが初めて命を削ることになる相手、それは

「また、あとでね……ルイ」

その台詞を耳に残し、オレは黒剣を突き刺した。

手に伝わる嫌な感触を、流れ出る血を、止まらない涙を、全てを
受け入れて、

「……また、あとで」

母さんを、殺した。

魔王討伐クエストから、二日が経った。

あの日の喧騒がまるで嘘だったかのように、此処には静かな時が流れていた。

生まれたての魔王を一目見ようと押し寄せた勇者軍のプレイヤーたちは、呆気ない結末に終始不満を募らせていたことだろう。勿論、楽しませるつもりなど毛頭ないがな。

「オレ、この二日間で結構強くなったと思うんだけどな」

「安心しなさい、それはきつと気のせいだから」

後ろ側から声を掛けられる。

ロアに突っ込まれ、オレは溜息を吐いた。

「……それよりも、本当に此処に来るの」

此処、とは、地平線の先まで広がる海のエリアのことだ。

オレとロアの二人は、無限の門のうちの一つ、七の門の門番を倒し、七のエリア内の中央部に位置する小高い丘の上で、互いに背を合わせる形を取り、地べたに腰掛けていた。

呼吸をする動作が、背中越しに伝わってくる。それが少し恥ずかしい。

「もう一度読んでみるか」

左手の甲をスライドし、メールボックス画面を映し出す。

現在、オレの許に届いたメッセージは十二件。そのうちの一つを選択し、メッセージの内容を確認し、体を捻りロアに読ませる。

「母さんが、此処に来るようにメッセージを送ってきたんだ」

何故、オレたちが七のエリア内にいるのか。

それは、母さんから送られてきたメッセージが原因だ。

「会わせたい人……」

ぼそりと、ロアが呟く。メッセージに目を通したのだろう。

「父さんかな……いや、まさかな」

二日前、オレは母さんを殺した。

それから一日が経ち、僅か二名のパーティーで六のエリア内を散策していると、メッセージを受信した。相手は勿論、母さんだ。

メッセージの内容は、オレに会わせたい人物がいる、とのことだった。

「あなたのお父さんはGMゲーム・マスターなのだから違うに決まっていますよ」「いちいち指摘するなよ、どうせ有り得ないって分かった上で言ってるんだからさ」

「それならそれで言わなければいいだけのことでしよう、そんなことも分らないの」

「ああ、はいはい。オレが悪かったよ」

冗談の通じない女だ。

だが、彼女ほどそばにいて心強いと思える者は、他には存在しない。

現に今、オレはロアと二人でパーティーを組んでいる。あと五名まで増やすことができるにも関わらず、あえて二名で行動をしているのだ。実際のところ、大所帯になるよりも、少人数の方が目的を達成しやすいことも多々あるので、これはこれでいいと感じていた。「あなたのお母さんに感謝するのね。魔王軍と勇者軍がメッセージのやり取りをするだなんて、ルイーには思いつかなかったでしょうし」

「どこまでもバカにしてくれるよな、……まあ、事実だけど」

自分が情けなくて、なんだか悲しくなってきた。

顎を上げ、空を見上げる。後頭部がロアにぶつかった。

「ルイー、痛い」

「オレもだ」

もう一度、溜息を吐いた。

EGOでは、プレイヤー同士でメッセージのやり取りをすることが可能だ。

それは、たとえ魔王軍と勇者軍のプレイヤー同士でも、不可能で

はない。

「……ID番号か」

メッセージをやり取りする方法は、至ってシンプルだ。

互いのID番号を登録し合うだけで、メッセージを送受信することができるようになる。

片方のID番号のみ登録していても、メッセージを送ることも受信することも不可能なので、両者が納得しなければメッセージをやり取りすることはできない。

魔王討伐クエストの際、母さんはオレのID番号を聞いていた。

そのおかげで、オレは今こうしてロアと共に此処にいたことができる。

母さんからのメッセージによると、オレに会わせたい人がいるから、七のエリア内の小高い丘の上に来るようにと書かれてあった。

それが今現在、オレとロアがいる、この場所だ。

「しっかしまあ、^{ゲートキーパー}門番は強かったな。ありや反則だ」

「二人なのだから仕方ないわ。それに、それを言うならあなたの存在自体が反則よ」

此処に来るには、^{セット・ゲートゲート・キーパー}七の門の門番を倒さなければならない。

^{セット・ゲート}EGOにログインして三日目のオレは、^{スイス・フィールド}ロアに転移石を渡されて七の門の前まで^{ゲート・キーパー}転移し、六のエリア内のクエストやイベントをほとんどすつ飛ばして^{ゲート・キーパー}門番への挑戦権を得た。

^{セット・ゲートゲート・キーパー}七の門の門番を倒した経験を持つ^{セット・フィールド}ロアは、既に七のエリア内へと^{セット・ゲートゲート・キーパー}転移することも可能だったが、^{スイス・フィールド}七の門の門番を倒したことの無いオレを連れて行けるのは六のエリア内に限られるので、^{セット・ゲートゲート・キーパー}母さんとの約束を果たすためにオレとロアは二人で七の門の門番に挑んだ。

攻略の仕方を知るロアと共に挑み、しかもロアは魔王軍のプレイヤーの中でもローランドに並んでトップクラスでもあるので、^{ゲート・キーパー}門番を倒すのは時間の問題だった。

実際、二人で挑んだにも関わらず、一時間足らずで倒すことができた。

これはまあ、後ほど機会があれば語ることにしよう。

「……ルイー、来たわ」

背中が動く。ロアが立ち上がったのだろう。

おかげさまでオレは地べたに寝転がってしまった。

「遊んでないで、起きなさい」

「……遊んでないっての」

愚痴を言いつつ、オレはロアに言われるがまま上体を起こし、年よりくさい声を上げて立ち上がる。それを隣で見ていたロアは、悲しいものでも見るかのような視線をオレに向けていた。

「なんだよ」

「なんでもないわ。残念なだけだから」

人はそれをなんでもないとはいわない。

だが、これ以上は文句を言わないことにした。何故なら、母さんの姿が見えたからだ。

「ルイツ」

どうやら母さんもオレの姿を見つけたらしく、大きく手を振りながらオレの名を呼んだ。

そして、その横にもう一人、見慣れた人物がいた。

「死んでいなくてなによりだったわ、ルイ」

「母さんこそ……って、オレが一度殺したんだっただな」

冗談にもならない話だが、母さんは嬉しそうに笑ってくれた。

「そちらの方は？」

ここで、母さんの視線がロアへと移動する。

オレの隣に直立するロアの肩が、びくうつ、と動いた。

「メッセージ送っただろ？ オレの命の恩人であり、師匠でもあり、大切な仲間だよ」

大げさに聞こえるかもしれないが、今言ったことは全て本当だ。

ロアは、オレの命を救ってくれた。ゲーム・マスターGMとの戦闘において、ロアがそばにいなければ、オレは絶対に死んでいた。断言してもいい。

「そう、仲間ね……。一人ぼっちじゃなくて安心したわ」

真実を一切知らされずに魔王軍へと転移してしまったオレを心配してくれていたのだろう。

母さんは、ロアの姿を瞳に映し込み、柔らかな笑みを浮かべていた。

「初めまして、私はイリーナ・タスピール。ルイの母親ね」

「は、初めまして、……あの、わたしはっ、ロア・アンノルと言いまうっ」

「ぶふっ」

思いつきり舌を噛む死神に、堪らずオレは吹き出した。

「言いまうってなんだがっ、いつてえええっ!!」

「死なない程度に……死になさいっ」

強烈な肘打ちを腹に喰らい、オレは尻餅を突いた。

普段よりも感情を表に出す死神は、心なしか頬が朱に染まっっているような気がする。

「仲はいいみたいね、二人とも」

あらあら、うふふ、と傍観するのは止めて頂きたい。

あまりの激痛に思わずHPBを確認してしまった。

そんなオレを差し置いて、母さんはロアに手を差し出し、握手を求める。

ぎこちなくもロアがそれに応じ、二人は互いの手を握り合った。

「相変わらず、バカね」

と、ここでようやく口を開いたのは、母さんが連れてきた人物だ。地べたに座り、両手で腹を押さえていたオレを見下ろしながら、そいつは溜息を吐く。

「お前も相変わらず、口が悪いな」

見上げた先に、そいつの顔がドアップで映り込む。

オレの顔をマジマジと見つめ、目を細めている。

「此処に来るまでは半信半疑だったけど、バカなところを見て確信したわ。やっぱりあんたはあたしの知ってるルイピスタね」

酷い言われようだが、こいつは元から口が悪いので今更指摘した

ところで治るわけもない。

対抗心を燃やしたわけではないが、オレも溜息を吐いてみせる。

「そういうお前は幼なじみのノーラだな」

「当たり前でしょ、バカピスタ」

バツカスみたいな呼び方をしないでほしい。

これから先、ロアにそんな呼び方をされたら困るからな。

「うるさい奴だな、お前は」

ゆっくりと立ち上がり、オレはこいつと向かい合う。

「……ルーイ」

すると、オレたちの様子を見ていたのか、握手の他に世間話という名の母さんからの攻めを受け終えたロアが、オレの名前を呼んだ。

「ん、……ああ、紹介するよ。こいつはノーラ。オレの幼なじみだ」

そこまで言い、オレはノーラに自己紹介をするように促す。

オレの顔を睨みつけながらも、ノーラはロアに視線を向けた。

「あたしは、ノーラ＝ル＝ラノール。みんなからはノーラって呼ばれてるから、あなたもそう呼んでくれればいいから」

彼女の名前は、ノーラ＝ル＝ラノール。

現実世界ではオレの隣の家に住む幼なじみであり、ガキの頃からの腐れ縁だ。

黒く艶やかな長髪を花飾りの付いた可愛いゴムで二つに結び別け、前髪はヘアピンで止めることで瞼に掛からないように調節している。丸みを帯びた顔が少しばかり幼さを演出し、釣り目がちな目元からは不釣り合いなほどに真っ白な肌が印象的だ。

青と白、そして緑に染まったフレアコートを着込み、下にはハイフパンツを着用している。

仮想世界にしては随分と現実的な服装だが、それが案外似合っているのも事実だ。陽の下に照らされた太ももからふくらはぎのラインが、男の視線を釘付けにするのと言うまでもない。

「そう、……わたしは、ロア＝アンノ」

「さっき聞いたから大丈夫よ」

軽くあしらひ、ノーラはそっぽを向いてしまった。

自分の名前を言いそびれてしまった死神は、どうやら不機嫌になつてしまつたようだ。

意味もなくオレの足を踵で踏み付け、五秒ほど息を吐き続ける。

母さんの手前、言葉の暴力に出るのを耐えているのだから。それはそれでよく我慢したし、偉かつたと褒めてやりたいところだが、しかしたかると言つてオレの足を踏むな。宙に浮いてるくせにわざわざ下りてきてオレに嫌がらせをしゃがる不届き者め。

「……それで、オレに会わせたかつたつてのは、ノーラのことだったのか」

凍りかけた場の空気を元通りにするため、助けを求めるかの如く、母さんに話しかける。

その言葉を待つてましたと言わんばかりに、母さんが口を開く。

「そうなのよ。ノーラちゃんがどうしてもルイに会いたいつて言うてくれてねえ」

「ちよつ、おばさん！ あたしそんなこと一言も言つてないですつ、誤解ですから」

慌てまくるノーラをよそに、オレの隣で肩を並べる死神は、詰まらなそうに唇を尖らせている。無表情を装つてはいるものの、苛々しているのが顔や態度に出すぎているぞ。

「オレに会いたかつたのか、ノーラ？」

「ピスタチオの分際でふざけたことを言つなつ、死ねッ」

もはや人の名前ではなくなつてしまつた。

「どうか今の発言はピスタチオに失礼だから全力で謝りやがれ。」

「……つ、ほんつとにどうしようもないほどバカなんだから」
顔を逸らし、悪態を吐く。

「恥ずかしさを紛らわしているのだと思うことにしよう。そうすれば多少は救われるはずだ。」

「ノーラを連れてきて、オレと会わせてどうするつもりだったんだ？」

いつまでもノーラの方を見ていれば、またすぐに口喧嘩が始まるだろう。オレは未然に危険を回避し、母さんへと質問を投げかける。「だから今言ったでしょう、ノーラちゃんがルイに会いたがってっつて」

「……話が進まねえ」

同じことの繰り返しだ。

ちっ、と舌打ちをして、ノーラが再びオレの顔を睨みつける。そしてまた目を逸らした。こいつは一体何がしたいのだ。誰でもいいから教えてもらいたい。

ロアと同じく、苛々を隠そうともしない。いや、ロアはまだ隠すつもりはあるのかもしれないので、更に酷いか。

「……魔王討伐クエスト」

ぼそりと呟く。

聞こえるか否か、ギリギリのところだ。

「出てたでしょ」

今度は、ちゃんと声になっていた。

ロアが喉を鳴らす音が聞こえ、視界の端では母さんが楽しそうに頬を緩ませるのが見えた。

「ああ、出たぞ。……魔王だからな」

母さんに連れられて此処に来たということは、ノーラはオレの身に起こった不幸を知っているのだろう。だが、どうしてわざわざ危険を冒してまでオレに会いに来たのか。

「二日前の魔王討伐クエストについてなんだけど、あたしも観客席で見学してて……そしたらさ、その……、見知った顔が二つもあったわけで……まあ、びっくりした……わけ」

そりゃそうだ。驚かない方がおかしい。

一方は、全ての勇者軍のプレイヤーの中から選り抜かれた挑戦者でもあり、現実世界では隣の家に住んでいるおばさん、つまりオレの母さんだ。

そしてもう一方は、あろうことかその息子だ。なんの冗談か、魔

王なんてものになっていやがるのだから、オレの顔を知っている奴からすれば驚愕に値するだろう。

「どうしてあんたが魔王なんかになって……しかも、おばさんと戦ってるんだらうって不思議になった。……それで、その……、クエストが終わった後、すぐにおばさんの許を訪ねたわ」

そして、オレが半睡眠状態のまま、病院に運ばれていることを知ったわけか。

ノーラは、ノーラなりにオレのことを心配し、此処に来てくれたのだ。

「……ノーラ、お前って昔から口は悪いけど、実はいい奴だよな」
「いい奴って言うな、バカピー」

初めの方と比べて、随分と情けない名前になったものだ。

頬を膨らませるノーラは、決してオレと目を合わせようとはしない。

「会いに来てくれてありがとな、ノーラ」

そんな彼女を見つめながら、オレは少しだけ表情を緩め、感謝の気持ちを伝えた。

「……っ、元気なら、それで……いいわ。どうせあんたのことだから死んでも死に切らないと思うし、……勿論、あたしも絶対に死なないし……」

E G Oのシステムについて、母さんから全てを聞いたのだろう。

だが、それでもノーラは気丈に振る舞っている。元気な姿を見せてくれている。それが有り難い。

「ノーラちゃんにはね、現状をすぐに現実世界で公表するべきだって言われたわ。でも、そんなことをすればE G Oに囚われた全ての人々の身を危険に晒すことになるでしょう？ だからそれだけは絶対に避けたいといけないって教えられたわ」

E G Oが稼働を始めた一年前から、母さんは仲間たちと共に真のゲーム・マスタークエストクリア条件を達成するために頑張ってきた。残るGMが二人となつた以上、それも或いは時間の問題だ。

それに、もし仮に現実世界で公表した場合、真つ先に命を狙われるのは公表した者となる。

ノーラや母さんに、今以上に危険な目にだけは遭ってほしくない。だからこそその判断は正しかったと断言することができる。

「……まあ、ね。あたしはまだEGOにログインしてから半年しか経ってないし、おばさんの言うとおり別ククエスト方法があるんなら、そっちをやった方が安全だもんね」

頬を掻き、相変わらず視線を逸らすノーラは、自身が話題の種になることが恥ずかしいのか、そわそわとしている。

「そっか……、それならなおさら早くGMを見つけて出して倒さないとな……」

ゲーム・マスター GMを倒すということは、父さんを相手に命を懸けて剣を振るうことになる。

それが、オレにはできるのか。

「……安心しなさい、ルイ。此処であの人を見つけたら、私が」

「いや、オレが倒す」

悩んでいても仕方がない。

当然、悩むような時間を与えられた憶えもない。

たとえ誰がゲーム・マスターGMであろうとも、オレはゲーム・マスターGMを倒さなければならぬ。

「それにさ、別に父さんが死ぬわけじゃないんだ。……だから、オレが倒すよ」

母さんに、父さんを殺させはしない。

オレがこの手で、父さんを倒してみせる。

「そう、……分かったわ、ルイ。……ありがとう」

少しだけ悲しそうに、母さんは笑った。
話を終え、次に誰が口を開くのか、ほんの一瞬の沈黙が四人の間に流れる。

そして、それを待っていたかのように、オレたちのすぐそばに青白い輝きが生み出された。

「ッ！？」

突如、門が姿を現した。これは転移石によるものだ。
光に包まれた門をくぐり、青銅の鎧を着こんだ男が姿を見せる。

「ロークラッド!? …… な、なんであんたが此処に?」

まず、声を上げたのはノーラだ。

ロークラッドと呼ばれた男は、どうやらノーラとは知り合い同士のようだ。

「あら、貴方は確か……? 終焉の物語? のギルマスさんだったかしら」

続いて、母さんが口を開く。その台詞を聞いて、オレとロアは身構えた。

EGOにはギルドシステムが存在し、ほとんどのプレイヤーたちがギルドメンバーとして何処かしらのギルドに所属している。魔王軍にもギルドシステムは存在するのだが、残念なことに全く機能していない。ギルドを作るくらいなら、パーティーを組んでEGOを攻略した方が自由に行動することができるからだ。

「ノーラ、知り合いか」

見たことのないプレイヤーを前にして、オレとロアはいつでも戦闘を行なえるように神経を尖らせている。だが、そんなオレたちをよそに、ノーラは呑気な様子で鎧の男を紹介する。

「知り合いも何も、あたしが所属してるギルドのギルマスよ。アルベイン」ロークラッドって言うのよ」

母さんが呟いた通り、目の前に佇みオレたちの様子を窺う男

アルベイン」ロークラッドは、ギルドマスターだった。

「ねえ、ロークラッド。なんであんたが此処にいるのよ」

もう一度、問いかける。

すると、アルベインはノーラに視線を向け、返事をする。

「キミは俺のギルメンだ。身勝手な行動を取って危険な目に遭うのは極力避ける。他の奴らに迷惑が掛かるからな」

「……………うわ」

思わず、声が出た。ノーラのことを身勝手と言っているが、こいつこそ身勝手に自分勝手な性格をしているじゃないか。こんな性格でよくもまあギルマスに居座れたものだ。恐らくは、ステータスが高い故に逆らう奴がいなのだろう。二の門ドゥ・ゲートの門番を倒して、二のドゥ・フィールドエリア内に姿を見せているのが何よりの証拠だ。

「危険な目に……って、どういうことよ？ あたしが何をしようと勝手にでしょ？」

「魔王と共にいても、か？」

「ッ」

不意に、アルベインがオレを見た。

それは見たというよりも、殺気をぶつけてきたと表現した方が正しいかもしれない。

「心配して駆けつけてみれば、まさか魔王と共にいるとは驚いたぞ。……まあ、しかし手遅れにならなくて一安心だ。それに加え、むしろこの状況は有り難い。今此処で俺が魔王を殺せば、報奨金の一億ドルを手にすることも可能なのだから……」

やはりと言うべきか、こいつは自分勝手な性格の持ち主だ。

此処に来た目的が、ノーラからオレへといつの間にか変化していた。

「ギルマスには相応しくないタイプの男だな。……ノーラ、すぐに脱退した方がいいぞ」

オレの言葉に動揺し、更にはギルマスの前で脱退を勧められ、ノーラはおろおろし始めた。

ノーラにしては珍しい態度だ。オレとアルベインが一触即発にあることを察し、答えようにも答えられない状況だと理解しているのだろう。

「黙れ、クズが」

だが、ノーラが返事をする前に、アルベインは腰に差した大剣を引き抜いた。

「ッ、……ロア」

背に携えた黒剣の柄に手を添え、戦闘態勢を整える。

ロアは、いつの間にか死神の鎌を出現させていた。あれがあれば、アルベインを強制的にログアウトさせることも可能だ。

「……ふん、一対二か。ハンデには丁度いいだろう」

言い捨て、アルベインは唇を震わせる。

短めの呪文を唱え、それを大剣へと注ぎ込む。鎧と同じ青銅でできた大剣が見る見るうちに光り輝いていく。

あっという間に輝きを増した青銅の大剣は、唸りを上げるかのような音を響かせている。

「ゆくぞ」

声を掛け、それを合図にアルベインが地を駆けた。

瞬間、オレとロアは左右に散る。呪文を唱え始めるロアを横目に確認し、オレは黒剣を鞘から抜く。アルベインのそれとは対極とも思える、真つ暗な闇に染まった刀身が空気を吸う。

視界の端を見れば、母さんとノーラは様子を見ているようだ。恐らくは、母さんの方がオレたちの実力を確かめるにはまたとない機会だとも思っているのだろう。危なくなればいつでも助太刀できるように、意識を前へと向けている。

一方のノーラは、不安そうにこちらを見ていた。別にそれで構わない。それが普通の対応だ。

「くっ、……早いつ」

オレとの距離を詰めるアルベインの姿を見やり、丘の上を走り湖の方角へと向かいつつ、すぐそばへと近づいてくる敵を前に愚痴を吐く。

「敏捷を鍛えるのは当然だつ、貴様に止めを刺す前に逃げられては意味がないからなっ」

耳もいいのか、こいつは。

呟きが聞こえていたのか、アルベインは大きな声で言葉を返し、腕を思いつきり前へと伸ばすと、オレの顔面に狙いを定めて一気に突き刺す。

が、紙一重でそれを避けた。

「うおっ、と」

ぐらりとよろめき、膝が抜けそうになった。

左足を右足にクロスし、バランスを保つように体を反転し、勢いに任せて一回転する。

「ぬっ、貴様ッ」

振り向きざまに横一線、オレの持つ黒剣が空間に黒い線を描き出す。

動きを読んでいたのか、アルベインは大剣を傾け受け止めた。

他のプレイヤーはおろか、MOBの姿一つ見えない長閑な丘の上で、闇と光が削り合う。

「ぬんっ」

強引に、力技で押し切るつもりなのか、手に持った剣に全身を預け、黒剣もろともオレを切り刻もうと試みる。しかし、そんな攻撃が通るわけもない。

オレは腕を前に押し、すぐに引き抜く。反動で前のめるアルベインはもう片方の手を地に突いて、全体重を支えながらも立ち位置を入れ替えた。

黒い鎌を携え背後から迫っていたロアに対し、アルベインはオレを壁にするように手で大地を掴み、飛び越えたのだ。

「並んだな、魔王共め」

ロアと目が合い、互いに攻撃の手を止める。アルベインが響かせる低い声が、背に伝わった。

アルベインは同士討ちを狙っていたわけではなく、初めからオレとロアの姿が重なるように画策していたのだ。

「横へ、ルーイツ」

オレにはアルベインの姿が見えていない。ロアの声に頼りに、オレはすぐさま左側へ飛びのくが、既に遅かった。

「光に繋がれたまま、死ねッ」

木霊し、一拍置かずに辺りの景色が真っ白に変化した。

否、背中越しに感じる確かな痛みが、これが現実であることを強引にも認識し、腹の部分から覗かせる剣先が視界を白に染めていることを実感させる。

だが、それで終わらない。

異様なほどに伸びた剣先は、血の侵食を止めることなく、次なる標的をロアに定めていた。

口元から血を零し、息を詰まらせるオレの姿を瞳に映した瞬間、
「落ちゆけ、魔王がっ」

アルベインの声が鼓膜を震わすと同時に、ロアの体をも突き刺していた。

「ぐっ、……がはっ」

これはアルベインが持っていた大剣ではない。

実態を持たない魔法の部分が剣先から放たれ、あたかも大剣が伸縮自在であると誤認させていた。この事実を相手が知る時、既に決着はついていることだろう。

オレたち二人は、アルベインが持つ大剣ではなく、大剣に注ぎ込んだ魔法へと目を向けておくべきだったのだ。

魔法によって繋がれたオレたち二人は、互いの体を抱き寄せたまま、丘を転げ落ちていく。

振動と、魔法による継続ダメージが、二人のHPBを確実に削り取り、途中で止まれずに湖へと落ちてしまった。

「ごほっ、うぐ……くっ」

青が赤へと染められていく。

オレとロアの血が湖に流れ、ゆらりゆらりと波に揺れて漂う。

水面に顔を上げようにも、アルベインの魔法による攻撃は未だ継続中だ。ロアと共に繋がれたまま、オレは湖の底を視界に映し込み、それからロアの顔を見た。

「……っ」

刺された箇所は勿論、オレと同じように口からも血を零していた。ただでさえ苦しい状況の中、呼吸をすることもできず、ロアは瞳

を閉じて身を揺らがせる。

このままではまずい。出血による死を体験する前に、溺死の可能性も出てきた。

「むぐ……う、……うう」

触れるだけで肌を焼き、闇を浄化する勢いの魔法を、オレは両手で掴んだ。

実態を持つわけではない。しかし、これは剣としての形を保ったまま、オレとロアを苦しめている。ならば掴むことも不可能ではない。

ゆつくりと、なるべく痛みを感じないように、まずはロアの体から引き抜く。

「ッ、……あ」

堪らずに口を開け、大量の水を飲み込んでしまう。

ただ、此処に来てようやくオレたち二人は離れることができた。

勿論、その代償は軽くなどない。魔法の光が、手のひらの皮膚を破り、血を浮き出たせ、赤から黒へと、肌を焦がす。

更には、未だ背中から突き刺された魔法はオレのHPBを削り続けている。すぐに引き抜かなくてはならない。両腕の力を限界まで絞り出し、オレの体を蝕み続けたアルベインの魔法を抜き去った。

これで、まだ戦える。もう一度水面へと上がり、アルベインの前に立つのだ。

だが、視界が霞んでいく。波によってゆらゆらと変化する光景を瞳に捉えつつ、オレは既に体力の限界が訪れていることを悟った。

もう、ダメだ。たとえまだHPが残されていたとしても、現状を打破するのは不可能だ。

このまま、湖の底で、オレは死に至る時が訪れるのを待たなければならぬのか。

そう、思った。……が、

「……ん……お……っ」

霞んだ瞳に、映し込まれる不確かな存在。

弾丸にも勝る速度で水中を移動する、青く煌めく伝説の生き物が、一瞬のうちに眼前へと辿り着く。あまりにも動きが早すぎるため、波が切れるのが追いついていない。彼女が泳ぎ終えた軌道に、あとから少しずつ刺激が伝わっていき、徐々に波が割れていく。

水中に揺らぐオレの体をしっかりと抱き留めて、そいつは呼吸をすることもできない空間において、確かにオレの名前を呼んだ。

「ルイツ、死んだら殺すわよっ」

水を震わせ、耳元で大声を上げるのは、人魚の姿を成したノーラだ。

着込んでいた装備は全て解除されたのか、ノーラは全裸だった。

「ッ、ぶはっ」

血と、水を吐く。息を吸い、自分がまだ生きていることを確認する。

ノーラと共に体験した水中での脱出劇は、マルベラ戦でロアが好んで唱えていた水柱を生み出す魔法に、あたかもオレ自身がなってしまうたかのような錯覚を憶えさせてくれた。

「ぐっ、……ノ、ノーラッ、……ロアはっ」

「そこにいるわ、安心しなさい」

湖の底から水面へとオレの体を引っ張り上げた人魚は、波打ち際にオレを寝かせる。すぐ隣には、全身水浸しの死神の姿があった。

目を閉じているが、微かに胸元が上下している。

「はあっ、はあ……、よかった……っ」

ロアの無事を確かめ、オレはすぐに立ち上がる。

「少しは自分の心配をしなさいよねっ」

ノーラの愚痴が聞こえたが、これ以上仲間を失うのだけは嫌だった。ロアが生きていてくれて、心の底から安堵する。

しかしながらアルベインが放った光の魔法によって蓄積された痛みは、あっという間にオレの体を蝕んでしまったらしい。足元がふらつき、すぐに倒れ込んでしまう。

「バカッ、寝てなさいっての」

「……だが、アルベインが……っ」

追撃を仕掛けてくるかもしれない。否、しないわけがない。そう考え、オレは丘の上に目を向ける。すると、そこには大剣を振るうアルベインの姿と、もう一つ、別の姿を見つけた。

「母さん……」

不甲斐ない魔王の代役を引き受けた母さんが、アルベインの相手をしているではないか。

苦戦はしないまでも、両者共に実力が拮抗しているのか、一瞬の油断が命取りになりそうだ。

「おばさんを助けたいんなら、少しの間でいいから黙ってなさいっ」

「だ、黙ってるって……お前……っ」

声を荒げ、オレの動きを制する。

仰向けになったオレに限界まで顔を近付け、目と目を合わせた。

「何をするつもりだ、ノーラ……」

「……あんたを、助けるのよ」

人魚となったノーラの下半身は、水中に浸からせたままだ。

けれども、地に晒された上半身は、ほんの僅かに視線をずらすだけで、全てを瞳に映し出すことができる。

「見たら殺すわよ」

拳動不審な目の動きを見やり、ノーラが釘を刺す。

大人しく、オレはノーラの言うとおりにした。

「……あ、……えっ」

そのまま、十数秒が経っただろうか。

ノーラの瞳が潤んだかと思えば、目から目に、ノーラの涙が零れ落ちてきた。

「これがあたしの特技、人魚の涙よ。……初めてなんだから、感謝しなさいよね」

人魚の瞳から、涙の滴が零れ落ち、魔王の瞳へと潜り込む。

それは身体中が発していた危険信号をことごとく排除し、苦痛を和らげていく。

「人魚の涙……？」

力が漲つてくると同時に、オレは瞼を瞑らずに問いかける。

「HPBがレッドゾーンに突入したプレイヤー一人を対象に、全回復させる特技よ。時間が掛かるし身動きが取れないのが難点だけど、その効果は人魚の折り紙つき……だと思っわ。初めてだから断言はできないけど」

指が動く。胸の鼓動が耳に届く。全身の感覚が元に戻っていく。

オレは、先ほどまでの激痛が嘘だったかのように、勢いよく上体を起こした。

「いたっ」

当然、顔を近付けていたノーラに、額同士がぶつかる。

少しばかり痛そうな表情を作り、ノーラはオレの顔を睨みつけた。

「なにすんのよ、バカピスタッ」

「お前つて、人魚族だったのか」

改めて、オレはノーラの姿を瞳に映し出す。

確かに、腰の辺りから下は人間ではなくなっているが、上半身は今までと変わらずに真っ白な肌が露出している。胸元には、小ぶりながらも張りがあり、綺麗な形をした二つの、
「見んなっつたでしよーがっ！！」

「がほっ、ごっ」

顔を殴られた。

全快まで回復したはずのHPBは、ほんの少し削られた。

「あたしは、水属性の人魚族。普段は人の姿で行動してるけど、水のあるところでは本来の姿に戻った方が力を発揮することができるのよ」

言い捨てるかのように口を動かしていく。

もう一度、横目にノーラの姿を視認してみると、残念なことに人の姿へと変わっていた。

「……もう、戻ったのか」

「なんで不満そうな顔をしてんのよ、バカなの？」

「いや、……ん？ そーいや人魚ってどうやって……」
生殖活動をするのだろうか、と言いかけて、止めた。

もし仮に、その台詞を口にしていたら、オレはきつと殺されてい
たはずだ。

ノーラと、背後から殺気を放つロアの手で、間違いなく。

「ロア、目が覚めたか」

「……意識を失う直前、その人が回復魔法を掛けてくれたわ」
苦々しい表情を浮かべ、ロアはゆっくりと立ち上がる。

それに反応するかのように、左腕に黒い鎌が形成されていく。

「まだ、終わってはいないみたいね……」

視線の先には、勇者軍のプレイヤー同士で剣を交える二人の姿が
あった。

「行けるか、ロア？」

「余計なお世話よ、ルーイ」

今更ながらに気づいたが、今此処にはオレとロアの他にも仲間が
存在する。

母さんと、ノーラがオレたちの命を救ってくれたのだ。

仲間は、魔王軍のプレイヤーだけではない。たとえ敵同士だとし
ても、勇者軍の中にも仲間はいるのだ。二人はそれを証明してくれ
た。

「アレと戦ってみて理解したけど、慢心しなければ一対一でも倒せ
るはずよ」

ロアは、言う。

「慢心か……確かに、あつたかもな」

仮にも門番を倒し、更にはGMをも倒したのけたのだから、一般
のプレイヤー如きに負けるはずがないと高をくくっていた。それが、
言葉通りに命取りとなった。

油断は、しない。

EGOにおいて、油断をしても構わない相手など存在しないのだ。

「ロア、ノーラ、援護を頼む」

「ええ」

「任せなさい」

二人の顔を確認せず、オレは再び黒剣を引き抜く。

不思議と手にしっくりくる黒色の剣は、オレが魔王たる存在であることを語りかけているかのような気がした。そしてオレは、その期待に応えるため、大地を駆け、呼応する。

「 ツ、うぬう」

闇が光を支配し、真つ暗な絶望へと陥れるかの如く、黒が奔る。

水中では人魚が無敵の存在であるかのように、陽が暮れて闇が訪れつつある空間は、オレの力を存分に発揮することができた。GMゲーム・マスターを相手取り、対等に渡り合うことができたのも、今思えば、夜森の庭がオレに力を貸してくれていたのだろう。

「魔王ツ、貴様……っ」

「よそ見はいけないわ、ロークラッド」

視線を逸らしたのを見逃さず、母さんはアルベインの顔に右手を翳す。

「ぐおおおおおつ」

瞬間、手のひらから小型の竜巻が生み出され、顔面に襲い掛かる。近距離からの攻撃を受け、アルベインは堪らず後方へと間合いを取った。しかし手のひらから吹き出す竜巻は、螺旋を途切らせることなく追走し、アルベインの全身を閉じ込めてしまう。

青銅の鎧にヒビが生じ、呼吸すら困難な状況へと陥らせる竜巻は、なおも威力を衰えずに吹き出し続けている。

「ッ」

目で、合図を取る。

母さんは、すぐに現状が崩れることを理解しているのだ。

「おのれええつ、勇者軍のプレイヤーが魔王を守るなどふざけたことをしてくれるではないか」

魔力を消費し、竜巻を出し尽くす。

しかしそれでもなおダメージを与え続ける竜巻を振り払うため、またもや短めの呪文を唱えると、光の膜がアルベインの全身を覆っていく。同時に竜巻の影響力が薄れ、一気に消滅してしまった。だが、一拍あれば十分だ。

「当然だ、親子なんだからな」

「はっ!？」

オレの声に反応し、アルベインが振り向く。

と、その動きに合わせて黒剣を横一線に振り抜いた。

「あぐあ、……ま、魔王おおおっ」

光の魔法に守られているのを異ともせず、黒剣はアルベインの鎧を粉々に粉碎する。

鎧だけでなく、アルベインの肉を切ることに成功した。

黒に輝く剣身を、斑な赤へと変化させ、やがてそれは黒に呑み込まれていく。

「ロアッ」

名を、呼んだ。

オレの合図を受ける前に、ロアは唱えておいた魔法を解き放つ。

「大勢でちょこまかと……っ」

地に伏せ、オレはアルベインを前に背を晒す。

だが、それを好機と見る間もなく、アルベインの許にかまいたたちの群れが襲い掛かってきた。

「ぬうおおおっ、死神が小癩な真似をしてくれるなっ」

大剣を縦向きにして構え、かまいたちから身を守る。

「足元がお留守だぜ、ギルマスさんよお」

かまいたちに気を取られてしまったのだろう。

隙を突いて手を伸ばし、アルベインの右足に剣先を突き刺した。

「がっ、あがあっ」

ぐらりと傾く体に、かまいたちが追撃を仕掛ける。

全身を切り裂き、血の滴を飛び散らせ、アルベインの意識を朦朧とさせていく。

「こんな無様な死に方は……絶対に……許さんッ」

あと少しで地に伏すところだったが、アルベインは手に持った大剣を大地に突き立てて、更なる呪文を唱え始めた。

大剣が、大地を揺るがす。

うねりを上げて人工的に地震を引き起こす。

「魔王ッ、貴様だけでも此処で殺すっ」

とてつもない振動に体が硬直し、立ち上がることができない。

目の前に佇む傷だらけのアルベインを見上げてみれば、手の甲をスライドし、新たな武器を装備し直している。恐らくは、オレに止めを刺すつもりなのだろう。

だが、恐怖に支配されることはない。

こいつは一人きりだが、オレには仲間がいるからな。

「ノーラッ」

「うるっさいのよーっ」

オレの声に、人魚が呼応する。

ロアが作り上げる魔法とは異なる、真正銘の水柱を湖の底から作り上げ、オレとレッカスがマルベラを倒した時と同じように、弾丸の如く飛び出してきた。

「ッ、ラノールッ!？」

人魚が、空を舞う。

同じギルドのメンバーの反乱に、アルベインは両目を見開いた。

しかしそれも仕方のないことだ。何故ならば、人魚は

「いつけえええ、ロアッ」

死神を抱いていたのだからな。

「ま、まさか貴様……ッ」

「消えなさい、残念な人」

その言葉が、死神が持つ黒い鎌を揺らめかせる。

口を開けて何事かを言おうとしていたのだろうが、残念ながらあと一歩遅かった。

喉を鳴らし損ねたアルベインは、首から上を刈り取られたのだ。

「ちよっ、止めてっ」

「大丈夫、わたしは宙を舞えるわ」

勢いに任せて陸へと飛び出したまではよかったが、その後を考えずにいなかったノーラをよそに、ロアが呟く。

そのまま、ゆっくりと二人は上昇し、こちらへと戻ってくる。

「やったな、ロアツ」

首から上を無くした胴体が、バランスを崩して両膝をつき、前のめりに倒れた。

それを少し離れたところから見ているのは、首から下を無くしたアルベインだ。

「……………ぐうう、くそっ、あと少しで魔王を殺すことができたというのに……………っ、何故だ、何故こんなことになるんだ……………っ」

オレを殺し損ねたことに、悔しさを滲ませていた。

報奨金という名の餌に憑りつかれたギルマスは、ギルド？終焉の物語？の名前に相応しい終わり方を迎えることになった。

「安心しろ、アルベイン。お前はまだ死なない。強制的にログアウトするだけだ」

大剣を引っこ抜くと、大地を揺るがしていた地震が嘘のように治まっていく。

「ふんっ、魔王がふざけたことを抜かすな」

血の混じった唾を吐き、アルベインの頭部が徐々に消滅していく。

「今回は負けを認めるが……………貴様はあと四日もすれば、魔王討伐クエストによって死に至るのだ。これは決して覆すことのできない運命だ。精々、EGOでの余生を楽しむことだな」

捨て台詞を吐き、アルベインの頭部は消滅した。ロアが持つ黒い鎌によって、強制的にログアウトされたのだろう。

丘の上を走り、母さんがオレの許へやってくる。ロアとノーラもまた、空から降りてきた。

「お疲れ様、よくやったわ」

母さんから労いの言葉を受け、オレは小さく頷く。

だが、アルベインが言い残したことが耳を離れない。

「……………今週末、二度目のクエストがあるんだよな」

魔王討伐クエストは、一度では終わらない。

魔王たるオレが死に至るまで、終わりを迎えることはないのだ。

「弱気になつてんじゃないわよ、アルベインに勝つたんだから怖い者なんてないでしょ」

アルベインは、勇者軍のプレイヤーの中でも二の門をくぐり抜けた強者の一人だ。そいつを倒したことは自信へと繋がるが、それは仲間が力を貸してくれたからだ。

「魔王討伐クエストでは、オレは一人だ」

「っ、……まあ、そうだけどさ」

言葉に詰まり、ノーラは顔を俯ける。

今週末に行われる予定の魔王討伐クエストに、アルベインが立候補した場合、オレは奴を倒すことができるのだろうか。

「ルーイ」

すると、ロアがオレの名を呼んだ。

「一度目の時、あなたがわたしに言ったことを思い出さない」

「オレが、ロアに言ったこと……」

EGOにログインした時から、ずっとオレのそばにいる。

だからこそ、オレが呟いた言葉をしっかりと憶えていてくれたのだろう。

「……オレは絶対に生き残らなくちゃならない。……だからこそオレは、何があるうとも絶対に弱音を吐いちゃいけないんだっただな？」
それでいい、と頷く。

たとえ魔王であろうとも、死を恐れなければ此処では生き残ることは難しい。

だが、死を恐れているのは、前に進むこともできないだろう。これはオレがレツカスと共にマルベラに挑んだ時に思い浮かべたものだ。魔王は、一人ではない。魔王軍の全てのプレイヤーの命を背負っているのだ。

「オレは絶対に死なない。約束する」

ロア、母さん、そしてノーラの三人に、オレは約束を交わした。

「……絶対に、戻ってきなさいよ」

ぼそりと、ノーラが呟く。

戻ってこいとは、現実世界のことを示しているのだろう。勿論、オレはそのつもりだ。残る二人のGMを倒して、真のクエストクリア条件を達成してみせる。

「それじゃあ、私たちは行くわね」

転移石を取り出し、母さんとノーラは別れを告げる。

次に会えるのは、いつになるか分からない。そう何度も無駄に転移石を使用するわけにもいかないのだ。連絡を取るだけであれば、メッセージを送り合えば済むので、暫くは互いに顔を合わせることもないだろう。

「ばいばい、母さん。……またな、ノーラ」

オレは、二人に別れの言葉を投げかけ、片手を上げる。

二人の上空に門が出現し、一瞬にして頭から足まで通り抜けていく。

そして、二人は消えた。

「……さて、オレたちも戻るか」

別れに悲しみを見せることなく、オレはロアに声を掛ける。

一部始終を静観していたロアは、オレと目を合わせ、唇を動かした。

「ルーイ、あなたに言っておきたいことがあるの」

「オレに？」

真っ直ぐに、オレの顔を見つめる。その様子から察するに、大切な話をするつもりのようなのだ。

「……いいぞ、話してみろ」

辺りを見渡し、オレたち以外には誰もいないことを確認する。

ロアは視線を外し、湖の方角を見つめながら話し始めた。

「わたしたち囚人が、勇者軍のプレイヤーを狩る理由を憶えているかしら」

「ああ、確か……刑期が短くなるんだったよな」

その通り、とロアは肯定する。

これは囚人のみ与えられた現実世界における条件だが、魔王軍

の全てのプレイヤーは、勇者軍のプレイヤーを一人狩ることに、現実世界での刑期が一日分短縮されることになる。

魔王軍のプレイヤーが経験値を積むには、勇者軍のプレイヤーと同じようにMOBを狩らなければならない。魔王軍と勇者軍のプレイヤー同士が、互いに狩り合えば、通常手に入る経験値の他に、ポーンポイントが付くので、経験値を積むのが捗りやすい。だが、ロアは勿論、オレとパーティーを組んだレッカたちは、これまでの一年間、一度もプレイヤーを狩ることなく、経験値を積んできた。たとえ囚人として服役中の身だとしても、人殺しにだけはなりたくないからだ。

しかし、今までに一度もプレイヤーを殺したことがなかったレッカスが、マルベラと相打ちになり、死亡した。それもこれも全ては、生まれたての魔王たるオレを守り、更には命を握られた他の囚人たちを救うためだ。

「勇者軍のプレイヤーを狩ることによって、服役中のわたしたちの中で刑期を満了した囚人が僅かながらに存在するわ……。彼らは、その後どうなったと思う？」

「……刑務所から、出たんじゃないのか？」
「……、当たり前のことだ。」

刑期を終えれば、囚人は外に出ることができのだからな。だが、ロアは首を横に振る。

「違うわ。刑期を満了した彼らは、あるうことが、今度はわたしたちを支配する側に回ったの」

「支配する側って……まさか」
「そのまさか、……彼らはGMの僕として、わたしたちの監視をしているわ」
ゲーム・マスオモベ

よく考えれば、それはある意味当然のことかもしれない。

EGOの裏の顔を知る囚人たちが、刑期を終えたからといって解放されるわけではない。

脳には既にウィルスを送り込まれていて、ログインしなければ七

日後に死に至る状況を笠に着て、GMの犬として働くしか道は残されていないのだ。

それを知りながらも、魔王軍のプレイヤーたちは狩りを止めない囚人として生きるよりは、支配する側に回った方が安全だからだ。「プレイヤーを狩らないわたしたちは、刑期を短縮することは不可能なの。でも、それでもヨシルカたちは、その手を血に汚すことはなかったわ」

葛藤もあつたはずだ。EGOで人を殺すだけで、刑期が短くなつていくのだからな。

けれども、ロアの仲間たちは頑なに拒んだ。それが原因で、レツカスたちは死んだ。

「仲間が死んでから、今日で三日が経つたわ。……つまり、現実世界における彼らの命は、あと四日しか残されていないの」

「あと、四日……」

二回目の魔王討伐クエストが開催されるのも、あと四日だ。

「EGOで死亡した囚人たちは、七日後に訪れる死を迎え入れるために、別の場所へと隔離されるわ。その時、ヨシルカが大きな声を出して、あなたにメッセージを残したの」

「レツカスが、オレに……？」

EGOにログインする囚人たちは、それぞれ個別の独房に収監されている。たとえばEGOにおいてパーティーを組んでいたとしても、ロアは現実世界では彼らに会ったこともないのだ。

しかし、それでもロアは気付いた。

レツカスが残した、最後のメッセージに。

「ヨシルカは、あなたのことを恨んでなどいない。生まれたての魔王を守る事ができて、心の底から満足してたわ……」

「ッ、……くっ」

顔が、悔しさに歪んだ。

悔やんでも悔やみきれない。一度でも死に至った囚人は、二度とEGOにログインすることを許されないのだ。

「オレが、もつと強ければ……っ」

だが、そんなオレに視線を向け、ロアが言葉を紡ぐ。

「……でも、彼らを助ける方法が、一つだけあるわ」

「なにっ、本当か、ロアッ!？」

それは願ってもないことだ。死んだはずの仲間を助け出すことが可能だと言われて、オレは心臓が飛び跳ねたような気がした。

「正確に言うなら、死を少しだけ先延ばしすることが可能なの」

死の先延ばし、それは一体どういうことなのか。

ロアは、誰にも聞かれないように、小声で話を続ける。

「わたしが囚人になつた理由は、なに？」

「開発チームに加わることを拒んだからだろ」

「そう、そして彼らがわたしを開発チームに加えたかったのは、ハッカーとしての腕を欲していたからよ。……その意味が、分かるかしら」

まさか、ロアはEGOのシステムにハッキングするつもりなのか。無茶だ、そんなことをすれば……お前が危険な目に遭うかもしれないっ

「仲間を見殺しにするぐらいなら、あえてわたしは危険な道を選択するわ」

決して揺らぐことのない想いを胸に、ロアは作戦を口にする。

それが命に係わりうるとしても、止めることはできないのだろう。

「EGOにおいて、一度でも死亡した囚人は、別の場所へと隔離されるの。……でも、それはつまり、わたしたち囚人が勇者軍のプレイヤーと同じ条件であることを証明しているわ」

「どうということだ？」

意味が分からずに、オレは話の先を求める。

「本来、EGOでは三度の死によってウイルスが活動を開始し、現実世界においてプレイヤーを死に至らしめるわ。でも、囚人たちが一度の死によって現実世界でも死に至るのを知っている者は、わたしたちの中には誰一人として存在しないの」

胸の鼓動が、徐々に高まっていく。

「囚人だけが特別なわけではなくて、囚人が置かれている状況が特別なだけなの。一度でも死に至れば、新たなアバターを作成することもできずに、別の場所へと隔離される。そして、七日後に死に至るのを待ち続けなければならぬ。……でも、本当は勇者軍のプレイヤーたちと同じで、わたしたちには、あと二回の猶予が残されているわ」

あと、二回の猶予。

それは死を齎すE G Oにおいて、唯一、情けを掛けられたシステムだ。

同時に、魔王軍のプレイヤーにも与えられるはずのものだった。

それが、現実にあるとロアは言った。

「わたしたち囚人は、全員が同じ場所でログイン、ログアウトを行なっているわ。……だから、GMに見つからないように、彼らの振りをしてログインすることぐらいなら」

不可能ではない。

その言葉に、オレは拳を握り締める。

もし、ロアがE G Oのシステムにハッキングを試みて、レッカスたちに成りすましてログインすることに成功した場合、終焉のカウントダウンによる死を先延ばしにすることができる。

勿論、そんなことをしてしまえば、彼らが死に至らないことによって、システム上の不具合をGMに気づかれてしまうだろう。それに加え、現実世界において、ロアが何らかの制裁を受ける可能性もある。

だが、ロアの心は変わらない。ほんの僅かでも彼らが助かる可能性があるとこのなら、行動に移すのが当然だと考えている。

「……頼む、ロア」

そして、オレも懇願する。

ほんの一时间足らずで死に別れてしまった仲間、もう一度会いたい。そしてまた軽口を叩き合いたかった。

「あいつらを、助けてやってくれ」
「当然よ」

オレの願いを聞き入れ、ロアはしつかりと頷いた。
けれども、それとは別に、更に口を開く。

「……但し、条件が一つだけ……あるの」
「条件？」

問うと、ロアは首を縦に振り、オレと目を合わせて唇を震わせる。
「彼らを助け出し、GMを倒したら、その時は……」

次はあなたが、わたしたちを現実世界で助けて ……

魔王軍のプレイヤーは、囚人として服役中の身だ。

だが、その中には無実の罪によって囚われた者も少なからず存在する。

ロアは、そのうちの一人だった。そして、パーティーのメンバーも同じく。

「……ロア、約束するよ」

EGOに囚われて以降、決して望んではならなかったことを、ロアは勇気を振り絞り伝えた。

その想いに、絶対に応えてみせる。

「残るGMを倒したら、ロアに必ず会いに行く。そして……」

此処では当たり前のように行動を共にしてきたように、現実世界でもロアと仲間たちを救い出してみせる。そこまでして初めて、オレたちはEGOの呪縛から解放されるのだ。

「もう一度、一緒にいよう」

いつの間にか、辺りには暗闇が覆いつつあった。

そんな中、此処に存在するプレイヤーは二人しかいない。

生まれたての魔王と、泣かない死神。

誰も見ていない空間で、誰の目も気にすることもなく、オレたち二人はどちらからともなく歩み寄り、知覚を感じ取ることが可能な

仮想世界において、互いの唇を重ね合わせていた。

「 ただいま 」

ロアがログアウトをしてから数時間が経過し、王の間に門^{ゲート}が出現する。再び、ロアがログインし直したのだ。

「 おかえり、ロア 」

玉座から腰を上げ、待ちわびていた相手に声を掛ける。

ロアは、大きく息を吸い、ゆっくりと吐いていく。

「 ……それで、どうだった？ 」

精神的な疲労が蓄積されたのは理解しているが、オレはどうしても早く知りたかった。

それ故、ロアを急かす。

「 半分成功、半分失敗ね 」

そんなオレを、不機嫌な顔で睨みつけてくる。

「 ヨシルカたちのアバターをE G O内にログインさせることには成功したわ。 ……でも、その際、ギルバという名のGM^{ゲーム・マスター}に痕跡を辿られてしまったの 」

「 ギルバだと？ 」

その名を耳にして、オレは思わず息を呑む。ギルバとは、オレの父さんの名だ。

ロアは、オレの父さんがGM^{ゲーム・マスター}であることを知っている。しかし、名前までは教えていなかったたので、気付くことができなかったのだらう。

「 知ってるの 」

「 オレの父さんだよ 」

返事を聞いたロアは、何かを納得したような表情を作り出している。

「 現実世界で、わたしがヨシルカたちのアバターのログインとログアウトを繰り返していると、ギルバが ……あなたのお父さんが来た 」

わ。ほんの僅かな時間で、痕跡を辿ってきたの。……それで、何故こんなことをしているのかと訊ねられたわ」

それから、更に話を続けていく。

父さんに気づかれたロアは、魔王の願いを叶えるためにやった、とだけ告げると、不思議なことにそれ以上の追及はされなかったらしい。それだけでなく、ロアの手によって改ざんされた仲間たちのログイン履歴に関しても、修正し直すこともなかったようだ。

父さんは、何故、ロアを見逃すようなことをしたのだろうか。

「……まあ、考えても無駄か。なにせよ仲間たちの寿命が延びたことを喜ばう」

「ええ、そうね」

ありがとう、とロアに伝えると、ロアは背中を向けて小さく頷いた。

「仲間たちの問題が解決したわけだから、あとはGMを倒すだけだな」

残る二名のGMのうち、ローランドは魔王軍の中にいる。

父さんのアバターが勇者軍と魔王軍のどちらに属しているのかは不明だが、まずはローランドを叩くことだけを考えた方がよさそうだ。

しかし、仲間たちと共に夜森の庭に行く前に言葉を交わして以来、ローランドの姿を見ていない。もしかすると、ログインすらしていないのではないだろうか。

仮にそれが正解だとすると、危険を冒してまで仲間たちの寿命を延ばしたロアの苦勞が水の泡になってしまう。

「魔王軍の中にローランドと連絡が取れる奴はいないのか」

「いないわ」

オレの問いに、ロアが即答する。

予め、この質問をされることを予測していたのだろう。

「魔王軍において、彼はパーティーを組んでいたわ。でも、彼を含めたメンバーの誰一人として、あの日以降にログインしているとこ

ろを見た者はいないの」

「……つまり、そいつらもローランドの仲間だったってことか」

「その可能性が高いわ。……恐らくは、刑期を満了した囚人たちね」
仲間同士でパーティーを組み、オレたちの様子を窺っていたのだ
らう。

よく考えてみれば、夜森の庭で遭遇したマルベラにも、計十三名の仲間がいた。実際のところ、奴らは一般のプレイヤーではなく、刑期を終えた囚人だったのかもしれない。

「今はとにかく、奴らが現れそうなところを見はっておくしか方法がないな」

魔王軍の全てのプレイヤーの協力を得て、ローランドを捜し出すことも不可能ではない。

だが、それをしてしまえば、魔王軍のプレイヤーの中にローランドと裏で繋がる内通者がいた場合、作戦がバレてしまうだろう。それに何故、ローランドを捜さなければならないのか、誰にも知らせずに実行に移すのは困難を極める。

結局、オレとロアは二人で行動をするしかなかった。

「七のエリア（セット・フィールド）に行きましよう。魔王軍の陣地内に姿を見せ辛いとすれば、あの場所を活動拠点にしているかもしれないわ。それに、魔王討伐クエストに備えて経験を積むことも可能よ」

「七のエリアか、そうだな……」

魔王軍の全てのプレイヤーの中で、今現在七の門をくぐった者は、オレを含めて九十三が存在している。当然のことながら、その中にはローランドも含まれている。

七の門をくぐったプレイヤーは、主戦場を七のエリア内へと移すのが当たり前だ。存在するプレイヤーの数も魔王軍の陣地内や六のエリア内に比べてごく僅かとなるので、見つけ出しのも容易になるはずだ。

ログインしていなければ無意味だが、しかしそれでも前線で経験

値を積むことができる。

「魔王討伐クエストまで、あと四日……、オレたちの主戦場を七のエリア内に移そう」
（フィールド・セッティング）

決意し、オレはロアに同意を求める。

初めからそのつもりでいたロアは、手の甲をスライドさせて二つの転移石を取り出し、片方をオレに手渡す。

転移石を砕き、オレたちの上空に輪っか上の門が出現する。
（ゲート・セッティング・フィールド）

そして、王の間の二人を、七のエリアへと転移させた。

魔王討伐クエストでは、挑戦者となる勇者軍のプレイヤーを知る方法はない。実際に、魔王討伐闘技場へと転移し、そこで初めて対戦相手を知ることができるのだ。

魔王討伐クエストが行われる魔王討伐闘技場は、十二のエリア内のいずれにも当て嵌まることはなく、例外的な門が魔王軍と勇者軍のそれぞれの陣地内に出現し、十三番目のエリアとして足を踏み入れることができる。そこは唯一、EGOにおいて無限の門によって結ばれていない中央部であり、魔王討伐クエストが開催される時に限定し、全てのプレイヤーが自由に見学を許されている。

そしてまた、オレは十三番目のエリアへと転移する。
二度目のタイムリミットが訪れたのだ。

「見るから、ずっと」

オレのAvatarが門によって姿を消そうとする間際、ロアの声が耳元に届けられる。

ロアは、客席からの応援を約束してくれた。

「どこら辺に座る予定だ？ 余裕があったら見つけてやるよ」
「バカ」

一度目とは異なり、表面上では余裕ぶってみせる。

勿論、それは嘘だ。今回もまた、オレの許に死が這い寄ってきた

のだ。余裕でいられるわけがない。それでもオレは強がってみせる。そうすることで、オレはまだ此処で生き続けることができるような気がしていた。

「……それじゃあ、また後で」

あれから四日が経ち、二度目の魔王討伐クエストが開催されることになった。

セット・フィールド七のエリア内で経験値を積みながら、ローランドが姿を現すのを待ち続けていたが、最後まで見つけ出すことはできなかったのだ。

既に、レツカスたちが死亡してから七日が経過している。現実世界においてGMに気づかれるのも時間の問題であり、タイムリミットは残されていないのだ。

それでも、オレは戦わなくてはならない。

ゲーム・マスターGMを相手にするのではなく、勇者軍の中から選ばれたプレイヤーの挑戦を受けなければならぬのだ。

今は一分一秒でも時間が惜しい。レツカスたちを救い出すためにも、少しでも早く終わらせてみせる。魔王討伐クエストなどに手間取ってなどいられない。

「また、後で」

ゲイト門をくぐるオレの姿を見送り、ロアが返事をする。

互いに、また後で再会することを確かめ合い、オレは王の間から消滅した。

「予想通りの相手だ」

門をくぐり終え、転移した場所、それは魔王討伐闘技場の中だ。既に観客席は満員御礼となっていて、オレと勇者軍の挑戦者が剣を交える時が訪れるのを、今か今かと待ち続けている。

オレは、一定の距離を置いて仁王立つ戦士の姿を視認し、声を掛けた。

「それは光栄だな、魔王。……だが、残念なことに俺の予想も外れたことはないのではな」

「お前の予想？ なんだよ、言ってみろ」

挑発しているのか、それとも大真面目なのか、随分とアレな性格な奴なので見当もつかない。

勿論、知りたいとも思わないが。

「魔王、貴様は此処で死に至る。俺の手によってな」

もはや予想ではなく予言へと変化していた。

「……まあ、今日だけはお前の予想も外れちまうだろうけどな」

これ以上、言葉を交わす意味もない。

早く終わらせて、ロアの許に戻ろう。

背に携えた黒剣の柄に手を添えて、ゆっくりと引き抜いていく。

それを見た後、今回の挑戦者 アルベインもまた、腰に差した大剣を鞘から抜く。

「魔王、一瞬で終わらせてみせよう」

「残念だがそれは無理だ。……何故なら、お前の相手は魔王なのだからな」

口元に、薄らと笑みを浮かべ、アルベインが喉を鳴らす。

何処からともなく吹き荒れる風に外套をはためかせ、黒に塗られた剣の柄を、くるりと一回転さる。剣身の表裏に光を差し込ませ、黒を鈍く輝かせた。

不思議と、辺りが静寂に包まれていく。

一回目とは異なり、二回目となる今回は、魔王と挑戦者の戦いを観戦することが叶うのだと感じているのだろう。そしてそれは間違っていない。

オレは今から此処でアルベインを倒す。それは決定事項だ。

「さあ、開戦だ」

魔王の言葉を皮切りに、アルベインが疾走する。

既に呪文を唱え終えていたのか、前回戦った時と同じように、大剣は光に包まれていた。

「死ねっ」

声を上げ、互いの距離が縮まってくると同時に大剣を横に振り抜いた。

瞬間、光の粒が周囲に飛び散る。

「ッ、なんだこりゃ」

一粒が、目の前で弾け飛んだ。

目晦ましではない。どうやら闇属性の相手に負荷を持たせる魔法のようだ。瞳に映し込み、粒が弾ける様を認識すると、オレの全身が重くなる。

「遅いぞ、魔王ッ」

地を蹴り、あっという間にオレの背後へと回り込むアルベインは、重力に従い大剣を逆手に両手で握り締め、頭部から串刺しにしようと試みる。だが、そんな見え見えの攻撃が通用するほど甘くはない。仮にもオレはロアと二人で七の門セツト・ゲートの門番ゲート・キーパーを倒したのだからな。

「闇に染まれ」

「な、……なにっ」

動きを制限された状況で、オレは余裕を見せたまま合図となる台詞を口にした。

魔法、ではない。これはオレに与えられた特技だ。

「うぐっ、目が……見えんッ」

標的を見失い、アルベインが大剣を地に突き刺した。

奴の瞳には闇が支配し、一定時間だが見る者すべてを黒とする。いつまでも生まれたての魔王のままであるはずがない。この七日間で、オレはロアと共に可能な限り経験値を積んできた。魔法は勿論のこと、特技でさえも習得済みだ。

「浄化の黒へ」

間を置かずに、次なる台詞を口にする。

すると、オレの体を蝕んでいた重さが、黒い霧の出現と共に消えていく。

「……貴様、まさかそこまで成長していたとはな……」

大剣を突き刺したまま、オレから距離を取るアルベインの瞳は、徐々に闇が薄まっていた。

あの様子では、既にオレの位置を把握することも可能だろう。

「オレは魔王だ。お前なんかには負けるつもりは毛頭ないんでな」
返事になっていないが、アルベインを苛立たせるには十分のようだ。

オレの顔を睨みつけ、ぎりぎり歯を噛み締めている。

ロアと共に経験値を積んでいた時、オレは幾つかの魔法と特技を習得することができた。

その中でも特に驚いたのが、魔法だ。

本来、魔法を扱うには、呪文を唱える必要がある。魔法の質が高ければ高いほど、唱えなければならぬ呪文の長さは比例するので、実戦ではパーティーを組み、後衛のプレイヤーが魔法を扱うことが自然と多くなる。

だが、オレの魔法は根本的なところが異なっていた。

「ロアを苛めた恨み、此处で晴らすっ」

左手に黒剣を握り、一気に距離を詰める。

アルベインは反応が遅れ、一拍後ようやく呪文を唱え始めた。

「死に踊れ」

「うぬう、か、体がっ」

三度、魔王の台詞を口にしてみせた。

今度は、アルベインの体がダンスを踊るかのようにくるりと回転する。

「一体何が……っ、くそおおっ」

呪文を一切唱えず、オレは？魔王の台詞？を口にするだけで、予め登録しておいた魔王の魔法を一瞬にして発動することが可能だ。

魔王には、通常のプレイヤーには存在しない画面が存在し、そこにはこれまでに習得してきた魔法を好きなだけ登録することができた。それらは、魔王の台詞として称される。

ほんの僅かな、短い台詞を口にするだけで、オレは魔法を扱うことができるのだ。

一度目に唱えたのは、魔王と目を合わせた全てのプレイヤーの瞳を闇に染める魔法。

二度目に唱えたのは、魔王に降りかかった呪縛を全て解呪する魔法だ。

そして三度目に唱えたのは、対象となるプレイヤー一人の意思に関係なく、目を合わせたプレイヤーの全身の自由を奪うことが可能な束縛魔法だった。

いずれも強力な魔法だが、魔王の台詞を口にするには、それなりの代償を支払わなければならない。それは、オレのHPだ。

これまでに幾つかの魔法と特技を習得してきたものの、未だにHPを回復する系統のものは習得していない。もしかすると、オレには覚えることができないのかもしれない。そしてだからこそ、魔王の台詞の代償として、HPが削られていくのだろう。

魔王の台詞を一口にするたびに、オレのHPBは一割が減少する。現在のHPに比例するので、十回で死に至るようなことはないが、回復魔法を扱うことができないオレにとって、これは命に係わる事態でもある。

なるべくなら、扱わずに戦い切りたい。だが、相手が強ければ話は別だ。

アルベインを相手に、余裕など見せられるはずがなかった。

「自分の身に何が起こっているのか、お前には分からないだろ？」

……でも、それが当たり前なんだ。何故ならオレは、プレイヤーを相手に魔法を扱うのはこれが初めてなのだからな」

既に、オレのHPBは三割近く削られている。

魔王の台詞を何度も口にするには難しそうだ。

「ぐううううっ、貴様あつ!!」

憤怒の表情を見せるアルベインだが、全身の自由を奪われてしまい、醜態を晒している。

命のない人形が下手な踊りを披露するかのように、手足をかくかくと動かしていく。

「口は閉じてな、間抜けなギルマスさんよ」

「うごごっ、が……っ、ごぶっ」

黒剣を、突き刺した。

更には、マルベラの動きを封じた時と同じように、剣身に捻りを加えてみせる。

鎧に穴を開け、肉を掻き出し、隙間から大量の血が溢れ出てきた。黒から赤に染まりゆく剣を何度も抜き差しし、攻撃の手を緩めない。この状況だけを見れば、赤子の手を捻られているかのように錯覚するだろう。しかし、アルベインの瞳はまだ光を失っていない。

「がぼっ、……がっ、うがあああああっ!!」

突如、口元から血反吐を垂れ流し、狼の如くけたたましい雄たけびを上げた。

観客席に座るプレイヤーたちが、思わず耳を塞ぐほどの大音量で、すぐそばにいるオレは、鼓膜が破れてしまうのではないかと思ったぐらいだ。

が、それだけでは終わらない。

「おっ、おおお……っ」

大地が、震える。

気付くのが遅れてしまったが、既にあの時、アルベインは畏を張っていた。

「くそっ、地震かつ」

オレたちの後ろには、地面に突き刺された大剣があった。それが大地に揺れを齎し、地震となつてオレに襲い掛かる。しかながら、それはアルベインにも同じことが言える。攻撃の対象はオレ一人ではない。

だがしかし、アルベインは冷静だった。大剣を捨て、自らを道連れにし、黒剣を胸に突き刺された状況で新たな武器を装備し直す。その武器は、

「ッ、うおっ」

瞬間、死を感じ取った。

思考する前に体が動き、黒剣を手にアルベインの許から飛び退く。「く、くくっ、……危険を回避するだけの運を持ち合わせていたようだな」

胸元に手を当て、短めの呪文を唱える。あっという間に傷口が塞がれてしまい、血の流れを強引に止めてしまった。HPBを確認してみれば、一割ほど回復されてしまったらしい。だが、そんなことよりも今はアレに注目すべきだ。

「それ、……なんだ」

顎で指し、オレはアルベインが持つ新たな長剣に目を向ける。

その武器は、見る者全てを魅了するかのような存在感と、同時に他者への死を連想させる恐怖感をも兼ね備えていた。

「……ああ、これか？ ……知りたいのなら、教えてやる」

ゆらりと立ち上がり、大きく息を吸う。

「魔王、お前を殺すための武器に決まっているだろうがっ」

そして、オレに向けて走り出した。

「死ねいっ」

叫び、光り輝く長剣で空を突く。

しかし遠い。オレに届くには距離がありすぎる。……だが、

「なっ、がはっ」

文字通り、光が奔る。

長剣を一振りするだけで、軌道に乗って閃光が生まれ、音速を超えた光の速度で標的を捉える。攻撃されたことを認識した時には、既に手後れた。長剣での長距離攻撃を可能としたアルベインの武器は、とてつもないほどの特殊効果を持っていたのだ。

「ふはは、どうした魔王ツ、もうギブアップするのじゃあ？」
そうしている間にもオレとの距離を詰め、次なる攻撃は近距離での動作を生み出す。

けれども、アルベインは長剣を振るわない。両手で柄を握り締め、力を籠めるかのような素振りを見せたかと思えば、オレの視界に映り込む長剣が実体を無くし、光の魔法を放ち出した。

「ぐっ、あくあつ」

身に纏った外套により、全ての光は吸収されるが、それでも防ぎきれないほどの大規模な攻撃方法に身を怯ませ、守り切れなかったところが光に汚染されていく。

黒が白に、闇が光に、変化する。

オレの力の源が、光の魔法によって掻き消えてしまう。

「痛いかな？ ああ、痛いだろうなあ？ だがそれは当然だ。貴様ら閻属性の魔族を相手にするには最も相応しい武器なんだからなあ？」
再び、距離を保つ。

柄だけになった長剣は、その時には既に新たな実体を形成し終わっていた。それを合図に、アルベインは長剣を縦に振り切る。

直後、空間が割れ、空気の流れが二つに別れた。

「っ、……あ、くっ、息が……っ」

息が、できない長剣を縦に一振りしただけで、空気の流れを絶ち、オレの周辺には酸素が得られなくなっていた。

「呼吸ができなければ、魔王の台詞も呟けまい。これで貴様は終わりだ」

近距離では闇を消し去り、中距離では空気を操り、長距離では光の速度での攻撃を行う。

どのような敵を相手にしても存分に力を発揮することが可能な光

り輝く長剣、それがアルベインの持つ、真の武器だった。

「闇が消え去るのを感じないか、魔王？ 貴様は息をすることもできず、更には闇を剥がされ光の下に力を失うのだ」

確かに、アルベインの言うとおりだ。近距離で受けた攻撃によって、オレの全身を包み込んでいたはずの闇が、光の魔法の付加により効力が弱まっている。じわりじわりと、オレの体を内部から破壊していく様は、正にEGOにおけるウイルスシステムと同義だ。

光の魔法に囚われてしまい、身動きできなくなったただけであれば、まだ対処の仕様が合った。

しかしながら、オレのそばには酸素が不足していた。呼吸ができなければ、魔王の台詞を口にして、解呪することも不可能だ。

やがて、意識が朦朧となる。これはまずい、このままでは意識を失ってしまうだろう。

必死にもがく様子を、アルベインは追撃をせずに傍観している。する必要がないからだ。

追撃をしてみれば、二つに別れた空気の流れが合流するところへと逃げ去ることが可能かもしれない。そうなれば、一気に形勢は逆転される。それを考えた上で、獲物が動かなくなるまで我慢しているのだろう。

同時に、オレはその狙いを破り去る方法が思いつかないでいた。

「……………つ、ロ……………ア……………」

視界が霞み、目の前が黒へと染まりつつある中、ふと、オレは観客席に目を向けた。死ぬ間際に、オレのことを心配してくれていたロアの顔を、一目だけでも見ておきたかったからだ。

そして運が良いことに、すぐにロアの姿を見つけた。約束通り、応援に来てくれたのだろう。

だが、おかしなことに、ロアの視線の先に映っているのは、オレではない。あろうことが、アルベインの方を見ているではないか。

否、そうではない。ロアが見ているのは、アルベインのすぐ後ろだ。

そう、そこには、

「ゲーム・マスターGMの権限を自身に行使し、魔王討伐闘技場への途中参加を許可する」

ギルバタスピール　オレの父さんが立っていた。

「ッ、なにいつ!?」

驚愕に目を見開いたのは、アルベインだ。

まさか一対一の魔王討伐クエストにおいて、魔王と挑戦者以外に決闘エリア内へと姿を見せる者がいるとは思ってもみなかったのだろう。しかもそれは、ただのプレイヤーではない。

EGOを支配するGMの一人だ。

「更にGMの権限を行使し、アルベイン＝ロークラッドの持つ武器を押収する」

言葉が、次々と紡がれていく。GMの権限が行使されていく決闘エリア内に姿を見せたGMは、あるうことか、プレイヤーの武器を取り上げてしまった。

「くっ、貴様……ッ、なにをするつもりだっ」

圧倒的なまでの強さを誇っていた光り輝く長剣は、GMの宣言と同時に、エフェクトが消滅してしまう。アルベインの手には、先ほどまで握っていたはずの柄の感触が残される。

怒りに我を忘れたのか、アルベインは予備の武器を装備し、剣先をGMへと向けた。

殺気をぶつけられているにも関わらず、GMは視線をオレの方へと移すと、緩やかな動作で片手を振ってみせる。すると、途切れていたはずの空気の流れが元に戻り、オレは呼吸をすることができるようになった。

「一対一の真剣勝負をGMが汚すとは、どういうことか説明してくれるんだらうなっ」

「それは私の台詞だが？ アルベイン＝ロークラッド。……いや、

GMの一人よ」

「なっ、……アルベインが、GMだと!?」

耳を疑った。

まさか、いや、そんなはずはない。アルベインがGMであるはずがない。

魔王討伐クエストには、GMは参加できない決まりがあるのを忘れてなどいない。

現に今、GMである父さんは、GMの権限を行使することで、ようやく魔王討伐クエストへの参加を許可されたのだ。アルベインに至っては、そんな素振りなど一切なかった。

「俺が……GMだ？ ……貴様、なにを根拠に」

「証拠なら、ここにあるだろう」
そう言つて、父さんはアルベインの手から奪い取った長剣を取り出した。

光り輝く剣身は、オレが持つ黒剣と対極の存在であるかのような。「この剣は聖剣カリブルヌス……五のエリア内で入手することが可能な武器の一つだ。しかし、未だ誰一人として三の門を通過したことがないのに、何故お前はこの剣を持っている？」

アルベインが持つ長剣は、どうやら現段階において入手することは不可能なものだったらしい。それを持っているということは、EGOのシステムを自在に改ざんすることが可能な人物となる。そしてそれは勿論、GM以外には存在しない。天才的なハッカーたる口アですら、EGOの中枢に潜り込むことは敵わなかったのだからな。「二の門の門番がドロップしたものを手に入れたんだっ」

証拠が残されているというのに、アルベインはなおも抵抗する。新たな武器を握り、少しずつ、父さんの許へ近づいていく。だが、「無駄だ」

アルベインの行動を予測していたのか、父さんは宙を舞う。

背中には空気によって作られた透明な翼が薄らと見えている。

「GMの権限を行使し、アルベイン＝ロークラウドを麻痺状態とする」

空を飛ぶことができないアルベインは、父さんに手を出すこともできずに上を見上げた。

一瞬のうちに、全身に痺れが回り、手が震えて武器を落としてしまった。

更には、立っていることも困難となり、やがてその場に倒れ込んでしまった。

「うぬう、あと少しで……あと少しで魔王を倒せたというのに……」

「……危なかつたな、ルーイ」

「なんで……父さんが……？」

ゆるりと舞い降りてきた父さんは、透明な翼を消し去り、オレの許へ歩み寄る。

GMであり、オレたちの敵であるはずの父さんが、オレの命を救ったのだ。

もはや疑いようもない事実だが、父さんが言うようにアルベインがGMだとすれば、何故に仲間の動きを捉えるようなことをしたのだろうか。

「ん？ そんなの決まってるだろう、お前の親だからだ」

呆気なく、いとも簡単に、自分勝手な答えを口にする。

父さんは、仲間よりもオレを選んだのだ。

「……そ、そんなこと……っ」

「理由になってないか？ ……まあ、それも仕方ないか。現実世界での私は、イリーナとお前を捨てた人間になるわけだからな。……でもな、それには色々大人の事情つてものがあるんだよ。だから許してくれ、ルーイ」

強引に、今までのことを許してほしいと願う。オレや母さんからしてみれば、それがどんなに理不尽な言葉であるのか、目を合わせずとも理解し合うことができるだろう。

「説明……してくれるんだろうな？」

オレを救った命の恩人を睨み付け、話をするようにと促す。

すると、父さんは笑みを浮かべ、当然のように頷いた。

「ああ、一つずつ……全てを話していこう」

だが、その前に、と呟き、父さんは辺りを見渡す。

観客席には、魔王軍と勇者軍を合わせた、大勢のプレイヤーの姿があった。

「彼らに何の説明もなく終わらせてしまつては、不満が爆発するだろう。……だから、私は更にもう一度GMの権限を行使し、全てのプレイヤーが強制的に、私とルイーの会話を耳にすることを宣言する」

ゲーム・マスター GMの権限を行使し、父さんはオレたちの会話を隠すことなく全て公開することにした。

「さて、まずは……アルベイン＝ロークラッド」

名を呼んだ。麻痺した状態で蹲り、アルベインは父さんを睨み付けている。

「お前がGMのサブキャラクターであることは明白だ。現実世界では誰がお前のアバターを扱っているのかは知らないが、お前はGMの権限を乱用した。それにより、今此処で、私がGMの権限を行使し、アルベイン＝ロークラッドを排除する」

排除する、と言った。それはつまり、アルベインは死に至るということだ。

強制的なログアウトなど比べものにならないほどの対応に、私たちの動向を見守るプレイヤーたちは息を呑んでいた。

「……く、くくつ、……残念だが、俺はここまでか。……だが、やはり貴様はイリーナ＝タスピールと繋がっていたんだな。これで安心してお前を開発チームから外すことができるよ」

捨て台詞を吐き、アルベインは不吉な笑みを浮かべた。そしてそれを最後に、アルベインのアバターは点滅し、EGOから消滅してしまふ。

決闘エリア内に残されたのは、魔王とGMの二人のみ。しかし、まだ話は終わらない。

全てのプレイヤーが、オレたちの会話を聞くことができるのだ。

「真のクエストクリアについては、知っているか？」

「ああ、母さんに聞いた。五人のGMを倒せばいいんだろ」

「その通りだ。……ただ、全てのGMを倒すのは非常に難しい。残る二名のGMである私とローランドは、滅多にログインをしないのだから遭遇することも困難だろう」

だが、それも今日で終わりだ、と呟く。

「私は、EGOが稼働を始めてからの一年間、この機会が訪れるのを今か今かと待ち続けていた。私たちの話を大勢のプレイヤーたちが耳にして、EGOの真実を知る機会を得ることを」

決して急がずに、全てのプレイヤーが理解できるように、一つずつ説明をしていく。

真実を知るプレイヤーが少なければ、彼らはGMを倒すことで真のクエストクリア条件を達成し、ウィルスから解放される道を選択しなくてはならない。しかしそれはとても難しく、残るGMの数が少なくなればなるほど、倒すことは困難になっていく。

父さんと、ローランド。この二人を倒すことが、どれほど難しいことか。オレとロアはローランドの足取りを掴むことすら不可能だったので、すぐに納得することができた。

王者の証を手に入れるか、それとも五人のGMを倒すか。どちらも茨の道だ。

けれども、父さんは別の方法を考えた。今現在EGOにログイン中のほとんどのプレイヤーに真実を知ってもらうことができれば、たとえGMと言えども現実世界において彼らを止めることは不可能だ。実行に移す者が一人しかない場合、その人物を除外すれば済むが、その数が万を超え、十万、そして百万を超えてしまえば、GMには手が負えなくなる。

初めから、父さんはこうなることを予測していたのだ。

魔王のIDを持つ者が現れれば、報奨金を支払わずに済むように、どんな手を使つても魔王の暗殺を試みるはずだ。そして、それが

失敗に終わった時、今度は魔王討伐クエストに立候補してくることを理解していた

ゲーム・マスター
GMは、魔王討伐クエストには参加することができない。しかしそれはGMの権限を行使可能なメインキャラクターに限られている。権限の行使が不可能となる、サブキャラクターに関しては、その限りではないのだ。それを利用して、アルベインは魔王討伐クエストへの挑戦権を得た。そして、罨に掛かった。

ゲーム・マスター
GMの誰かがサブキャラクターのアルベインでEGOにログインし、魔王への挑戦権を得たまではよかったが、仲間と想っていたはずの父さんに裏切られるとは、思ってもみなかっただろう。

実は、父さんはEGOのシステムには賛同しておらず、むしろ反対派だった。

しかしながら家族揃ってチームを脱退するようなことになれば、現実世界においてどのような制裁を受けるか分からない。最悪の場合、口封じのために命を狙われるかもしれない。

現に、開発チームに加えようと考えていたロアが加入を拒否すると、無実の罪により囚人としての生活を強いられることになってしまった。父さんは、母さんとオレを守るために、あえてEGOのシステムに賛同し、悪者を演じていたのだ。魔王のIDを持ち出せるように仕組んでいたのも、全ては計算のうちだった。

オレたち二人の話は、今此処にいる全てのプレイヤーが耳にしたこれによって、EGOの裏の顔が暴かれることとなった。

ゲーム・マスター
慌てふためくのはGMだけではない。勇者軍のプレイヤーも同じだ。寝耳に水の事態だが、まさかウィルスを送り込まれているなんて誰が予想しただろうか。

ざわりざわりと、決闘エリア内を中心として、観客席のプレイヤーたちがざわめき始めた。

一度でも騒がしくなってしまうえば、この数を前に静寂を取り戻すのは難しいだろう。けれども、それで終わりではない。勇者軍のプレイヤーの中には、ウィルスの存在に恐怖する者や信じようとしな

い者の他に、奇妙なことを言い合う者たちがいた。そしてそれは、オレと父さんの耳にも届けられる。

「……ログアウトが、できないみたいだな」

観客席を見回して、父さんが呟いた。当然、それもまた全てのプレイヤーに伝わっていく。

「ログアウトができないって……まさか、オレと同じように此処に閉じ込められたのか？」

「そのようだ。……アルベインのAvatarを持つ者が現実世界においてシステムを書き換えてしまったのだろうな。……つまり、EGGの秘密を知った私たち全員が、此処に閉じ込められたというわけだ」

此処に存在する、全てのプレイヤーが、正に言葉通りの人質となつてしまった。

これは、父さんのミスか。考えてみればすぐに予測できそうなものだが、父さんは何故、アルベインを捕えたままにしなかったのか。が、此処で思考が停止する。アルベインと入れ替わるように、決闘エリア内へと一人のプレイヤーがログインしてきたからだ。

「ッ、ローランドッ！！」

^{ゲイト}門の出現を認識した時、オレを向かい合っていた父さんは、その存在を視認することができなかった。そして、その僅かな遅れが命取りとなる。

「GMとしての権限を行使し、^{ゲーム・マスター}GMギルバタスピールのAvatarの排除を命ずる」

低く、唸りを上げるかのような声が、決闘エリア内に響き渡った。先ほどまで、あれほど騒ぎ立てていたはずのプレイヤーたちは、いつの間にか言葉を失っていた。それもそのはず、今此処で、彼らの目の前で、^{ゲーム・マスター}GMがGMを排除したのだから当然だ。何が起こったのか、理解できた者は一桁にも満たないはずだ。

ゆっくりと、時間を掛けてAvatarが消滅しつつある父さんの許に、ローランドが歩み寄る。

「最も愚かしい行為を存知しているか、ギルバ？ それは仲間を裏切るということだ」

人狼としての正体を見せ、口元から白濁の唾液を垂れ流したまま、低めの声で話しかけてきた。父さんかというと、全身が点滅を繰り返し、もう間もなくEGOから存在を無くす。

「貴様は、俺様を裏切った。……それは、現実世界での死に値するぞ」

「その通りよお、おバカな親子たちい」

と、ここで、更なる来訪者が姿を見せる。

オレがロアとレツカスの二人と力を合わせて倒したGMのうちの一人、マルベラだ。

「お久しぶりねえ、生まれたての魔王う、……でも、今日こそは本当に、これでさようならになるんだけれどもねえ」

くすくすと悪戯な笑みを作り上げ、ふわりと上空に舞い上がる。

炎の渦に巻かれた精霊は、プレイヤーたちの注目的になっているようだ。また、マルベラの他にも知らない顔のプレイヤーが二名いた。恐らくは、彼らが母さんに倒されたGMなのだろう。真のクエストクリアの条件である五名のGMが、今此処に集結した。

「GMの権限を行使して、俺様のサブア力を殺したまではよかったが、詰めが甘いとは正に貴様のことを言うのだろうなあ」

父さんがGMの権限を行使して、GMが決闘エリア内への途中参加を可能としたことにより、ローランドは此処に門を繋ぐことができた。マルベラもまた同じく。

「これで貴様は死ぬ。現実世界では貴様の身柄を拘束するために、他のGMたちが用意を始めているからな。……そして、あとは此処にいる奴らの記憶を弄るだけだ」

背筋が凍るかのような目を向けて、じろりと辺りを確認する。

プレイヤーたちは、固唾を呑んで動向を見守っていた。だが、それは呆気なく終焉を迎える。

「ローランド、私たちを此処に閉じ込めたということは、逆に

言えば……キミたちもまた此処に閉じ込められた、ということになるのを理解しているか？」

ふいに、父さんが口を挟む。

死に至る寸前に、一体何を言い出すつもりなのか。

「……何が言いたい？ ギルバ」

「最大の敗因は、魔王を復活させてしまったことだ。……生まれたての魔王が存在することによって、お前たちは此処にいる全てのプレイヤーの記憶を改ざんする間、ログアウトすることができない。

……その意味が、まだ分からないのか？」

父さんは口元を和らげ、今までの苦勞が報われる瞬間を迎える。

「お前は、私との賭けに負けたんだよ？ ローランド」

アバターが、消える。決闘エリア内に存在していたはずのGMゲーム・マスターが一人、死に至る。

だが、それは同時に、真のクエストクリアの達成までに、あと一歩となったことを意味する。

父さんは、最後の力を振り絞り、喉の奥から限界まで声を荒げると同時に、E G Oから姿を消してしまった。

「GMゲーム・マスターの権限を行使し、全てのプレイヤーに魔王討伐クエストへの挑戦権を与えるッ」

意図に気づくか否か。

全てが罠であり、予め父さんが作り上げていた計画の一部であったか否か。

真実を知った時、既に奴らは手遅れだ。ローランドとマルベラは、父さんの言葉を耳にして、最も愚かしい事態に陥ったことを理解する。

「まさか……ギルバ、貴様……ッ」

死に至り姿を無くした父さんの名を呼び、ローランドがぎりぎり
と奥歯を噛み締める。

「ルーツ」

それから一拍を置き、オレの背に声が掛けられた。

振り向いてみれば、宙を舞う死神がオレの許へ翔ける姿を見つけた。

「ロアッ」

彼女の名を叫び、手を差し伸べる。

その手をギュッと握り締め、ロアはオレの胸に抱かれた。

「此処でお前と一緒にいられるとは思わなかったぞ、ロア」

父さんが、魔王討伐クエストの解放を命じた。それが切っ掛けとなり、ロアを含む全てのプレイヤーが決闘エリア内への侵入を可能とさせている。

「……でも、まだ終わってはいない。オレたちが倒すべき相手は、目の前にいる」

魔王の声が、全てのプレイヤーの耳に届けられる。

これもまた、父さんの手によって齎された必然だ。全ては、計画の一部だったのだらう。

「くっ、……魔王ッ」

慌てふためくマルベラの前に、ローランドは魔王たるオレを睨み付け、殺気をぶつけている。

しかし残念かな、何処からどう見ても、ローランドの姿は、勇者には見えなかった。

そして、今からオレが口にする全てのプレイヤーに向けた魔王の台詞によって、奴らは更に追いつめられることになるだらう。

「生まれたての魔王より、魔王軍並びに勇者軍の全てのプレイヤーに告ぐ……」

ゲイト

全ての門を制覇し、王者の証を手に入れること。それは勇者軍の全てのプレイヤーが一つの目標として掲げているものだ。しかし、EGOのシステムによって現実世界でも死に至ることを知ってしまったプレイヤーは、悠長にも王者の証を探している場合ではない。けれども、それとは別にもう一つだけ、魔王軍のプレイヤーを含めた全てのプレイヤーを、ウィルスから解放する手段があった。

それは真のクエストクリア条件だ。

黒と白、そして魔王軍と勇者軍。これまでの一年間、決して重なり合うことのなかった存在が、今此処で、魔王の台詞の下に、一つとなる。

「ゲーム・マスター
GMを殺せ」

一瞬の静寂、そして咆哮。

その言葉を合図に、静寂が逆転する。

傍観者であったはずの魔王軍と勇者軍のプレイヤーが、互いに力を合わせ、決闘エリア内へと押し寄せてきた。

「ぐうぐうぐう、魔王おおおつ、貴様あああああつ」

人狼族に相応しく、ローランドが雄たけびを上げた。

「ゲーム・マスター
GMとしての権限を行使してえ、全ての門番を召喚するわあつ」

現状に慌てふためくかと思いきや、意外と冷静に周囲を観察していたマルベラは、楽しそうに笑いながら応戦する。……否、アレは元から狂っているに違いない。不利となった状況においても嬉々としているのが証拠だ。ローランドとは別の意味で、奴も狂っていた。「喜ばなさい、貴方たちが一度も見たことのない門番を召喚してあげたんだからねえ」

四名のGMを守るのは、計十体の門番だ。ゲート・キーパー。その中でオレが戦ったことがあるのは、七の門の門番のみ。セット・ゲート・ゲート・キーパー。他の顔は見たことがない。どいつもこいつも強そうな奴らだ。

ステータスだけを比べるのであれば、カンスト状態のGMとは大差はないと言えるが、HPに関しては別だ。EGOにおけるボスモンスターの役目を果たすため、門番には膨大な量のHPが備わっている。彼らを倒すのは、相当に骨が折れる作業と言えるだろう。

…… 勿論、通常であれば、だが。

此処には、魔王軍と勇者軍を合わせて百万を超えるであろうプレイヤーが集結しているのを忘れてはならない。たとえ門番が圧倒的な強さを誇っていようが、こちらもまた同じように圧倒的なまでの

数によって、戦況を支配するだろう。

つまりは、GMを殺すのも時間の問題ということだ。

「ッ、行くぞ、マルベラ」

「はあい」

ゲーム・マスター

二名のGMにこの場を任せ、ローランドはマルベラを連れて姿を隠すことに決めたようだ。記憶の改ざんが行われるまでの間、耐え凌ぐ道を選択したことになる。

だが、奴らの思惑通りにはさせない。

「ルイツ、此処はあたしたちに任せなさい」

「私の仲間も此処にいるわ。だから、安心して行きなさい」

「ノーラツ、母さんっ」

気付けば、すぐそばに二人がいた。そしてその後ろには母さんの仲間と思しきプレイヤーの姿があった。彼らは、EGOの開発チームの初期メンバーであり、母さんと共に脱退した仲間だ。更にその後ろには、我先にと観客席を飛び出すプレイヤーたちが視界に映り込む。彼らもまた、オレの言葉に賛同してくれたのだろう。或いは、お祭り騒ぎ的な感覚なのかもしれない。

「　　ロア、行くこっつ」

「ええっ」

躊躇している余裕はない。

オレは、ローランドとベイクルアを倒す。そして全てのプレイヤーをウイルスシステムから解放してみせる。

だからオレは、ロアと共にローランドの背中を追いかけた。

魔王討伐闘技場の決闘エリア内には、様々なダンジョンが存在する。それは恐らく、勇者軍のプレイヤーが魔王を相手取り一対一で戦うに有利な場所を選択可能とするためだろう。

そんな中、オレとロアが足を踏み入れたのは洞窟のダンジョンだった。

「見失ったか？」

天井にくくりつけられた人工的な光が、闇に包まれた空間にぼりぼりつりと明かりを灯す。

闇属性であるオレとロアには、有利なダンジョンと言えるだろう。しかしそれはローランドにも同じことが言える。油断は禁物だ。

「SEAが何のために存在するのか忘れたの？ あなたのステータスなら、彼らを見つけ出すことも不可能ではないわ」

指摘され、オレは気付いた。

初期ステータスがコスト状態にあるオレは、索敵に関しても同じだった。

マルベラや門番を倒すこと^{ゲイト・キーパー}によって振り分け値を獲得することができたが、どうやら魔王討伐クエストにおける魔王のステータスは255で固定されてしまうらしい。そのため、オレが振り分けたポイント^{ポイント}は決闘エリア内に限定して無効となっている。これはあくまで、挑戦者との差をつけすぎないための処置だが、今回に関しては痛手となっていた。

しかし、それでもオレのステータスは255で固定されているので、通常のプレイヤーに比べれば全てにおいて勝^{まさ}っているので、索敵も有効だ。

「少しだけ、静かにしておいてくれ」

耳を澄ます。洞窟内の端から端まで、人の気配をしっかりと感じ取る。

すると、二つの足音が響くのを捉えた。

「こつちだ」

幾重にも枝分かれした洞窟内において、一度でも迷ってしまえば外に出ることも困難となるだろう。だが、今は出口の心配をしている場合ではない。タイムリミットが来るまでに、残る一名のGMゲーム・マスターである、ローランドを倒さなくてはならない。

暗闇に支配された空間を、オレとロアは全速力で駆けていく。ロアがついてこれるか心配になり、一度振り向いてみたが、どうやら問題はないようだ。オレの足に後れを取らないということは、恐らくは敏捷を集中的に上げていたのだろう。安心して、オレは前へと進んでいく。

やがて、足音が止まった。

それに従い、オレとロアの二人も立ち止まる。視界の先に映るのは、洞窟内にしては随分と天井の高い空間だった。洞窟内の最深部に違いない。此処で決着をつけるつもりなのか、光の下に黒い影が一つ、差し込んだ。

「……ローランド」

ゲーム・マスター最後のGMの名を口にする。

ローランドは、壁に背を向けて、オレを待ち構えていたようだ。

「初めから貴様らタスピール家とは意見が合わなかったのだ」

もっと早くに気づくべきだった、と付け加え、腰に差した長剣をゆっくりと引き抜いていく。

ローランドが手にした武器、それは聖剣カリブルヌスだ。

「その武器を魔王軍が持つていてもいいのかよ」

「構わんさ、此処では俺様がルールなのだからな」

聖剣カリブルヌスには、苦戦を強いられた。

父さんに助けられていなければ、死に至っていたとしても不思議ではない。

「記憶の改ざんを終えれば、すぐにでもログアウトを実行に移そうじゃないか。そうすれば、此処に残されたプレイヤーの中で事実を

知る者はいなくなる。EGOのウィルスシステムが現実世界で公になることもないだろう。……だが、貴様だけは別だ。この俺様の顔に泥を塗った代償は、その身を持って晴らしてやらねば気が済まないのではな

人狼の唸り声が洞窟内に木霊する。

だが、それがオレの思考に一つの疑念を与えることになった。

オレの隣には、ロアが並んでいる。

では、ローランドの隣には誰がいるのか。

「ロアッ、後ろだっ」

「ッ」

マルベラの姿は、何処にも見当たらない。

二つあったはずの足音が、いつの間にか一つになっていた。

何故ならば、オレたちが追っていたGMのうちゲーム・マスターの一人は、空を飛

ぶことができるからだ。

「くっ」

オレの声に反応し、ロアは体を反転させることなく水の壁を生み出す。ほんの少しの動作の遅れが命取りとなることを、ロアは知っていた。マルベラと命を懸けて戦うのは、これが二度目だからだ。

「あつたりいいいっ」

人狼の低い声に、炎の精霊の笑い声が混じり合い、辺りに赤を灯し出す。

赤紫に燃える炎の矢が、後方から解き放たれる。

ロアが作り出した水の壁は、炎の球体から身を守ることができなかった。そして今、マルベラが放った炎の矢は、それよりも更に魔力を凝縮し、威力を高めていた。攻撃を防ぎ切ることは不可能とも思えた。だが、

「え、……なっ、なによこれえっ」

水の壁の中から、横向きに水柱が飛び出した。

水柱とぶつかり、炎の矢が消滅する。しかし、水柱はまだ勢いを失っていない。水の壁から水力を得て、なおも攻撃の手を休めな

った。

攻撃と防御、二つを兼ね備えた魔法を前に、炎の精霊が空に舞いながらも溺れていく。

「うぎっ、がぼっ、ごぼば……っ」

炎の渦が威力を弱め、マルベラが地に落ちる。

その間、オレはローランドの攻撃を受けていた。

「魔王ッ、貴様は二度死ねッ」

まずは長距離からの攻撃により、光り輝く閃光を洞窟内に奔らせる。

しかしながら、オレは目で追うことなく、ローランドの姿にだけ注目していた。

「同じ技を二度も喰らうとも思ったか、ローランドッ」

音速を超え、光の速度で奔りゆく魔法に対抗する手段は、ほとんど存在しない。

だが、目で捉えきることが不可能なのであれば、ローランドが攻撃を放つ瞬間を逃さないようにすれば、光が奔る前に対処することも可能だと考えた。

そして、それは確かな手ごたえを感じた。

「ぬう、おのれ貴様アッ」

攻撃が行われる瞬間を捉え、外套を翻すことで盾を生み出した。

光から身を守るには、闇を支配すればいい。

闇属性であるにも関わらず、光に力を求めたローランドには得ることができないものが、此処には山ほどあった。そしてオレは、それを利用した。黒に染まる外套には、闇によって力を増す付加能力が備わっている。それを応用し、オレは光の魔法を反射させたのだ。「まだ攻撃は終わっていないぞ」

光を反射すると同時に、オレは黒剣を振り抜く。

黒い粒子が飛び散り、光と闇のコントラストを描き出す。

「むっ、貴様ッ」

聖剣カリブルヌスを手にオレの許へ駆けるローランドは、標的を

見失う。

闇が光と重なり合い、目晦ましの役目を果たしたのだ。目を合わせることもない敵を相手にすれば、魔王の台詞によって視力を奪うことはできない。しかしながら光を操る者に対しては別だ。オレが持つ黒剣は、聖剣カリブルヌスとは対極の存在であるかの如く、闇を支配する。

「闇を纏え」

そして、オレは魔王の台詞を口にする。

オレが目を向けた先に存在するものを、闇に襲わせる魔法だ。

「見誤ったか、魔王ツ、俺様に闇が通じるとでも思っているか」

「誰がお前を狙うと言った、ローランド？」

言葉を遮り、オレはローランドを迎え撃つ。

互いの剣を振るい合い、闇と光がぶつかり合う。だが、

「ッ、なんだこれはっ」

闇が、聖剣カリブルヌスを包み込んでいた。

聖なる光が失われ、闇が支配する。それは聖剣カリブルヌスの効力を失わせるには十分だ。

「オレも闇を失うのは怖いものでな、だからお前の光を奪うことにした」

「貴様あああっ」

光を奪えば、聖剣カリブルヌスによって闇を掻き消されることもない。空気の流れを自在に操られる心配もない。両者に残されているものは、互いが手にした闇と光を代表する剣と、あとはプレイヤー同士の地力のみだ。

闇に染まった聖剣カリブルヌスと、魔王が手にした黒剣が、外套を切り刻み、鎧を粉々にし、全身を真っ赤な血に染めていく。

オレとローランドが剣を交える中、すぐそばでは、宙を舞う死神と炎の精霊が、様々な呪文を唱え合い、文字通り火花を散らしていた。

「しつこいのよおっ、くそつたれの死神があっ」

ぶんつ、と片手を振り回し、遠心力を掛けて火炎の飛礫を繰り出す。

それを視界に捉え、一つずつ確実に身を避けていき、ぶつかりそうになれば短めの呪文を唱え、水の盾を生み出し、斜めに弾き飛ばしていく。

やがて、死神の左腕に絡みついた黒い鎌が、炎の精霊の首を捉える。

「消えなさい、残念な人」

ロアの声が、耳に届いた。それを合図に体を一回転し、黒い鎌で弧を描く。

軌道上には、マルベラの姿があった。黒い鎌は確実にその姿を捉え、鎌の先で襲い掛かる。

刹那、マルベラが笑みを浮かべながら姿を消す。

「ッ、何処に」

標的を見失ったロアは、辺りを見回す。

炎の塵を残したまま、目の前にいたはずのマルベラは一瞬にして姿を消してしまった。

「……………こおこおよおおつ」

「はっ」

何処からともなく、声が聞こえてきた。

声の主が何処にいるのか、ロアはすぐに理解する。頭上だ。

「ぐっ、……………かつ、かはっ」

けれども、遅い。炎の矢が胸に突き刺さる。

見る見るうちにロアの全身が炎に包まれていく。

「くふふう、……………貴方が戦っていたのはあ、わたくしの身代わりよ
お」

確かに、黒い鎌の軌道上にはマルベラがいた。しかしそれは炎によつて生み出された、実体のない存在だったようだ。攻撃されると同時に形を保つことが不可能となり、あたかも掻き消えてしまったかのように見せかける。ロアはそれに虚を突かれ、頭上を取られた。

だが、

「あなたも、同じような技を扱えたのね。残念な人」

全身を真っ赤に染め上げ、炎に身を焦がすロアは、何故か冷静だった。

それもそのはず、ロアには今のと似たような技を扱うことが可能だからだ。

「ひっ」

声にならない悲鳴を上げる。

一秒にも満たない僅かな隙を突き、ロアが持つ黒い鎌が緩やかな動きで炎の精霊の首に掛かり、そのまま刈り取ってしまった。

「これであなともおしまいよ、GM」
ゲーム・マスター

「しいにいいがぁみいいいいいっ!!」

ダメージを受けたわけでもなければ、現実世界で死に至るわけでもない。それでもマルベラは断末魔のようなものを上げ、頭部を失った胴体の手でロアの黒衣を掴もうともがき、虚空に手を向けた。

やがて、勢いを無くした炎の精霊は、赤い光を失い、ゆっくりとエフェクトが消滅する。

「GMであることに過信し、戦い方を学ばなかったのが敗因だと思
ゲーム・マスター
うわ」

ぽつりと眩き、既に消えてしまったGMにメッセージを言い残す。

「……でも、聞こえていないみたいけど」

それだけを伝え終わると、ロアはすぐに振り返り、オレに加勢するために宙を舞う。

「マルベラが消えたか」

鎧が赤に染まったローランドは、ロアの姿を視認する。仲間を失い、一人となったGMは、ゲーム・マスター苦々しい顔をしてみせる。

「ちっ、もう少し役に立つ奴を連れてくるべきだったか」

血の混じった唾を吐き、愚痴を漏らす。

「あんな奴でもお前の仲間なんだろ、お前を助けるためについてきてくれたんだ。もう少し有り難く思えよ」

「ふん、役に立たん奴に有難味など微塵も感じんな」

死神の加勢により、互いに距離を取る。

五メートルほどの間を開けて、ローランドは今もなお、闇に侵された聖剣カリブルヌスを手にしている。そして、オレは黒剣を握り直し、静かに息を吐く。

「マルベラは強制ログアウトさせたわ」

「そっか、ありがとよ」

黒い鎌によって強制ログアウトをされたマルベラは、今現在行われている騒動が終わりを迎えるまではログインすることができないだろう。ロアのように特殊なログアウト方法を用いる者を除けば、新たなログインとログアウトを実行に移すことはGMの権限ゲーム・マスターを行使しても不可能な状況だ。父さんに感謝しなければならぬ。

「ゲーム・マスターということは、残るGMはあいつだけか」

「そういうことね」

二人の視線の先には、人狼の姿を現したローランドが大きく肩を上下させ、呼吸をする。

「ルーイ、注意して。此処ではわたしも回復魔法を使えないみたいなの」

ローランドの様子を見て、ロアが口を開く。

どうやら、決闘エリア内では回復魔法が使えないらしい。それは

恐らく、魔王との対決が長引かないようにするための処置なのだろう。だが、そのおかげで、ローランドは自身が負った傷を癒すことができず、疲労が蓄積している。勿論、それはオレとロアも同じだし、しかしながらオレは一人ではない。死神のロアがついている。

あの時、マルベラを倒した際、レツカスが力を貸してくれたように、オレの隣にはロアがいる。今此処で恐れるものなんて何も無い。「……死を恐れなければ、此処では生き残れないだろう」

一歩、前に出る。

それに伴い、ローランドが身構えた。

「だが……死を恐れていては、目の前に立ちはだかる敵を倒すことも困難となるだろう」

視界の端に、ゆらりと黒衣をはためかせる死神の姿が見えた。

その左腕には、黒い鎌が巻き付いている。

「だから、オレは一切の恐れを持たずに、お前を殺す。今此処で、死神と共に……」

「残念だが、それは不可能だ。……何故ならば」

空気が震え、洞窟内に緊張が走る。

足に力を籠め、合図となる言葉を今か今かと待ち望んでいるのがよく分かる。そして、

「魔王ツ、貴様の相手は俺様なのだからなあっ!!」

再び、魔王と人狼が、互いの剣をぶつけ合う。

余力を残さずに全力でぶつかり合い、どちらか一方の命が完全に削り取られる時が訪れるまで、もう誰にも止めることはできない。

「黒に奔れ」

魔王の台詞を口にする。

瞬間、オレとロアの全身を黒い霧が覆い始めていく。オレと共にパーティーを組む閻魔性のプレイヤーのステータスを一定時間のみ上昇させることが可能な魔法だ。

「小細工など無意味だっ、今此処で貴様は死ぬのだからなあっ」
ぶんっ、と空気を凧ぎ、聖剣を縦に振り切った。

横手に黒剣を構え、オレはローランドの攻撃を受け止める。

「それはオレの台詞だ、ローランドッ」

敵の動きを止め、上空から背後に回ったロアが黒い鎌で首を刈り取る動作に入った。

「くははっ、貴様らの考えなど全て見通しているぞおっ」

右手に聖剣を握り、ローランドは背後に目を動かす。

短めの呪文を唱えると、空いた左腕をロアに向けるかと思いきや、地面に向けて解き放つ。

「ッッ」

魔法の影響を受け入れた地面が、砂煙を巻き起こし、ローランドの首に狙いを定めていたロアの許へ一直線に伸びていく。

「言い忘れていたが、GMゲーム・マスターたる俺様は地属性の人狼族だっ、此処では貴様以上に分があることを理解するのだなっ!!!」

通常、魔王軍のプレイヤーは光属性を、そして勇者軍のプレイヤーは闇属性を選択することができない。しかしながら聖剣を手にするローランドだけは、GMゲーム・マスターの特権として、魔王軍のプレイヤーでありながら光属性であると考えていたが、ローランドは地属性だった。洞窟内は、土と岩で作られた空間だ。闇が支配しているとはいえ、相手もまた魔王軍のプレイヤーであることには変わらない。聖剣の力を封じるのが精いっぱいだ。しかし、ローランドは地の利を活かすに十分な条件を満たしていた。

「ぬんっ」

もう一度、呪文を唱える。先ほどとは異なり、今度は少し長めの魔法だ。

すると、ローランドの両足に地面が絡みついていき、全身を覆っていく。巨大な土の鎧を身に纏い、更には力も増してきたようだ。剣を交えるオレの腕が、じりじりと押されつつあった。

「たとえ闇に力を借りようとも、貴様らのようなゴミ虫共には俺様を倒すことは不可能であることを思い知らせてくれようっ」

筋力が増強し、オレの体を支える足が震え始める。あまりにも強

大な力を前にして、地面がへこみ出していた。

「ロアッ、無事かつ」

一方、巨大化した竜巻に呑み込まれ、天井に叩きつけられてしまったロアは、未だ脱出することができずにいた。

思うように呼吸ができず、手で口を覆い隠し、砂が入らないように目を細めている。

「人の心配をしている場合ではなかるうが、魔王ッ」

「ぐっ、うぐうっ」

辺りに舞い散る砂が体に張り付き、力を限界まで振り絞ることで大量の汗を掻き出す。

それでもまだ足りない。互いにカンスト状態のステータスを持つ者として、優位に立つには絶対に負けないという気力が必要不可欠だ。

「死に踊れ」

「ッ、うぬうっ」

目が、合った。

それを決して見逃さず、オレはすぐさま魔王の台詞を口にする。

「貴様ッ、またこの技があっ」

不意に、力が抜ける。ローランドが全身の自由を奪われたのが原因だ。

隙を見せたつもりはないだろうが、それでも魔王たるオレを相手にする際には、目を合わせるだけで死に直結することを理解しなくてはならない。

「全身隙だらけだぞ、ローランドッ!!」

この機を逃すことなく、オレは右足を左足に掛け、その場で華麗に回転し、反動を利用しながら土の鎧に剣身をめり込ませる。しかし、浅い。見た目には全く傷がついていない。

「無駄だ、この空間において俺様を倒す術すべなど存在はしないっ」

唸り声を上げ、洞窟内に咆哮を響かせる人狼の前に、オレは黒剣を両手に構え直して力を籠める。そして、一切の迷いもなく、勢い

に任せて突き上げる。

「はああっ」

鉄や青銅で作られたわけではなく、ただの土で固められた鎧だ。黒剣の威力を持ってして突き抜けないわけがない。

だが、それは此処が洞窟の中でなければの話だ。

「バカがっ、貴様如きが俺様の鎧を突き抜けるとでも思ったかつ」

剣先が、鎧の一部を剥ぎ落す。けれども、そこまでだ。それ以上先には進まない。進めない。

地の利を活かした土の鎧は、黒剣の突きに耐えてしまった。

「貴様の攻撃が解除の合図となり、俺様は自由の身となった！ そしてまた貴様に死の縁を見せてくれるわっ」

死に踊る時間が終わり、ローランドが再び動き始める。どうやらオレはローランドが隙を見せたと勘違いしていたようだ。

土の鎧を身に纏ったローランドには、隙など微塵も見当たらない。此処にいる限り、ローランドを倒すことは困難だ。しかし、奴を此処から外に出す方法などない。今此処で、オレたちが奴を倒さなければ、今までの苦労が全て水の泡となる。それだけは絶対に避けなくてはならない。魔王たるオレが、この手で決着をつけなくてはならないのだ。

「ふっ」

外套に顔を覆い、息を吸う。

危険を察知し、瞬時に間合いを取り、オレは上空に囚われたロアの姿を視認する。

「浄化の黒へ」

三度、^{みたひ}魔王の台詞を口にする。

HPBに目を向ければ、オレに残されたHPは全体の三割を切っていた。

しかし、惜しむことはできない。今のオレは一人ではローランドを倒すことはできないことを理解している。仲間が必要だ。オレに力を貸してくれる死神のロアがそばにいてくれなければ、オレは全

力を出し切ることができない。

だからこそ、オレはロアを助け出す。

「っ、ぐ……あ、かはっ」

魔王の台詞の下に砂埃が消え去り、上空よりロアが解放される。

それを見たローランドは、口元を意地悪く歪めた。

「我が身を削ってまで役立たずを助けるとは、魔王の名に相応しくない奴め。貴様が死した後、魔王の役目を担うのはやはり俺様が妥当か……くくっ」

「誰が魔王に相応しくないと、ただの人狼さんよ？」

オレの許へふらふらと舞い降りてきたロアを抱き寄せ、オレは挑発の意味を込めて声を出す。

閉まり切らない口の端から涎を垂れ流し続ける人狼は、表情を一変させた。

「魔王、ルイピスタ「タスピール……。貴様は、本当に生きる価値のない人間だ。……だが、同時に、俺様の手で殺すしか価値のない人間でもあるようだな……」

木々が根っこから栄養を得るかのように、ローランドの鎧は地面から土を足に纏わせ、この空間全てと一体になり、全身を覆っていた。更には、闇を光で掻き消すことができないのであればと、土化粧によって聖剣を変化させていく。

「大丈夫か、ロア」

「……っ、心配ないわ」

ロアは、舌に付いた砂を口の中で集め、地面に吐き出す。

HPBを確認してみると、継続的なダメージによって、ロアのHPも四割方減少していた。

強烈な一撃を喰らいでもすれば、後がない。

「……強がりな死神だな、ったく」

唾を呑み、喉の通しを良くする。辺りには砂埃が舞い散り、視界を塞ぎつつあった。地属性のローランドは例外として、オレとロアは満足な呼吸すら困難な状況と言えるだろう。

「後悔なんてしていないわ。だって、あなたと出会うことができてわたしは……」

もう一度だけ、外の世界を夢見ることができたから。

小声で囁きかけ、ロアは口を閉じてしまう。横目に表情を確認してみれば、頬を赤に染まっていた。泣かないくせに恥ずかしがり屋な死神め。

「……ロア、お前の夢を此処で終わらせるわけにはいかない」
再び、前を向く。

戦いの場を支配しているのは、土の鎧を身に纏ったローランドだ。しかし、奴には持ち得ないものが、此処には存在する。

「あいつを倒したらさ、現実世界でも会いに行くよ。……そして、お前を助け出してみせる」

オレのそばには、ロアがいる。

マルベラを失ったローランドは、魔王と死神を相手に一人で戦わなくてはならない。

どちらが不利か、オレには分からない。……だが、絶対に負けるわけにはいかないのだ。

「さあつ、来るがいい、魔王と死神よッ！」

「行くぞ、ロアッ」

「ええっ」

勢いは止まらない。もはや決着がつくまで、肩を休めることもないだろう。

洞窟内の広さを再度確認し、オレは左へ走り、ロアは右へと翔けていく。この空間の中心に仁王立つローランドは、オレの姿を目で追った。

「消えなさい、残念な人ッ」

右方上空より、ロアの声が空間内に響き渡る。

黒い鎌を十字に振り抜き、巨大なかまいたちを繰り出した。

「無駄だ、貴様など相手にならんっ」

けれどもローランドは背後を振り向くこともなく、背を向けたま

まかまいたちを受け止める。

先に殺すべき相手は、あくまでも魔王たるオレなのだろう。

「はあっ」

動きに反動をつけ、左から右に移動する。

虚を突いた動作に身を翻す人狼は、足元が疎かになっていた。

黒剣を低い位置で横一線、足の脛すねを切り抜く。しかしながら土の鎧によって守られているため、傷一つ付けることができない。

「無駄だ無駄だ、貴様らのちやちな攻撃で俺様のHPを削れるとも思ったかあっ!!」

ローランドは、地の利を活かすことによつて、多大なる恩恵を得ている。防御の面に関して言えば、恐らくは鉄壁と評するに相応しいだろう。だが、欠点が一つだけ存在する。それは動作の有無だ。

地に足を絡ませているので、どんなに優れた敏捷力を誇っていたとしても、土の鎧を身に纏う時点で無と還す。此処で終わらせるつもりでなければ実行に移すことのできない、もろ刃の剣と言えよう。但し、それには絶対の自信を持っているからこそ、ローランドは足を捨てたとも考えられる。現に今、オレとロアの攻撃は全く通じていなかった。

「たとえ大剣が無くとも、今の俺様には地震を起こすことなど造作もないわっ」

聖剣は右に、空いた左腕に捻りを加え、地面を叩き割る。

土が割れ、歪ひずみが生まれ、薄暗い洞窟の中に大規模な地震が起こってしまう。

「くっ、正気か、ローランドッ」

洞窟のように閉じ込められた空間で人工的な地震を引き起こすなど、明らかに無謀とも言える行為だ。それを知った上で、ローランドは何度も地面を殴り続けていく。

「ふふ、ふははっ、地の利を得た俺様には関係のないことだっ、身動きの取れない魔王をなぶり殺しにしてくれるわっ」

「狂ってやがる……っ」

地震による影響を受けるのは、何もオレとローランドだけではない。宙を舞い、足場を必要としないロアでさえ、同じだった。

最奥部の広い空間とはいえ、外に比べればそれほど自由に動き回れるわけではない。そんな中で、地震を引き起こし、天井の至る所が崩れてきては思うように飛ぶこともできないだろう。

「貴様らは何か勘違いをしているようだが、この俺様が身動き取れないとでも思っているのか」

不意に、ローランドが問いかける。

それは唯一の欠点を無くす行為でもあった。

「初めに言ったことを忘れたわけではあるまいな、魔王ツ、俺様は地の利を得たのだぞっ」

地面を殴るのを止めると、ローランドは雄たけびを上げ始める。

それを皮切りに、ローランドに土の鎧を与える洞窟全体が鼓動を開始し、足元から力を加えていく。

「この状況下において、地震によって身動きが取れなくなったのは貴様らなのだっ!!」

土によって地面と繋がれた部分が、命を得た生き物のように蠢き出す。そして、土の鎧を身に纏って以降その場から一步も動くことのなかったローランドが、自由に動き始めた。

「ちいつ、化け物がよっ」

「それは貴様も同じだろう、生まれたての魔王ツ」

地に足をつけたまま、地鳴りと共に突進し、距離を一気に詰めてきた。

土に塗り固められた聖剣を振りかざし、オレの頭部を捉える。

「……がっ」

黒剣を盾に、ギリギリのところを身を守り抜く。だが、危険が去ったわけではない。

ローランドは再度、左腕を限界まで捻り上げ、回転を加えた打撃攻撃に転じる。

「くははっ、見るも無残に吹っ飛んでしまったなあ、魔王！」

ガードの甘くなっていた腹部に直撃し、オレは後方へと弾き飛ばされてしまう。

「ちょこまかと動き回る鼠も同じ目に遭わせてくれようっ、ぬんっ」

「ッ、くっ」

ふらふらと宙を舞い、そんな中で新たな呪文を唱えていたロアに向けて、ローランドが腕を振る。すると空気の波が砂埃と共に押し寄せ、ロアの姿を捕えた。 衝撃波だ。

「ッ、まだ……終わらないッ」

空気の重みに耐えきれず、洞窟内の端へと飛ばされていくロアは、それでも呪文を唱え続ける。そして、長めの呪文を言い終え、ローランドに向けて解放する。

「むっ、貴様何を」

言い終わる前に、ローランドの頭上から大量の水が出現し、巨大な滝を作り出した。

「ごぼっ、……が、ぐうっ、……おのれい死神めがっ、こんな技で俺様の動きを止めることができるんでも思ったかっ!!」

「 思っているわ」

人狼の雄たけびに混じり、ロアの声が耳に届く。そしてもう一言、付け加える。

「……だってそれ、凍るもの」

壁に激突し、残るHPが二割に落ち込んだ死神は、ゆらりと地面に落ちていく。

そしてオレは、力を使い果たした小さな死神の体をしっかりと抱き留める。

「な……なんだ……? ……これは、体が……ッ」

全身に水を浴びたローランドは、土と共に凍りついていく。地面と繋がれているので、逃げようにも不可能だ。

「……なあ、ローランド。土の鎧による鉄壁の防御が売りのようだが、やはりお前には欠点の一つだけあったよ」

一步、人狼の許へ近づく。

地震によってひびが入り、揺れに足元をふらつかせながらも、更に一步、近づいた。

「ローランド」ベイクルーア、……仮想世界とはいえ、顔を傷つけられるのは嫌いか？」

ゲーム・マスター
目の前に立つGMの名前を呼び、オレは黒剣の先を向ける。

その先にあるのは、ローランドの顔だ。

たとえローランドが地属性であり、砂埃ですらも影響のない状況下にあるとしても、一つの命を持つアバターである以上、呼吸だけはしなくてはならない。

それは同時に、鉄壁とも思えた土の鎧の弱点を曝け出してもいた。

「さよなら、残念な人」

オレの胸に抱かれたロアが、死神に相応しい言葉を口にする。

「黒に奔れ、そして、闇に死ね」

だからオレも、死神の真似をすることに決めた。

魔王の台詞を二つ同時に口にして、オレは最後の力を振り絞る。

動きを止めた人狼を視界に捉え、魔王の台詞によって闇の力を得たロアが、オレの胸に抱かれたまま、ローランドを目掛けて空を翔ける。

夜森の庭で、オレとレツカスがそうしたように、此処でもまた、

オレはロアと共に同じ技を繰り返す。残る一人のGMを殺すために、ゲーム・マスター

両手に黒剣を握り締めて

「ぐううううっ、魔王おおおお ツー！」

人狼の雄たけびが、洞窟内に木霊する。

だが、それを黙って聞く者は誰一人存在しない。

「あばよ、GM」
ゲーム・マスター

ロアがオレの両手を包み込み、二人で黒剣を握り締め、怒声を上げる人狼の喉元に狙いを定め、一切の迷いもなく突き刺す。

「がっ、あ、あがあっ、……かひゅっ」

閉まらなくなった口元を動かし、首の下まで凍りついた人狼は、

喉を鳴らす。

「残念だが……ローランド、お前には死神の黒い鎌を使う気にはなれないな」

強制ログアウトをさせるつもりはない。知覚を感じ取ることができないとしても、精神的な苦痛を存分に味わわせたまま、死に至る姿を最後まで見ることにしよう。

「あ、……あぁっ、ま……おう……っ」

呻き声を上げ、ローランドは全身の力が抜けていく。HPBに目を向けてみれば、既にレッドゾーンを超え、ゼロになっていた。やがて、アバターの点滅が始まる。

それ以上は一言も発することもできず、一瞬の静寂を境に、呆気なく四散した。

「……っ、いててっ」

突き刺したはずの対象が姿を消してしまったため、オレとロアは勢い余ってその場に倒れ込んでしまった。辺りには、土の鎧の残骸が砂と化している。

「……倒したのか？」

共に戦い抜いた仲間に向け、問いかける。
すると、泣かない死神は笑みを浮かべた。

「ええ、倒したわ……。最後のGMを……」

感極まるものがあるのだろう。ロアは泣くのを我慢しているようにも見える。

ローランドは「ベイクルリアを倒し、真のクエストクリアを達成したのだから当然だ。すると、

「……ロア」

「ええ、聞こえているわ」

EGO内部に存在する全てのプレイヤーに宛てたアナウンスが流れ始めた。

内容は、至ってシンプルだ。

魔王軍と勇者軍が力を合わせて、全てのGMを倒したことにより、

真のクエストクリアを達成したこと、そして現実世界におけるウィルスシステムの解放についての説明だ。

本来であれば、ウィルスシステムに関しては寝耳に水の話になるはずだった。しかし、父さんの策略により、それは全てのプレイヤーの知るところとなっているのです、今更驚愕する者などいないだろう。

やがて、アナウンスが終了する。同時に、辺りを覆っていたはずのエフェクトが、ローランドの引き起こした地震と共に崩壊を始めた。

「……お別れね、ルーイ」

人工的な光は失われ、洞窟内には暗闇が支配している。

そんな中、オレとロアは身を寄せ合い、互いの感触を確かめ合う。たとえそれが現実ではないとしても、今此処に存在する二つの温もりを感じ取ることはできた。

「心配ない。……きつとまた、すぐに会えるさ」

砂埃が舞い散り、喉の奥に入り込む。しかし、それでもオレは最後まで話すのを止めない。

此処で、ロアと言葉を交わすことができるのは、これが最後になるかもしれないのだから。

「あなたのこと……ずっと、待ってる」

耳元で囁き、闇に隠された死神の表情が、目と鼻の先に浮かび上がってくる。

赤に染まった瞳は、閉じられていた。

「必ず、迎えに行くよ。……だから、少しだけ待っていてくれ」

ロアと共に瞳を閉じ、暗闇に身を任せる。

それから、オレたち二人は最期の時が訪れるまでの僅かな間、どちらからともなく唇を重ね合い、二度目のキスを交わした。

生まれたての魔王と泣かない死神の物語は、此処で一つの終焉を迎える。

そして、オレとロアを含めた全てのプレイヤーが、現実世界へと戻って行った
…

父さんの証言を基にエンドレス・ゲート・オンライン 通称？ EGO？の裏のシステムが明るみに出てから半年後、EGOはコンピュータネットワーク上での稼働を停止するかに思えた。だが、EGOにログインしていた九割以上のプレイヤーたちの存続活動も相まって、現在ではウィルスシステムを取り除いた安全なMMORPGとして稼働を続けている。

母さんと共に脱退した開発チームの初期メンバー四名と口裏を合わせることよって、父さんはEGO内部への潜入捜査を行っていたことになり、現実世界において罪に問われることはなかった。父さんと母さんは再婚し、また家族揃って暮らすことができるようになったことが、何よりの幸せだと言えるだろう。

ウィルスシステムを開発したローランド^{ゲーム・マスター}、並びにマルベラ^{ゲーム・マスター}、エトリーナを含むGMは、今となっては彼らが囚人となり、手足として利用していた囚人と共に服役中だ。

「 さあ、着いたぞ」
そして今日、オレは父さんと母さんに連れられて、とある場所へ足を運んでいた。

父さんに促され、車を降りると、そこにはテレビで見たことのある建物があった。

「 此処つて、まさか……」

「 そう、此処はEGOの開発本部があった場所よ」
問いかけるまでもなく、母さんが答えを口にする。

此処は、父さんと母さんが働いていた思い出の場所だ。

「 ルーイ、行くぞ」

声を掛けられ、オレは言われるがままについていく。

記者やテレビ局の人間の姿は全く見当たらない。事件から半年も経っているのに、話題としても風化しつつあるのだろう。全世界で

一千万人以上の命を我が物とした事件であり、オレ自身も当事者でもあるので、それがほんの少しだけ寂しくもあつた。

表口は封鎖されており、裏手にある非常口から階段を上って二階へと向かう。

長めの廊下を通り、父さんは一番奥の部屋の前で、立ち止まった。

「これが、最後の門だ。……お前の手で、開けてあげなさい」

それだけ言い残し、父さんと母さんは、オレを一人残して戻って行く。

「最後の門……」

E G Oには十二の門が存在し、それらを総称して無限の門という。

結局、全ての無限の門をぐぐり抜ける者はいなかった。けれども、今もまだE G Oは稼働を続けている。いつの日か、きっと、王者の証を手に入れる者が現れるはずだ。

「……ん、……あれっ」

ドアノブに手を掛け、ゆっくりと回していく。

だが、力を籠めて引っ張ってもドアが開かない。

「鍵が掛かっているのか？ ……くそっ」

せつかちな父さんだ。ドアの鍵を開け忘れていたようだ。

そう思ったのも束の間、向かい側から、聞き覚えのある声が聞こえた。

「うははっ、開くわきゃねえだろ、内側からドアノブ引っ張ってんだからよー」

「ッ、その声、まさか……レッカスカっ!？」

「ご名答、と返事が聞こえ、ドアが勢いよく開かれた。

「痛って、レッカスお前っ、もう少しゆっくり開けるよな、頭ぶつけただろ」

「すまんすまん、お前に会えて嬉しくてついイジワルしてみたくなつたぜ。許せ、ははっ」

これっぽっちも悪びれた様子もなく、レッカスが笑い声を上げる。そう、目の前にいるのは、仮想世界ではなく現実世界のレッカス

だった。

続いて、ほんの一時ではあったが、EGOにおいて共にパーティーを組んだ仲間たちが部屋の中から駆け寄って来た。彼らもまた元氣そうで何よりだ。そして、

「……あの」

^{ゲイト}門の奥で待っていた仲間たちの中で、最後に声を掛けてきた人物に、オレは目を奪われる。

椅子から腰を上げ、俯けがちの表情を少しばかり覗かせる少女は、声も姿も何もかもが半年前と全く変わっていない。ただ一部分、話し方を除いては……。

「ロア」

名を、呼んだ。

ずっと会いたかった彼女の名を、オレはようやく、口にすることができた。

「……はい」

EGOにおいて、常に気丈に振る舞い、泣かない死神を演出してきた小さな小さな少女が、手を伸ばせば触れることが可能なところに佇んでいた。

仲間たちの間を抜け、一步、彼女に近づく。

息を呑み、呼吸を止めているのだろうか。ロアの体は緊張に震えていた。

「初めまして、ロア＝アンノル」

「……初めまして、ルイピスタ＝タスピール」

現実世界で、生まれたての魔王と泣かない死神が再会する。

互いに手を伸ばし、絡め合い、仮想世界とは異なる感触を確かめ、温もりを感じ、そして、

「あ」

ロアの体を、強引に抱きしめた。

「もう、絶対に……離さない……っ」

半年以上前から、オレとロアは出会っていた。此处ではない、仮

想世界において。

だが、オレたち二人の願いは叶えられた。今此処で、初めて二人は出会ったのだ。

「……好きだ、ロア……お前のが大好きだ……」

仮想世界で芽生えた想いを、現実世界に戻り、彼女に直接伝える。

魔王の台詞を耳にした死神は、涙を零していた。

「わたしも、ルイーのことが……大好き……っ」

初めて出会った二人が、三度目のキスを交わす。

時が止まったかのような静寂の中、互いの唇の感触を確かめ合い、本当の幸せを感じ取る。

泣かない死神は、本日をもってその名に終止符を打つ。

現実世界の魔王の手によって、泣き虫な死神として生まれ変わったのだ

…

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7539x/>

エンドレス・ゲート・オンライン ~生まれたての魔王を殺せ~

2011年11月8日18時14分発行